

559

20



始







碧巖集講話

大正  
15. 11. 10  
内交



角是知牛火已煙  
態機自愧隨言詔  
西本祖道不得意





あまのついでに月夜天

大正西宮著

のぼるまを



本書の發刊に就いて

この本が出来た因縁を、筆記者たる私の責任として、一通り述べさせていただきます。

大正七年の秋、三菱社内の同志の賛同を得まして、當時日本俱樂部の禪話會に御出でになつて居られた高僧中で、特に秋野孝道老師に御依頼して、三菱禪話會を開くことになりました。

最初は、永平高祖の普勸坐禪儀を講話していただきましたが、會座の一同が大變有難く拜聴いたしました。次には是非碧巖集の講話を御願しやうといふことになつたのであります。碧巖集の開講は大正八年一月二十日でありました。初めは

本書の發刊に就いて



毎月一回として、一回に二則づゝ講話していたゞいて居りましたが、その内に、御話を伺つて居るばかりでなく、御經の讀誦も御願しやうといふことになつて、開講前に壁間に掛けられた観音様の尊像に御香を焚き、一同合掌禮拜して後、老師の御聲につれて、會座のものが一齊に普門品を讀誦することになりました。初めは一同の誦み振りも不慣でありましたが、度重なるにつれて、同音によく揃つて参りました。すると又これに飽き足らず、一回に二則の講話を一則に減じて、その時間を坐禪の御稽古に向けていたゞくことになりました。

そこで講話の會場も、會社の會議室から、三菱倶楽部の武術部の柔道を稽古する疊の上に移して、各自に正式の坐蒲ざふを作つて、讀經とともに、坐禪のお稽古を始めました。

この坐禪のお稽古は暫く續けて居りましたが、そのうちに洋服を著て坐るのが如何にも窮屈ですから、一通り坐り方が解つた上で、各自自宅で作ることにして、又元の讀經と聽講だけに致したのであります。

その後、大正十一年には、老師の支那祖蹟御巡拜があり、大正十二年九月にはあの恐しい大震火災があつて、一時休講の止むなき事情に立ち到りましたが、間もなく元のやうに開講するところが出来、それから引續き拜聽し、丁度足かけ八年後の今日、やつと碧巖百則の全講を拜聽し終ることが出来ました。一口に八年と謂つてしまへば何でもないが、此八年は可なり永い間であり、この永い間、耳順を超えられた老師が、毎月定日定刻には必ず御出で下さつた、時計の針の動くやうに



規則正しく御出下さつて、すべて私共が需むるまゝに、親切に且つ丁寧にごの講話を完結して下さい。ここは、碧巖百則の講話と共に、寧ろそれ以上に一層有難き實踐道德の身業説法を、私共にお示し下さつたこととして、深く感銘して居ります。老師の御人格に就ては、今さら私共が申上げるまでもありません。皆様御存じの通り、學徳並び高き御方でありながら、私共在家の者に接せらるゝ時は、理屈ばつた學究的のここを避けて、出来るだけ平易に、道に親ませやうといふ御親切な心を以つて、御説きになるやうに伺はれます。

この碧巖集を御講話下さるに就いても、著語とか評唱とかを省かれたのも、特に私共拜聴の際に於ける、頭の混雜を來さない様にこの御心配から來たのであります。

この講話は、前にも述べた通り、月に一則若しくは二則つゞ、足かけ八年もかゝつて、悠々ご拜聴したのでありますから、その間老師の御身邊にも種々の出來事があり、又世間の事情もいろいろ變遷して居ります。老師は時折りそれを講話の中に入れて御取り入れになつて、御話し下さつた様なこともありますから、自然この講話が、一氣呵成に續けられた他の師家方の講話や、著述を目的にした學者の述作とは、大いに趣を異にして居ると信じます。各則標題の下、に開講の年月等をそのまゝ記して置いたのは、特にこの邊の消息を知るたよりと思つたからであります。

元來禪話の筆記などは、全く不慣れな私であります。その私  
が筆記したところであるから、折角、老師の好い御話の眞髓を、十



分に記し傳へ得ない點が多々有るこゝも考へて、老師に對し、且つ又讀者方に對して、深く御詫びを申上げねばなりません。しかし一通り老師の御校閲を願つたことであるから、大過なきこゝも信じて居ります。

全體、私が、老師の御講話を、私自ら筆記し始めた動機は、他日これを書物にしやう、さうして人様にも法益を頒かたうと云つたやうな、深い考はありませんでした。私は日本俱樂部やその他の席で、老師の御講話を拜聽するたびに、老師の講話そのものよりも、寧ろ老師の人格に引きつけらるゝやうな感じがいたしまして、その徳を慕ふ餘り、講話を筆記して置いて、時々それを讀んで、間接に老師の風貌に接しやうといふ考から筆記を始めました。その筆記が積り聚つて、碧巖百則の原稿を成

したのであります。

ところが、私と同じく、老師の徳を慕はれる方々が澤山ありまして、その方々から請はるゝまゝに、老師のお許しを経て、これまで雑誌に載せたり、特に印刷にしてお頒ちしたこゝもありませんが、いよゝ全部が完結致しますと、それを纏めて一冊の書物として、出版して欲しいといふ希望の申出でも少くないので、老師の御諒解と御校閲を経、體裁校正等のこゝは、一切安藤文英氏を煩はすこゝにして、遂に、茲に本書が發刊せられるこゝになつたのであります。

こゝに本書發刊に際し、その發刊の來由を述べ、特に老師の御親切なる校閲の勞を感謝し、忙中の時間を割いて、本書の完成に盡力下された、安藤氏に御禮を申上げます。



大正十五年七月

水竹居士 赤星陸治謹識

碧巖集講話目次

序講	.....	一
第一則	武帝問達磨	四
第二則	趙州至道無難	二三
第三則	馬大師不安	三三
第四則	德山挾複子	四八
第五則	雪峰盡大地	五九
第六則	雲門十五日	七五
第七則	法眼答慧超	八〇
第八則	翠巖夏末示徒	九五
第九則	趙州東西南北	一〇五
第十則	睦州問僧甚處	一一五
第十一則	黃檗酒糟漢	一二四



第十二則	洞山麻三斤	一三九
第十三則	巴陵銀椀裏	一四八
第十四則	雲門對一說	一六一
第十五則	雲門倒一說	一六五
第十六則	鏡清草裏漢	一七五
第十七則	香林西來意	一八四
第十八則	肅宗請塔樣	一九五
第十九則	俱胝指頭禪	二〇二
第二十則	龍牙西來意	二一三
第二十一則	智門蓮華荷葉	二二二
第二十二則	雪峰龍鼻蛇	二三〇
第二十三則	保福妙峰頂	二三七
第二十四則	劉鐵磨臺山	二四八
第二十五則	蓮華庵主不住	二五四

第二十六則	百丈奇特事	二六四
第二十七則	雲門體露金風	二六七
第二十八則	涅槃和尚諸聖	二七四
第二十九則	大隋劫火洞然	二八一
第三十則	趙州大蘿蔔	二八九
第三十一則	麻谷振錫遶牀	二九三
第三十二則	臨濟佛法大意	三〇三
第三十三則	陳尚書看資福	三〇八
第三十四則	仰山問甚處來	三一九
第三十五則	文殊前三三	三二三
第三十六則	長沙一日遊山	三三二
第三十七則	盤山三界無法	三三六
第三十八則	風穴鐵牛機	三四五
第三十九則	雲門金毛獅子	三五二



第四十則	南泉如夢相似	三六二
第四十一則	趙州大死底人	三六八
第四十二則	龐居士好雪片々	三七六
第四十三則	洞山寒暑迴避	三八三
第四十四則	禾山解打鼓	三九四
第四十五則	趙州萬法歸一	四〇〇
第四十六則	鏡清雨滴聲	四一二
第四十七則	雲門六不收	四一八
第四十八則	王太傅煎茶	四二八
第四十九則	三聖以何爲食	四三二
第五十則	雲門塵塵三昧	四四三
第五十一則	雪峰是甚麼	四五二
第五十二則	趙州石橋略約	四六三
第五十三則	馬大師野鴨子	四六八

第五十四則	雲門近離甚麼	四七八
第五十五則	道吾漸源弔孝	四八四
第五十六則	欽山一鏃破三關	四九六
第五十七則	趙州至道無難	五〇五
第五十八則	趙州時人窠窟	五一四
第五十九則	趙州唯嫌揀擇	五一九
第六十則	雲門拄杖子	五二五
第六十一則	風穴若立一塵	五三三
第六十二則	雲門中有一寶	五三九
第六十三則	南泉兩堂爭貓	五四七
第六十四則	南泉問趙州	五五五
第六十五則	外道問佛有無	五六三
第六十六則	巖頭什麼處來	五七〇
第六十七則	梁武帝請講經	五七九



第六十八則 仰山問三聖.....五八五

第六十九則 南泉拜忠國師.....五九〇

第七十則 馮山侍立百丈.....五九七

第七十一則 百丈併却咽喉.....六〇五

第七十二則 百丈問雲巖.....六〇七

第七十三則 馬大師四句百非.....六一一

第七十四則 金牛和尚呵呵笑.....六一九

第七十五則 烏白問法道.....六二六

第七十六則 丹霞問甚處來.....六三四

第七十七則 雲門答餠餅.....六四三

第七十八則 十六開士入浴.....六四九

第七十九則 投子一切聲.....六五六

第八十則 趙州孩子六識.....六六一

第八十一則 藥山射塵中塵.....六六六

第八十二則 大龍堅固法身.....六七二

第八十三則 雲門露柱相交.....六七九

第八十四則 維摩不二法門.....六八二

第八十五則 相峰庵主大蟲.....六九〇

第八十六則 雲門有光明在.....六九七

第八十七則 雲門藥病相治.....七〇五

第八十八則 玄沙接物利生.....七一

第八十九則 雲巖問道吾手眼.....七二一

第九十則 智門般若若體.....七三〇

第九十一則 鹽官犀牛扇子.....七三四

第九十二則 世尊一日陞座.....七四三

第九十三則 大光師作舞.....七四九

第九十四則 楞嚴經若見不見.....七五三

第九十五則 長慶有三毒.....七六〇



第九十六則 趙州三轉語……………七六七

第九十七則 金剛經輕賤……………七七二

第九十八則 天平和尙兩錯……………七八二

第九十九則 肅宗十身調御……………七八九

第一百則 巴陵吹毛劍……………七九七

附 錄 禪窓より觀たる食糧問題……………一

# 碧巖集講話

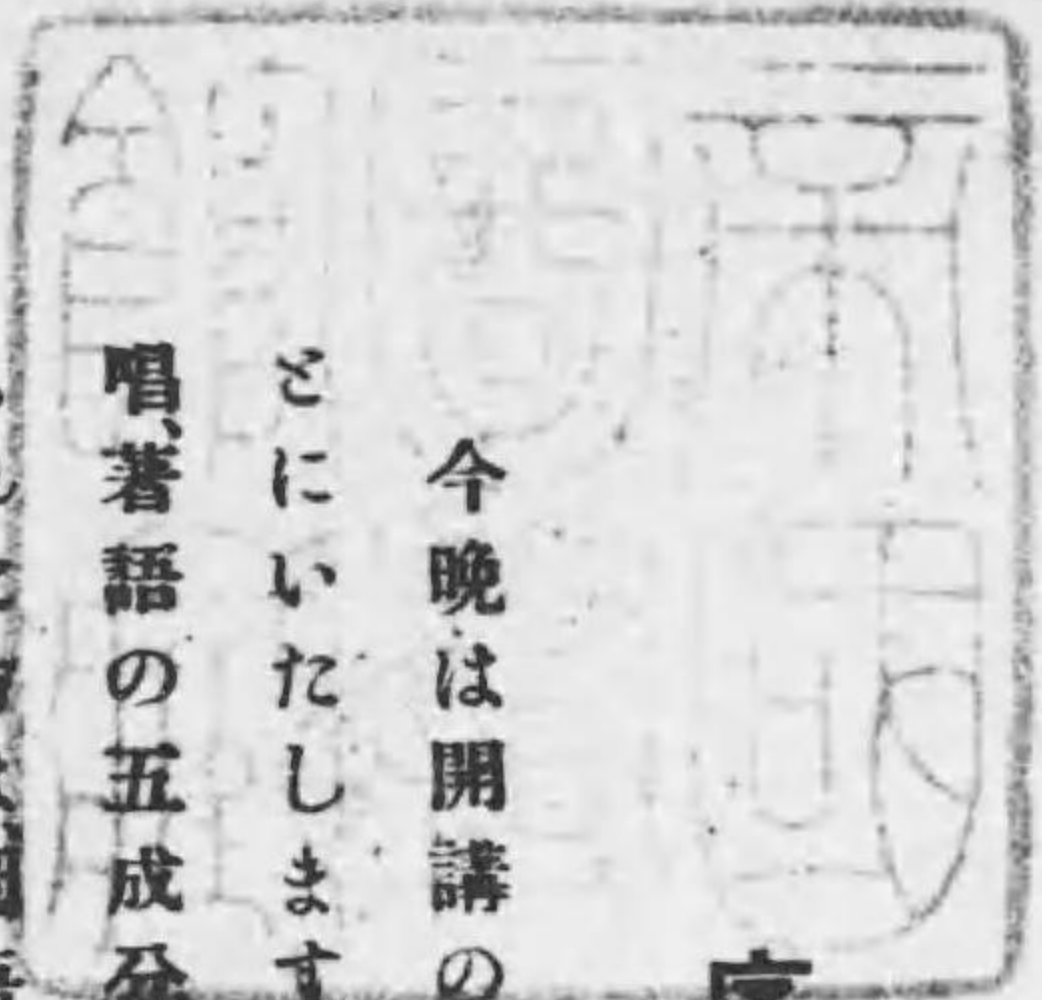
秋野孝道老師述

赤星陸治筆錄

## 序

## 講

(大正八年一月廿日  
於集鴨三菱俱樂部)



今晚は開講のことであるから、先づ碧巖集に就いて、大體のことをお話しすることにいたします。碧巖集といふ書物は内容が百則に別れて、各則毎に、垂示、本則、頌、評唱、著語の五成分から出来て居る、さうしてその内で、此垂示と評唱と著語とを付けられた方は、圓悟克勤禪師で、本則に頌を付けられたのが雪竇重顯禪師といふ方です。あります。順序から云ふと、元來は宋代に雪竇禪師が百則の公案に頌を作られたのが本で、後に門人の遠慶和尚といふが集録して雪竇禪師頌古集と名けて刊行したもので、其後二百年の後に圓悟禪師が張無盡居士の請に應じて各則に垂示と評唱



と著語どを加へられ、ここに今日いふ碧巖集と成つたものである。それでこの雪竇禪師は雲門大師から、四代目の方で、雲門の弟子が香林、香林の弟子が智門、智門の弟子が雪竇であります。雪竇禪師は諱を重顯と申します、其の重顯と云ふは、重ねて顯るゝと云ふことで、この名に就て雲門の懸記があります、謂ゆる豫言のことです。雲門識して、二百年後、吾が道重ねて顯はれんと云はれた、懸記の如く雪竇に至つて、雲門の佛法が重て顯はれる氣運に向つた誠に豫言通りであります、尙ほ序でに心得て置かねばならぬことは、此碧巖に就て、四家の頌古と云ふことがあります。則ち頌を作つた有名な人が四人程あります、第一が雪竇で、其の次が投子、其の次が丹霞、其の次が天童であります、此の四人は互格の宗師である、この天童の頌古といふのが彼の從容錄の基をなすものである。又、四家の評唱とて、批評的注解をした人が四人あります、圓悟の碧巖集、又は録とも云ふ、萬松の從容錄、林泉の空谷集、林泉の虛堂集、此の四人であります、今日講話する碧巖集は、此内の圓悟の評唱せられた碧巖集であります。此の碧巖と云ふ文字は何づれより出たかと云ふと、澧州の夾山に靈泉院と云ふ寺がある、其の寺の方丈の額に、碧巖と云ふ字が掲げてある、その

下に於いて圓悟禪師が雪竇頌古に評唱をせられたから、碧巖集と云ふ名を付けたのである、録と云ふは記録と云ふことで、集と云ふのは百則を集めたと云ふことである、録と云ふても集と云ふても同じ事である。舊刊は録といひ、重刊のものは集といふて居ります、どういふ譯で碧巖の額が掲げてあるかと云ふと、此の靈泉院の開山に、夾山善會禪師と云ふ善知識があります、或日一人の僧があつて、如何なるか是れ、夾山の境と問ふた、すると善會禪師が答へて、猿抱子、歸青嶂、後鳥啣花落、碧巖前と云はれました、碧巖の文字の額はそれより出たのである。さうしてこの書物は古來『禪門第一の書』と稱されて參禪者の中に最も重用されて居る。殊に又前申した四箇の評唱の内の『從容錄』とこの『碧巖集』とは禪書の雙璧のやうに云はれて、後世何時とはなしにこの二録が對立的の傾向を生じ、碧巖集は臨濟の側に、從容錄は曹洞方面にといつたやうにも見らるるが、何もさう區別すべき筈のものではない。尤も著者の關係上文字の用ゐ方に自づと、その風格が現はれて、碧巖集は直截簡明に、從容錄は宛轉繞路に提示さるる様子はある、そんな關係から從容錄が曹洞側に尊重され、碧巖集が臨濟方面に依用されることになつたのであらう、しかし何も曹洞で碧巖



を用ゐぬといふことはない、殊にこれを日本へ初めて傳へられたのは曹洞宗の開祖道元禪師であることを忘れてはならぬ。従容録は宛轉を表にして直截を裏にし、碧巖集は直截を表にして宛轉を裏にした傾きがある、何れが優、何れが劣といふべきものでない。全體書物の上ばかりでなく、禪風の上には直截にして宛轉宛轉にして直截、この両面をそなへなければならぬのである。

尙ほ碧巖集に對する末書やその外詳しいことも話したいが、時間が無い、それ等はいろいろ著述もあることであるから、特に調べたい人はそれ等に付て見らるるがいい。今は始めて聞く人のために大體のことだけを御話するに止めて置く、序講はこれ位にして第一則に移つて御話しいたしませう。

第一則 武帝問達磨

【垂示】垂示云。隔山見煙、早知是火、隔牆見角、便知是牛。舉一明三、目機銖兩、是衲僧家、尋常茶飯。至於截斷衆流、東湧西

沒、逆順縱橫、與奪自在。正當恁麼時、且道是什麼人行履處。

看取雪竇葛藤。

【讀方】垂示に云く。山を隔てて煙を見て、早く是れ火なるを知り、牆を隔てて角を見て、便ち是れ牛なるを知る。舉一明三、目機銖兩、是れ衲僧家尋常の茶飯衆流を截斷するに至つては、東涌西沒、逆順縱橫、與奪自在、正當恁麼の時、且く道へ、是れ什麼人の行履の處ぞ。雪竇の葛藤を看取せよ。

垂示に云く。垂示とは全體、垂訓教示の語である、師家が學人に對する行履上の訓示である。毎卷の始めに垂示がある、いはゞ一則の序のやうなものである、本則を參究するに於いての大體の心得を述べてある。山を隔て、煙を見て、早く是れ火なることを知り、山の向ふに、煙の立つのを見れば、その下には必ず火のあることを合點する、測量をしないで解る、これを禪家では、一見辨見と云つて、一見にして總てを辨見する機略である、さてこの煙は相であつて、火は實である、相を見て、直に實を知らなければならぬ、ここに花瓶がある、この花瓶は相であるが、これに花を立てると云



ふ實が具つて居る、このテーブルは相であるが、これには物を載せると云ふ實が具はつて居る、同じく此茶碗は相であるが、茶を入れるといふ實を自ら具足して居る。山は高く、海は深く、柳は緑に、花は紅、夫々其相は異れ共、皆同じ眞如と云ふ實の顯れたものである。今日の學問で云へば、實在とでも云ふか、佛性が必ず之は具つて居る、天地萬物、一としてこの眞如を離れたものはない、しかして我々は、一度その相を見たらば、直に其實を知らねばならぬ、牆を隔て、角を見る、便ち是れ牛なることを知る。で、牆を隔て、角を見たならば、その角を見ただけで直に根本の牛を合點する、是れも解り切つて居る、但し角にも色々ある、鹿の角もあれば牛の角もある。此場合に角は相で、牛や鹿は實である、角の種類を見て、牛か鹿かと判断する、これもさうむづかしいことではない、例へば店先の小僧が、客の顔を一見して是れはひやかしか、ひやかしないでないかを、直ぐ識別するのと同じことである、舉一明三、これは論語の「一隅を舉げて三隅を知る」と同じで、この位俊敏よほどくなくてはならぬ、涅槃經に四通りの馬が肉に觸れてから歩み出す、其次の馬は、鞭が毛の先に觸れただけで歩み出す、愈千

里の名馬になると、鞭の影を見た斗りですぐに走り出すと説いてある。こゝに「舉一明三」とあるは、先づ此鞭の影を見て直に走り出す、千里の馬の如きすばやい者を云ふたのである、目機銖兩、是れ納僧家尋常の茶飯、目機と云ふは目分量と云ふことである、銖も兩も目方の單位で一斤の十六分の一が一兩、一兩の二十四分の一が一銖である、だから銖は軽い兩は重い目方だ、重いか軽いかよく解ると云ふことだ、つまり物の輕重や長短を計るに、一々物指に當てたり、秤で量つたりせずとも、ちらと一目見て目分量で解るといふのである、又それが分かる位でなければ駄目だ、例へば、一軒の内に於ても、來客があると主人と妻君とが目と目と見合せた斗りで、客の應接振りが直に分る、しかるに鈍な下女になると、お茶を出せと申し付ける、お茶は番茶ですか、上茶ですか、お菓子は昨日貰つたのですか、又は舊いお菓子でよいですか、など、お客の前も憚らずに平氣で尋ねたりする、それでは目機銖兩の作用とは云はれない、面白い話がある、或る山寺に一人の小僧が、居た毎日豆腐を買ひに出される、門前の爺さんが、小僧が通ると何時でも、今日は何處へ行く、毎日同じことを聞く、小僧も毎日「豆腐を買ひに行く」と同じことを答へる、小僧此事を和尚に話す



と、和尚は小僧に教へて、今日若し聞いたら西方に行くか、と答へよ、西方の何處へ行くか、と聞いたら、極樂に行く、と答へよ、と教へた、小僧嬉しがつて出て行く、と果して何處へ行く、と問ふた、小僧早速、西方へ行く、と答へた、西方の何處へ行くか、と問うた、極樂に行く、と答へた、こゝまではよかつたが、極樂へ何に行か、と聞いたら、小僧は、豆腐を買ひに行く、と答へたと云ふ話がある。これでは、目機鉢兩ではない、教はつた事は駄目だ、腹から出た自信力がなくてはいかん、是れ、納僧家、尋常の茶飯と云ふは、こんな事は尋常當り前の事で解り切つたことである、少し氣の利いた人なら誰でも解ることであつて、茶飯とは、茶と飯とは毎日誰でも必要なる平常底である。活納僧には超宗越格の作用がなくてはならぬ、禪の奇抜な話はこれからだ、これまでは武帝の方にかゝる、これから達磨の方の事になる。衆流を截斷するに至つては、東涌西沒、逆順縱横、與奪自在、衆流と云ふは、流注識と云つて、思慮分別煩惱妄想を始として、其他言語や文字などに附いて迷つて居る事で、それでは到底、超宗越格の働きは出来ぬ、朝から晩まで煩惱の流れに流轉して居るやうではだめである、先づ煩惱から截斷してかゝらねばならぬ、衆流を截斷すれば、自由自在の境界、即ち東涌西沒

にして神出鬼沒の働きが出来る、斯かる自在の働きを得るには、衆流を截斷し、煩惱の束縛を離れねばならぬ。さうすると、逆順縱横で、縦から來ても横から來ても、自由自在に働く事が出来る、人間は逆境に會へば直に悲觀し、順境に會へば飛び立つ程嬉しがる、それではいかぬ、逆境が來ても順境が來ても本體は少しも動かす、泰然自若として居る修養が必要である、與奪自在の働きをせねばならぬ、人には、與へて奪ふこともなくてはならぬ、又奪つて與へることもなくてはならぬ、例へば百姓でも種子を下して唯肥料をやるばかりではいかぬ、ちやんと蒔くべき時に蒔き、肥料を施すべき時に施して、與奪自在でなければ良い收穫は得られぬ、これは暗に本則の武帝の間に對する達磨の答たる殺活の妙を得た處を示す心である。正當恁麼の時、且く道へ、是れ什麼人の行履の處ぞ、上の話を受けて、さればかういふ自由自在の作用をなす人は、どんな人であらうか、雪竇の葛藤を看取せよ、それは雪竇の書き表はした文字や言葉の末に捕はれず、よく本則に就て其本意を看取するがよい。

〔本則〕學。梁武帝問達磨大師、如何是聖諦第一義。磨云、廓然



無聖。帝云、對朕者誰。磨云、不識。帝不契。達磨遂渡江至魏。帝後舉問志公。志公云、陛下還識此人否。帝云、不識。志公云、此是觀音大士傳佛心印。帝悔遂遣使去請。志公云、莫道陛下發使去取、闔國人去、他亦不回。

【讀方】舉す。梁の武帝、達磨大師に問ふ、如何なるか。是れ聖諦第一義。磨云く、廓然無聖。帝云く、朕に對する者は誰ぞ。磨云く、不識。帝契はず、達磨遂に江を渡つて魏に至る。帝後に舉して、志公に問ふ、志公云く、陛下還つて此の人を識るや否や。帝云く、不識。志公云く、此れは是れ觀音大士、佛心印を傳ふ。帝悔ひて、遂に使を遣はし、去つて請せしむ。志公云く、道ふこと莫れ。陛下使を發し去つて取かしめんと、闔國の人去るとも、佗亦回らず。

これを本則といふので一則の中心である、學人の探つて以つて修行の範則とすべき古人の言行の勝跡である、これを古來公案といひ、又特に本則ともいふのである、これ等の本則は景德傳燈錄等より撰び出したもので、古來禪門には一千七百則

の公案があると謂はれて居る、その内から特に百則を撰んだものである、この本則の的意を知らせるために頌も出來、垂示も作られた譯で、一則の中心の問題となるところである、特にこの則は達磨廓然の話として古來叢林に喧傳されたものである。舉すと云ふは、記錄者の言葉で、云は、昔の古則を舉示するといふ意味である、梁の武帝は佛心天子と稱せらるゝ位の人の佛教信者で、『佛祖統記』には武帝は菩薩戒を受けたと書いてある、『梵網經』には、この菩薩戒を受けた者は第一義を問へとある、それゆゑに茲に第一義を問ふた譯である、又武帝は袈裟を搭けて、『放光般若經』を講じたとある、其時、天華亂墜して大地が黄金と變ずることを感得したとある、これも能く考へてみると、ないとも云はれまい、例へば有道德の人が居れば、其の土地が自然に良くなる、現に西有禪師が東海道、の島田在に閑居して居られたことがある、自然に其村の人氣が良くなつたことがある、これは生きた實例である、今も武帝の信仰力一つによつて、斯る奇瑞が必ずしも無いと斷言されまい、兎も角武帝は却々の佛法信者にして、且つ又相當に佛教の研究をもして居られた人に相違ない。達磨大師は南天竺の香至王の第三王子で、達磨と云ふは、通大と云ふことだと云ふてある、



達磨の師匠の般若多羅尊者が國王から珠を賜はつたことがある、其の珠を當時まだ小供であつた達磨に見せられたら達磨は之は「世寶にして最も貴しとするに足らぬ、法寶こそ最も貴むべきである」と云つたといふことである、なる程さうである、世寶は盜まれることもあり、又は焼かれることもある、法寶は盜むことも出来ぬが、又焼くことも出来ぬ。又「この珠は世明である、眞の明は心明である」、又「この玉は世光である、眞の光は智光でなくてはならぬ」と云ふたと云ふことである、何にしる達磨は小供の時から異つた人であつたことは、此の話でも知れる、それから又大師の傳を見ると、達磨が支那に參られた時に一人でぶらりと參られたのではない、天竺の太子であるから隨行の人も大勢あつたらしい、尤も歴史には詳しく書いてはありませんが、澤山な隨行員があつたであらう、武帝は有名な大師が支那に參られた事であるから、大いに喜ばれて此の問答をすることに成つたのである、全體、此の問答より先に無功德の問答があります、其の問答のことは長くなるから今は省くことにします、如何なるか、是れ、聖諦第一義、聖諦と云ふは、聖人の諦あきかなる悟りといふことで、つまり聖者の悟りの第一の要義を尋ねた、全體武帝も第一義底の義理位の理

窟は知つて居たに相違ない、道理は知つて居ても何となく心に落付きがない、謂ゆる臍落ちがせぬから問ふたに違ひない、聖諦第一義は義學者の極則とする所である、武帝は此第一義と云ふ處の病に罹つては居らなかつたか、能くあることであるが、道理は解かつて心も心に落付かぬ、落付がわるいから、尋ねたに相違ない、聖諦第一義と云ふことは、眞俗不二の法門のことである、佛法には眞諦門と俗諦門との二つがある、其内で眞諦と云ふは、平等無差別界の方である、俗諦と云ふは、事相差別界の方である、佛法と云ふは此眞俗不二にして不二にも落ちざる第一義諦と知らねばならぬ、差別界の事は、俗諦にして即ち世法である、今云ふ處の佛法と世法と本來どれ程違ふか、佛法の眼から見れば、世法も皆佛法となる、又世法の眼から見れば、佛法も又世法となる、丁度世の中の事を悲觀の眼で見れば皆悲觀となる、樂觀の眼で見れば皆樂觀となると同じ事で、法には定相はない、見方に依りて異なるので、佛法の大活眼を開いて見れば皆是佛法にして、差別は無いのである、今此の眞諦とは謂ゆる「起信論」の不變眞如のことである、俗諦とは「起信論」の隨緣眞如のことである、何れも一つの眞如の顯はれであつて二つではない、例へば茲に茶碗もあり、お盆もあり、



椅子もあり、テーブルもある、色々ある、斯の如く色々な品がある、是れ即ち差別の世法である、或は眞諦門の無差別の方より是れば皆是れ同じ眞如である、其の眞如が一時の縁に因つて色々な形になつて顯はれたので、所謂隨縁にして、縁に隨つて暫く色々な形を現出したのである、而して此の差別の其の儘が無差別平等の眞如界である、何れも皆不變の本體に歸するもので、之を不變眞如と云ふので、歸する處は同じく一の眞如である、此の眞俗不二の法門のことを聖諦第一義だと云ふて居る人もあり、又眞諦ばかりを聖諦第一義だと云ふ者もある、要するに、どちらにしてもよいが、武帝はこの聖諦第一義と云ふ理窟の病氣に罹つて居る、そこで衆流を截斷しないから自由自在の作用が出来ぬ、無病息災の人ではない、それだから問ふたに相違ない、磨云く達磨は之に答へて、廓然無聖と云つた、之は達磨が大慈悲心を以て、五臟六腑をさらけ出しての答である、廓然と云ふは、ほがらかにして夜ががらりと明けたやうな有様、聖と云ふは悟りのことで、其悟りも無いと云ふから、迷ひなぞは尙更無い譯だ、之は何の事はない、第一義をさらけ出した言葉だ、聖がなければ俗もなく、迷ひがなければ悟りもない、自性清淨心とは即ち此事である、古人が「日輪午に

當つて樹に影なし」と云ふたが、實に面白い語だ、太陽が十二時の處に來ると樹木に陰影がない、日輪が眞直に上から照らすから、影はない、實によい語だ、一大藏經も一千七百の公案も廓然無聖の一句で詮注し了つて居る、皆この四字に含まれて居る、これから講ずる碧巖百則の公案も皆此の廓然無聖の説明に外ならぬのである、これさへ分れば佛法は分つたと云ふてもよい、永嘉大師の言葉に「粉骨碎身も未だ酬ゆるに足らず、一句了然として百億を超ふ」と云ふてあるが、此廓然無聖の一句は實に安心決定の基礎と云ふべきである、處が悲しい哉武帝は、此達磨の慈悲の心からさらけ出して云ふたのを聞く耳がない、帝云く、朕に對する者は誰ぞと云ふた、わしの前に現に聖者たるお前は居るではないか、と是れ言葉や文字につき迷ふて居る、古人の語に「盲者の見ざるは日月の咎にあらず」と云ふがあるが、武帝もこれと同じで、方木は圓竅には入らぬ道理である、お前は聖人で、印度から來られて現に私の前に居るではないか、と是れ即ち語や文字について廻る、そこで達磨は慈悲のあまりに今一言云ふた、磨云く、不識、之は文字の通りに見たら、おれはそんな事は知らぬと云ふたまでの事であるが、世の中には随分知り切つて居て態と「知らぬ」と云ふ事も



ある、茲でもさう云ふ風にも聞こえる、然し之は達磨ばかりではない、三世諸佛も亦是れ、恐らくは異口同音に「不識」と答へるに相違あるまい。若し識るといつたら、それは間違ひだ、智識は分別妄想である、今達祖の不識は分別妄想を解脱した、不識である、世界は皆是れ不識の顯はれである、不識にして天は高くして蓋ふて居る、不識にして地は厚く萬物を載せて居る、此花瓶は不識にして花を立てゝ居る、茶碗は不識にして湯を入れて居る、おれは花を立てゝ居るとか、おれは湯を入れて居るとかいふ、自慢顔で働いては居らぬ、皆是れ不識にして其の用をなして居る、花の咲くのも不識なれば、雨の降るのも、風の吹くのも、皆不識の面目ではないか、此柱も不識にして家を支へ、此屋根も不識にして我々を蓋ふて居る、世界萬物一として不識の面目ならざるものはない、此不識が解れば廓然無聖も解るのである。處が帝契はずで、武帝は矢張り不會である、達磨は一度ならず二度までも答へたが武帝には慈悲の心が聞き取れぬのである、達磨遂に江を渡つて魏に至る、そこで楊子江を渡つて魏の嵩山の少林寺に入つて面壁九年せられた、面壁九年は悟る爲めの坐禪ではない、坐禪は我が禪家の規則定例である、悟つても之を止むべきものではない、坐禪は佛祖

の定例であつて、達磨の面壁九年は證上の修である、古人も佛に至るも不退なるは例なり」と云はれたではないか。帝後に擧して志公に問ふ、志公云く、陛下還つて此人を知るや否や、帝云く、不識、以下の文は從容録には無い、帝が後に志公と云ふ人に問ふた、志公と云ふ人は、武帝の時に居つたと見へる寶誌和尚の事である、志公が答へて云ふ、陛下還つて此人を知るや否や、あなたはあの問答をした人を知つて居らるか、此人と云ふ處に響がある、此人さへ解れば達磨と相見の人である、帝云く不識之は同じ不識でも達磨の不識とは大分異ふ、武帝の不識は本當に知らぬのだ、大將と云つても、どうだ大將といつて肩を叩いて云ふ大將も大將である、乃木大將も大將である、大將と云ふ文字は同じであるが、乃木大將と、どうだ大將とは雲泥の相違である、同じ不識でも武帝の不識と達磨の不識とは十萬八千も隔りがある、志公云く、此は是れ觀音大士佛心印を傳ふ、印は印證だの心印だのと使ふ印だ、彼の達磨大師は觀音の再來にして、佛心印なる佛法の心印を傳へんがために來たのだ、と斯う答へた、帝悔いて遂に使を遣して去つて請はしめんとす、さう云ふ人であつたか、と大に悔いて、それでは一つ使を遣はして、再び請待しやうとした、志公云く、道ふこと



勿。れ。陛。下。使。を。發。し。去。て。取。か。し。め。ん。と。闔。國。の。人。去。る。と。も。他。亦。回。ら。じ。と。い。く。ら。使。を。や。つ。て。も。再。び。歸。る。人。で。な。い。闔。と。云。ふ。は。合。と。同。じ。で。國。を。舉。つ。て。迎。へ。に。行。つ。て。も。他。と。云。ふ。は。達。磨。の。事。で。あ。の。人。は。再。び。歸。つ。て。來。る。人。で。は。な。い。之。は。玄。沙。の。言。つ。た。達。磨。東。土。に。來。ら。ず。二。祖。西。天。に。往。か。ず。と。云。ふ。語。が。あ。る。眞。個。の。達。磨。は。宇。宙。に。充。滿。し。て。居。つ。て。往。き。も。せ。ず。來。た。り。も。せ。ぬ。今。も。現。に。帝。の。前。に。居。る。で。は。な。い。か。帝。は。た。ゞ。向。ふ。に。行。か。れ。た。達。磨。の。事。の。み。を。思。ふ。て。居。る。各。自。武。帝。に。一。任。せ。ず。に。自。己。の。脚。下。を。照。顧。し。て。見。る。が。よ。い。

〔頌〕頌云。聖諦廓然、何當辨的。對朕者誰、還云不識。因茲暗渡江、豈免生荆棘。闔國人追不再來、千古萬古空相憶。休相憶、清風匝地、有何極。師顧視左右云、這裏還有祖師麼。自云、有。喚來、與老僧洗脚。

〔讀方〕頌に云く、聖諦廓然、何ぞ的を辨すべき。朕に對する者は誰ぞ、還つて云く、不識と。茲に因て暗に江を渡る、豈に荆棘を生ずることを免れんや。闔國の人追ふとも

再來せず。千古萬古空しく相憶ふ。相憶ふことを休めよ。清風匝地何の極りか。有らん。師、左右を顧視して云く、這裏還つて祖師有りや。自ら云く、有り。喚び來せ。老僧が爲に洗脚せしめん。

頌に云く、この頌といふのはつまり佛法の意を含蓄した詩である、印度にては伽陀といふた、これは雪竇の最も力を用いた所で、本則の宗乘を韻文を以て擧揚されたものだ、圓悟の垂示と共に最も大切な部分である、碧巖としての味ひは最も多く此頌の部分にあるのである、百則何れにも一頌、箇處によつては二頌あるところもある、一番のものは此本則と頌だけのものであつて、之を雪竇禪師頌古集といふたものだ、碧巖集となつたのは後に圓悟が垂示、評唱等を付けてからのことである、だからこの頌はよく注意して見らるゝが、聖諦廓然、之は本則の間ひと答へを拈擧したのである、何ぞ的を辨すべき、的とはまづ、ばし、と云ふ事である、聖諦第一義と廓然無聖の的意は、如何が辨すべきぞ、辨明の出來難いところのものだ、若し廓然無聖の的意が辨明することが出來たら、それこそ達磨と相見了の人だ、聖諦と廓然無聖の的意を辨する者は少ない、會得すれば聖諦と廓然とは二つはない、聖諦第一



義と廓然無聖との的意如何が辨すべき、朕に對する者は誰ぞ、還て云く不識と、之は本則にある其のまゝを出したまでのことである、是れ拈古の格である、茲に因て暗に江を渡る、暗に江を渡りて魏に至る、暗とは夜行かれたからとも云ふ、達祖の境界は餘人所不見なる故に暗に、と云ふのだ、暗に大變響きがある、かういふ響を味ふところに禪の興味が湧いて来る、豈荆棘を生ずるを免れんや、荆棘と云ふは、からたちやいばらなどのことで、誠に邪魔ものである、達磨の廓然無聖と云ひ、不識と答へたのは知見解會の荆棘を截斷せんが爲である、帝契はぬゆるに豈に荆棘を免かれんやである、全體佛法は説くべき物ではない、苟くも説けば却つて皆荆棘となる、從來の妙唱は舌に預らぬものである、達磨は武帝の其器に非ざるを知り、暗に江を渡つて去られた、尋常の知識なら貪名愛利の爲め、禪師號でも賜はらんとして或は止つたかも知れぬ、達磨は貪名愛利の念なくたゞ傳法救迷情より外はないから暗に江を渡つて去られた、佛法は佛出世以前よりちやんと顯はれて居る、山は築かずして高く、海は掘らずして深し、柳は緑に花は紅である、その道理を佛が悟られて説かれたのである、畢竟見れば廓然無聖も第二義門底の施設である、佛法の本分より見

來れば又是れ荆棘たるを免れぬのである、闔國の人追へども再來せず、闔國とは舉國一致のことである、國を擧げて行つても、達磨は再び歸ると云ふことはない、見よ眞個の達磨は宇宙に一ぱいになつて居るではないか、往きもせんが來りもせん、故に玄沙云く、達磨東土に來らず、二祖西天に往かずと、今日達磨に相見せんと欲せば唯是れ實參實究するがい、眞個の達磨は面前背後露堂々である、千古萬古空しく相憶ふ、唯空しく相ひ憶ふて、いくら待つても來られぬ、達磨を唯是れ向ふにのみ居ると思ふて居る、相憶ふことを休めよ、雪竇帝に説向して相憶ふて如何にせん、脚下に切り込んでの示した、自分の脚下に氣を付けるがい、評唱にも出て居る、武帝が達磨を追憶して、自ら碑文を作つた、其文に、嗟夫れ之を見て見ず、之に逢ふて逢はず、今も昔も之を怨み之を恨むと、相憶ふ情を述べたものである、道元禪師も、佛道は人々の脚跟下なりと示された、清風匝地何の極りかあらん、昨年も今年も春は花、秋は紅葉、夏は暑く冬は寒い、何處にも清風明月はある、活祖の消息である、清風明月誰が家にか無からんである、明月清風一生富むである、貧乏人は一人もない、脚下を照顧するがい、師左右を顧視して云く、這裏還つて祖師ありや否や、這裏は清風匝地



を指す、即ち契飯の處、喫茶の處、起きる處、寝る處、どこにでも達磨と相見せねばならぬ、今祖師と云ふは達磨を指す、そこらに達磨は居らぬか、と雪竇が高聲に喚べども、誰も答へる者が無い。そこで自問自答で、自ら云く、有り、達磨が居るなら呼んで来い、喚び来れ、老僧が與に洗脚せしめん、と直下の接得である、そこらにまごついて居る者は本當の達磨ではあるまい、何れ似せものだらう、見性佛を留めず、大悟師を存せず、人々自性の達磨に相見せよとの爲人である。これで垂示と本則と頌とを御話しました、尙ほこの外に、本則の次と頌の次に圓語の評唱がある、また語句の間に著語と稱する短評がある、これも圓悟禪師の加へられたもので、本當はこれ等を全部説明しないと完講といへないが、しかしそれでは餘り煩はしいばかりになつて、却つて皆さんが宗意を酌み取り悪くなるから、まづ垂示、本則、頌の三つだけで一則をすんだことにいたします、さうして次は第二則に移ります、第二則以後もこの方針で御話いたしますから、その積りで居ていたゞきたい、さうして著語、評唱は必要な場合は特に御話することとしてそれは篤學の人は各自内で御調べ下さることに願つて置きます。

第二則 趙州至道無難

【垂示】垂示云。乾坤窄、日月星辰一時黑。直饒棒如雨點、喝似雷奔、也未當得向上宗乘中事。設使三世諸佛、只可自知。歷代祖師、全提不起。一大藏教、詮注不及。明眼衲僧、自救不了。到這裏作麼生請益。道箇佛字、拖泥帶水。道箇禪字、滿面慚惶。久參上士、不待言之。後學初機、直須究取。

【讀方】垂示に云く。乾坤窄く、日月星辰一時に黒し。直饒棒雨點の如く、喝雷奔に似たるも、也た未だ向上宗乗中の事に當得せず。設使三世の諸佛も、只自知す可く。歴代の祖師も、全提不起。一大藏教も、詮注し及ばず。明眼の衲僧も、自救不了。這裡に到つて作麼生か請益せん。箇の佛の字を道ふも、拖泥帶水。箇の禪の字を道ふも、滿面の慚惶。久參の上士は、之を言ふを待たず。後學初機は、直に須く究取すべし。



當得せず迄が一段、明眼の衲僧も自救不了迄が二段、作麼生か請益せん、迄が三段、其以下が四段である。此垂示はどうも分り悪い、乾坤窄く日月星辰一時に黒し、乾坤よりも廣いものがある、乾坤も廣いが、夫れよりも廣いものがある、ゆるにそれに比べるに乾坤も窄しと云ふた、日月は能く照すけれども、それよりもまだ勝れた光り、明るいものがある、それに比して日月星辰一時に黒しと云ふたのである。一體それは何を意味して言ふのか、能く考へて見れば本則にある此の至道のことを云ふのである、なるほど至道と云ふものは宇宙乾坤よりも廣い、宇宙はいくら廣いと云ふても至道より見れば際限がある、至道には際限がない、日月星辰はよく照すけれども、太陽は晝を照して夜を照さない、又月は夜を照らすけれども晝は照さない、此の至道の光明は二六時中いつでも照し抜いて居る、即ちこれは至道の廣大無邊なることを云ふたのである、至道に比すれば乾坤も窄く、日月も暗しと云ふてよからう、直饒棒兩點の如く、喝雷奔に似たるも、棒で續けざまに兩點の如く叩かれ、喝は雷奔の如く幾度も喝せられるも、未だ向上宗乘中の事に當得せず、この向上宗乘が入用である、箇の向上宗乘の的意には、棒も喝も届かぬのである、なるほど棒も必要なるこ

とは必要であるが、向上宗乘の上から見れば、日月星辰も照らすことは出来ぬ、日は晝を照らして夜を照さぬ、月は夜を照らして晝を照さぬ、光りに限がある、晝夜一貫して照らす光明ではない、故に充分とは云へぬ、向上宗乘の端的は、畢竟如何、迷ひでもなく悟りでもなく、謂ゆる迷悟を超絶して居る、長いとも短いとも、圓いとも四角とも、名の命けやうがない、此の向上宗乘を合點すれば、參學の大事畢ると云ふてもよい、之れを廓然無聖とも不識とも達磨は云ふたのである、設使三世の諸佛も只自知すべく、歷代の祖師も全提不起、一大藏教も詮注し及ばず、明眼の衲僧も自救不了、とあつて、三世諸佛と云ふと雖も此の端的は説くこと能はず、歷代の祖師も亦舌が届かぬ、可睡齋では毎月朔望には小參と云ふて問答をするのが古例であります、本年の元旦にも古例に依りて問答を致しました、其垂示の語に、新年の佛法如何と問は、松竹梅花只自知と伸べました、眞の佛法は説かれる物ではない、説けば説明の佛法である、世間の語に、酔ひ醒めの水のうまさ、は下戸知らずとある、飲んだ人ではなれば其味はわからぬ、飲まぬ人には分らぬ、冷暖自知で、自分自分で自知せねばならぬ、達磨が廓然無聖と武帝に答へたのも、決して全提ではない、半提である、全提と



云ふことは出来ぬと思ふ、有と云へば無が缺ける、無と云へば有が缺ける、高いと云へば低い、低いと云へば高いと一度に一口に云ふことは出来ぬ、此の向上宗乘の的意は一大藏經の上に於ても注釋は出来ぬと思ふ、又文字に書く事も出来ない、言葉にも述べられぬ、畫家に鶯の聲を書いて呉れと云ふても、書くことは出来まい、ほふほけきやうと、口では真似ても其の聲の音色をば書き現はすことは出来まい、すまい、胡椒はひり／＼する、其のひり／＼の味を書くことは出来まい、只胡椒をなめた人のみ能くそのひり／＼の味を知るのである、眞の味は自知自得の外はない、明眼の衲僧なら出来さうなものなれども、實に是れ自救不了である、自ら救ふことの出来ないものが、他を救ふ事は猶更出来ぬ、向上の宗旨は元來講釋や説明の出来るものではない、釋尊ですら、止々不可說、我法妙難思議と云はれたではないか、さて茲に至つて、どう提唱するか、深く參究せねばならぬ、這裏に到つて作麼生か、請益せんと云ふ、箇の佛の字を道ふも、拖泥帶水、拖泥帶水とは泥田の中に入るやうで慈悲の餘り、慈悲過ぎる事で、古人も、佛の一字も心田の汚れと云つてある、叮嚀は君徳を損すともある、箇の禪の字を道ふも、滿面の慚惶、禪の一字を云ふも大耻かき

だ、久參の上士は之を言ふを待たず、久しく參禪した人は云はなくても解つて居るが、後學初機の人は直に究取すべし、初學の人は次に示す本則に就いて充分參究して我ものにするがよい。

【本則】舉趙州示衆云、至道無難、唯嫌揀擇、纔有語言、是揀擇、是明白、老僧不在明白裏、是汝還護惜也、無時、有僧問、既不在明白裏、護惜箇什麼、州云、我亦不知、僧云、和尚既不知、爲什麼却道不在明白裏、州云、問事即得、禮拜了退。

【讀方】舉趙州衆に示して云く、至道無難、唯嫌揀擇、纔に語言有れば、是れ揀擇、是れ明白、老僧は明白裏に在らず、是れ汝還つて護惜すや也、た無しや、時に僧有り問ふ、既に明白裏に在らず、箇の什麼をか護惜せん、州云く、我も亦知らず、僧云く、和尚既に知らず、什麼としてか却て道ふ、明白裏に在らずと、州云く、事を問ふことは即ち得たり、禮拜し了つて退け。

趙州衆に示して云く、至道無難、唯嫌揀擇、纔に語言あれば、是れ揀擇、是れ明白、之は



三祖大師の「信心銘」の言葉で、至道無難唯嫌揀擇、但憎愛なければ、洞然として明白なり、と云はれてある。成程大道は難易を離れて居る、道元禪師も「坐禪儀」に「道本圓通」と云はれてある。然し其人によりて難ともなれば易ともなる。朝起きて顔を洗ふ處にも、茶を飲む處にも、いつも大道と離れたことはない。古人も「道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらず」と云ふてある。平常心是れ道である。實に是れ無難ではないか。しかし揀擇を嫌ふとある、一つえり嫌いの分別が起つたら、千里萬里の遠ひで道とは遠くなる。所謂「花は愛著に散り、草は棄嫌に生ふ」で、花は愛著を離れて咲いて居る、草は棄嫌を離れて生じて居る。愛著棄嫌は皆是れ人の方に在る、花が咲いて人に見に来て促したのは人の方にはない、人の方から花見に出かけて酒に酔つて自動車から落ちて負傷するのは人の方に有て花が負傷させたのではない、花の方には愛著は無い、草はいくら採つても亦生する、小僧泣かせと云ふ草がある、何も草の方で小僧を泣かせるつもりで生えるのではない、小僧がうるさがつて泣くのである。然し草の方では棄嫌を離れて居る、只揀擇を嫌ふ、揀擇分別の念慮がある。と直に至道とは遠くなる、思慮分別を離れて超然たる處にはいつも至道は現はれて居る、至道無

難但揀擇を嫌ふ、迄は三祖の言葉である、それから、纔に語言あれば是れ揀擇是れ明白は趙州の言葉だ、一寸でも言語に涉つて何んとか説明すれば是れ揀擇である、揀擇と云ふ方は迷ひの方、明白と云ふ方は悟りの方、迷ひとか悟りとかどちらか一方に偏る、是れ揀擇である、裏と云へば表がある、剛いと云へば柔いがある、何れにか片落ちとなる、老僧は明白裏に在らずと、老僧とは則ち趙州自身を云ふ、迷ひの處には無論居らぬ、それでは悟りの處に居るかと云ふに、其悟りの場處にも居らぬのが明白裏にも在らずと云ふのである、普通は大概悟りの處に居る人が多い、多くは悟る人は悟つて其悟りの處に居る、趙州は悟つて悟りの處にも居らぬ故に明白裏にも在らずと云ふ、是れ汝還つて護惜すやまた無しや、どうだ皆のものは、この處を護惜するや否やと一つ座下へ釣竿を下した、釣ばりを下して見られた、直様餌に付いてきた時、僧あり問ふ、既に明白裏に在らず、箇の什麼をか護惜せんと、趙州の語句に釣られて来た、既に明白裏にあらず、悟りの境界にも在らずとすれば、何も護惜するものはないではないかと、理窟で喰つてかゝつて来た、趙州云く、我も亦知らずと、老將軍だ竿であるのに、理窟の僧がかゝつて来た、そこで趙州云く、我も亦知らずと、老將軍だ



けあつて戦いくさには馴れたものだ、おれは揀擇をも明白をも知らず、言葉ことばを離れて説いいて居る、絶學無爲の閑道人である、然るに此僧は、どこ迄も言葉の末に付いて廻る、僧そう云く和尚既に知らず、什麼なにとしてか、卻かへて道みちふ、明白裏うらに在あらず、どこ迄も理窟りくつで來た、趙州相手にならず、州しゅう云く、事ことを問ふことは、即ち得たり、禮拜らいはいし了しまつて退ひけ、お前は誠まことによく事を問ふ奴やつだ、な、問ふてしまつたら禮拜して、あちらへ退き去れ、不ふ揀擇せんたくの法はふを示めて居る、趙州の境界の深きこと、海うみの如く、高きこと、山の如く、登れば登る程高い、趙州は平常心へいじんしん是れ道みちと云はれた、平生佛法へいぜいふつぽふになり切つて居る人である、一喝いつくつも一棒いつぼうも用ゐぬ、これが臨濟りんぜいか、徳山とくざんだつたら一棒一喝いつぼういつくつを行なすであらう、流石さすがに老趙州らうしゅうだけに佛法臭においところも禪道ぜんだうらしいところも離れて至道しだうの有あのまゝを示して居る、その度量りきりかた海うみの如く、入れば入る程深い、誠まことに仰あやげば愈い高く鑽うれば愈い堅かたしといふ様子がある。

「頌」頌云。至道無難、言端語端。一有あ多種、二無な兩般。天際日上下、檻前山深水寒。觸ふ髅ろう識し盡じん喜何立、枯木龍吟銷未乾。

難々。揀擇明白君自看。

【續方】頌じゆに云く。至道無難、言端語端。一たに多種有あり、二りやうに兩般無なし。天際日上てんさいじつの上り、月下つきくだる。檻前山かんぜんざん深く、水寒みづさむし。觸ふ髅ろう識し盡じんきて、喜何きなんぞ立たせん。枯木こぼく龍吟りゆうぎん、銷せうじて未いまだ乾かかず。難々なん々。揀擇けんたくか明白めいはくが君自きみみづから看みよ。

至道無難しだうむなん、至道は難易なんいを超越こして居る、吾人われは平常へいぜい至道しだうの上の上を往來わうらいして居るではないか、至道しだうは誠まことに難なんはない平坦へいたん無事むじであるが、しかし揀擇けんたくに涉あると難々なん々となる、思し慮りょ分別ぶんべつに涉あると其そのの無難むなんの至道しだうも千里萬里せんりばんりの隔へりとなつて無難むなんの大道だうだうも難々なん々となるのである。言端ごんたん語端ごんたんとは正しいと云ふことで、即ち言も端正てんせい。語も端正てんせいであつて、朝あ逢あふてはお早はやふと云ひ、寒さむい時に逢あへばお寒さむうと云ふ、其言も語も皆みな端直てんちきにして、みな是れ至道しだうの端的てんてきである、頭々あたまづか是れ道みちにして物々ものもの是れ真まことである、一いに多種有あり、二にに兩般無なしとは、一かどすれば多種たふある、一が一でもない、二かどすれば兩般りやうはんなし、二が二でもない、一は無差別むさべつの方かたにして、多おほは差別さべつの方かたである、差別さべつとも無差別むさべつとも名の付け様さまのないところを至道しだうと云ふのである、次の言葉ことばが誠まことに結構けうくわうである、天



際日。上。り。月。下。る。檻。前。山。深。く。水。寒。し。朝。に。な。れ。ば。天。際。に。日。が。上。り。夕。に。な。れ。ば。月。が。西。に。沈。む。檻。前。山。が。深。く。し。て。深。山。に。な。れ。ば。な。る。程。水。が。冷。たい。是。れ。乃。ち。至。道。の。端。的。に。し。て。誠。に。法。の。あり。め。通。り。の。事。を。伸。べ。至。道。の。的。意。を。顯。は。し。て。居。る。即。ち。有。の。儘。の。事。で。一。で。も。な。く。二。で。も。な。い。至。道。の。有。様。を。さ。ら。け。出。し。て。の。示。し。で。あ。る。此。境。界。は。眞。諦。門。で。も。な。け。れ。ば。俗。諦。門。で。も。な。い。眞。俗。不。二。に。し。て。又。是。れ。不。二。に。も。墮。ち。ざ。る。大。道。で。あ。る。今。一。つ。云。ふ。て。見。れ。ば。獨。體。識。盡。き。て。喜。何。ぞ。立。せ。ん。枯。木。龍。吟。銷。し。て。未。だ。乾。か。ず。で。獨。體。は。し。や。り。こ。う。べ。の。こ。と。で。あ。る。意。識。妄。想。が。盡。き。て。し。ま。へ。ば。至。道。の。露。現。で。あ。る。喜。も。な。く。又。憂。も。な。い。の。が。道。の。當。體。で。あ。る。流。に。隨。つ。て。性。を。認。得。す。れ。ば。喜。も。な。く。又。憂。も。な。し。と。云。ふ。も。う。七。情。が。無。く。な。つ。て。煩。惱。の。熱。氣。一。點。も。と。め。な。い。次。の。句。が。面。白。い。枯。木。龍。吟。銷。し。て。未。だ。乾。か。ず。之。が。實。に。好。い。句。だ。枯。木。と。思。ふ。た。ら。龍。吟。で。あ。る。冬。に。な。る。と。枯。木。と。枯。木。と。す。れ。合。ふ。て。ギ。イ。ギ。イ。と。聲。を。發。し。て。居。る。是。れ。枯。木。龍。吟。で。あ。る。枯。れ。切。つ。て。居。る。や。う。で。枯。れ。て。し。ま。は。ぬ。春。に。な。れ。ば。又。芽。を。出。す。銷。し。て。居。つ。て。未。だ。乾。か。ぬ。死。中。に。活。あ。る。の。消。息。で。あ。る。無。心。の。如。く。し。て。無。心。で。な。い。難。々。先。き。に。は。無。難。と。云。ふ。て。茲。に。は。反。對。に。六。か。し。い。六。か。し。い。と。云。つ。て。居。る。枯。木。龍。吟。に。し。て。又。は。

銷して未だ乾かずと云ふ此の大道に往來して、死中に活を得る自由自在の行履を得ることは、なか／＼むづかしい、此境界を體得して、平常の云爲動作が皆此大道の上に住來せねばならぬ、此の境界を得るはなか／＼容易の事ではない、故に難々と云はれた、揀擇か明白か、君自ら看よ、迷か悟りか、その處は天下の人皆自分自身で合點して看るがよい、水を飲んで冷暖自知、自知は人々にあるのである。

第三則 馬大師不安

(大正八年二月十九日 於三養本社會議室)

【垂示】垂示云。一機一境、一言一句、且圖有箇入處、好肉上剜瘡、成窠成窟、大用現前、不存軌則、且圖知有向上事、蓋天蓋地、又摸索不著、恁麼也得、不恁麼也得、太廉纖生、恁麼也不得、不恁麼也不得、太孤危生、不涉二途、如何即是、請試舉看。



【續方】垂示に云く。一機一境一言一句且く箇の入處有ることを圖る。好肉上に瘡を剋り、窠を成し窟を成す。大用現前軌則を存せず、且く向上の事有ることを知らしめんことを圖る。蓋天蓋地、又摸索不著、恁麼も也た得たり、不恁麼も也た得たり、太廉纖生、恁麼も也た得ず、不恁麼も亦得ず、太孤危生。二途に涉らず、如何にしてか、即ち是ならん。請ふ試に擧す看よ。

今日は禪學禪學と云ふけれども禪は學問ではない、禪學の大事な點は修養にある。修養は一日や二日で成就するものでない、此の碧巖の話を聞く人が動もするところ何遍聞いても、同じ事だと云ふ人があるが、成程一つ事を繰り返すには相違ない、然し眞理は一つである、どの公案でも其一つの眞理を度々繰り返すのであるが、修養の意味はそこにある、學問なら一通り理論さへ解ればそれですむかも知れぬが禪は學問ではない、一つの修養法である、修養と云ふものは、一つ事を度々繰り返して行く裡に、自然と其眞理に到達するのである、例へば佛法なら佛法の道理が合點されて、竟に身にも心にも滲み込んで、それが手の舞ひ足の踏む處に活現して來る、そこまで到つて始めて修養の効を奏するといふ譯である、例へば素麵なり、うどんな

りを製るに、油や鹽が滲み込まぬと本當の味が出ないといふと同じで、これは到底一朝一夕の事ではゆかぬ、修行は剛い鐵を切るが如く昔はやすりで、暇をかけて切つたものである、剛き物はなか／＼一朝一夕では切れない、修養も之と同じ事で、同じ事を時をかけ、度を重ねて、自然と身心に滲み渉るまでやらねばならぬ、だから修養は人格を練るといふではないか、萬事速成や輕便を尊ぶ世の中ではあるが、人格を修養することだけはさう簡單には行くものでない、だから古人は這事を體得して人格を完成する爲には二十年も三十年もかゝつて、然かも却々辛苦して居られる、だから雪竇も、二十年來曾て苦辛すと言つて居る、なか／＼容易の事ではない、世に「耳口三寸の學」と云ふことがある、これは耳と口だけの學問で、心や身に少しも潤ひがない事を云ふたのである、これから納が講ずる此碧巖集百則の公案は、皆是れ一つ事の様である、其中一則か二則聞いて解つたやうな考をなすが其實なか／＼解らぬ、況んや之が身に滲むやうに成るには大抵の事ではない、だからその積りで參究してもらひたい、段々修養が積んで、禪が我物になれば、戸を開け閉てするもの、草履を脱ぐのも、部屋に出入するもの、寝るものも起さるものも、二六時中行住坐臥がみ



んな禪となつて、其の人の行爲の上に隙間がなくなるやうにならねばならぬ、便所へ往つて見ると、片足の草履が一間も先きに飛んで居たり、戸が明けつばなしにしてあつたり、便所が汚れて居たり、それはそれは誠に身心が隙きだらけなことがある、だから修行力のある人より見ると一寸した動作の上に於て其人の修養の程度が伺はれるのである、なす事する事の上に於てちやんと行き届いて行くのが禪の生活である、こゝが禪の尊い處である、兎角世の中には、それか、それは解つて居るよなど云ふ人に限つて、日用の行ひの上には一向に解つて居ない人が多い、一機一境、一言一句、一機と云ふは心の働きの、こちらの體につく方、禪宗では例へば、如何なるかこれ佛と問ふたのに、指を立てたり、又釋尊が迦葉尊者に法を傳へた時に、一本の花を拈擧して揚眉瞬目せられたことがある、迦葉がそれを見て取て破顔微笑した、其の揚眉瞬目と破顔微笑の裡に、心と心と通ふ機用がある、それを一機と云ふのだ、又一境といふは向ふのもので、例へば山に對し流に臨みなどして悟を開く、其向ふの境の事で、總て心の向ふにあつて、心の働きの對象となるものを境と云ふのである、禪では「一機一境の禪」と云ふことをいふ、禪は必らず著實の禪でなくてはならぬ、

手の舞ひ足の踏む處皆是れ著實を旨とせねばならぬ、然るに古人が學人を接待する場合に拂子を豎起したり、拳頭を擧示したりする、頗る奇抜なる接待の仕方もあります、古人が拂子を豎てるのも、又は指を豎てるも一一修行力の上からである、所が怎うかすると、それを真似て悟つた思ひをなし、其の皮相ばかり真似て眞實修行しないものがある、真似ごとでは駄目だ、矢張り永い間の修養を積んだ上でなければ、拂拳棒喝の力は得られぬ、一言一句、且く箇の入處あることを圖るといふは、師家が學人に對して或は一言を下し或は一句を伸べたりする、例へば、如何なるか佛といふ問に對して「麻三斤」と答へたり、或は「什麼物か恁麼來」と答へたりする、是れ皆一言一句の消息である、それは皆古人方は佛法を合點させたいといふ深い慈悲心からの發露である、花を拈ずるも拳を擧するも、指を豎つるも、拂子を拈ずるのも師家の爲人接化は人をして入處せしめ本分の境界に入らしめんとの大慈悲心である、好肉上に瘡を剝り、窠をなし、窟をなす、全體法の根源に到つて見れば迷悟得失の論量はない、だから吾々とても不増不減の佛性は皆具へて居る、佛と同じ心、即ち自性清淨心は皆持つて居るではないか、佛性の上より云ふ時は生佛不二ではないか、そ



れを前に云ふたやうに悟らせたいなど云つて、色々の手段を以てするのは、慈悲は慈悲に違ひないけれども本分より云ふ時は既に遅い話で、つまり「好肉上に瘡を剋り、窠をなし窟をなす」ので、丁度立派な肉の上に傷を付けるやうなものだ、爲人提撕の手段として、一言一句、一機一境と指示するのは、實はこれズーツと低い話である、法の根本から見れば既に第二、第三である、アイヌ人などが額に入墨をするのは好肉上の傷である、即ち前の一機一境、一言一句の手段方便も結構は結構であるが、向上本分より見れば好肉上の傷である、それが爲に「窠をなし窟をなす」で、窠とは地の穴窟も岩窟など云つて矢張り穴、何でも穴の中と云ふものは不自由なもので、納は此間大森で按摩を頼んだ、其の按摩の話に、大森邊が開け始めの頃、以前の路を行くと畑の傍に掘りかけた井戸があつた、其の中へ落ち込んで助けを呼べど人通りもなく、一晚中井戸の中に居て、夜を明かしたと云ふ、誠に窮屈で、あんな不自由な目に會つた事はないと云ふて話しました、窠をなし窟をなすとは不自由なる窮屈を云ふたのだ、兎角に人間といふものは窠窟にはまつて、困る、學問をすれば學問といふ窠窟にはまる、坐禪をして悟れば悟つたといふ窠窟にはまる、金があれば直に財産

といふ窠窟にはまる、斯様に文字や悟りや學問やの色々の窠窟にはまる、一度窠窟に陥るとさつぱり、自由が利かなくなる、それではいかぬ、結局その窠窟にはまらずそれを使ふて行くやうにせねばならぬ、この垂示は五段に分れて居る。茲が一段の終りである。

「大用現前、軌則を存せず且く向上の事あるを知らしめんことを圖る、蓋天蓋地又模索不着」これが二段である、大用現前、軌則を存せずでなくてはならぬ、大用とは大なる作用と云ふことで、或る時は放行し或る時は把住するのが大用現前である、大なる働きとなる、小さな軌轍にはまらぬ、役人でも小役人になると、兎角規則面ばかり縛られて、一向抄らぬ、軌則を存せずとは、孔子が「七十にして心の欲する處に從つて、矩を踰えず」と言つたと同じで、規則を守らねど別に規則に反することもなく、任運の動作がちやんと道に契つて行く、之を佛法では解脱の境界といふて居る、これが窠窟に入つては解脱ではない、太陽が東から出れば、月は西に入る、之は規則があつて、規則を離れて居る、なんにも窮屈な規則らしき處はない、多くの人は皆規則に縛られて居るが、決して規則はどうでもよいと云ふ譯ではないが、規則を超越



して自然と規則にはまつて行かねばならぬ。且く向上の事あることを知らしめんことを圖る。此の向上の事といふは一切の窠窟を離れた處で、なんでも迷とか悟とかを議論をして居る内は駄目だ。我々は向上の事、即ち迷も悟りも離れた絶對眞如の境界に居りさへすれば、安心決定だ。蓋天蓋地。で向上の事は宇宙一杯になつて居る。廁の隅から天の上まで、どこにでも會はれる。それに會へぬのはつまり修行が足らぬからのことだ。眞理は宇宙一杯になつて居る。一杯になつて居るから又模索不著だ。どこを索しても同じ事で、丁度虚空は宇宙一杯になつて居るから、何處を索しても分らぬと同じことだ。蓋天蓋地探るものも探らるゝものも皆御互が眞理の本體だから別に探りやうがない譯だ。これで二段の話が済んだ。

慙麼も也得たり。不慙麼も也得たり。これから第三段で、慙麼と云ふは支那の俗語だ。禪書には澤山用ゐられて居る。斯くの如くと云ふことで、斯くの如くなるも得たり。斯くの如くなるざるも亦得たり。この「得たり」と云ふは放行と云ふて、ゆるすこと與へる方の事だ。それもよし、之もよし」と云ふ風に例へば或人が親類の者が亡くなつたと云ふたらそれもよし、親が亡くなつたと云ふたらあゝそれもよし、子がなく

なつたと云ふてもそれもよしと、なんでもこの様な風に總てをゆるし與へて行くそれが放行だ。例へばこのコップに水を入れる、お盆に物を載せる、これ皆ゆるす方即ち得たりの有様である。不得はゆるさぬ。奪ふ方のことである。此コップも水さしも不得の方から見れば、水さしは水さしで水さしではない。此コップはコップでコップではない、お盆はお盆でお盆ではない。何れも分子が暫く因縁によつて集つて、夫々の形をなして居るまでの事で、本來は皆同じもので、コップやお盆は本物ではないとゆるさぬ。處が「慙麼も也得ず」だ。太廉。織生とは龜より細に入ることを廉織といふて、細かに行届いて、一機一境一言一句と、佛法の道理を悟らせた。この慈悲より一切を放行して、事細かに導いて行く。向下の手段から見たのである。

次に第四段は「慙麼も也得ず、不慙麼も也得ず」と前と反對に、ゆるさない方の意、それは把住といふて、斯くの如くなるもいかぬと、何でもゆるさぬ方から云ふたのである。總てゆるす方から云ふたらゆるす、ゆるさぬ方から見たらゆるさぬ。把住放行よく其機を見てやらねばならぬ。これは禪家ばかりの事でない、一國の事、一會社の事、一家の事、皆然りて、或時は把住、或時は放行でなければならぬ。そのゆるさぬ方か



ら見れば、太孤危生。これは孤危峻峻にして寄つてもつけぬ様子だ、手厳しい提撕をいふたのだ。恰度富士の山がきつ立つて居て、よりつきやうのない、氣高き有様で、これは向上の方から見たのだ、これで四段が終り次ぎは五段目になる、二途に涉らず、如何が是ならん、請ふ試みに擧す、看よ、二途とは太廉纖生と太孤危生、即ち把住と放行、或は向上と向下、得と不得、この二途何れにもわたらず、如何が即ち是ならん、把住にもつかず、放行にもわたらぬ、得不得何れにも片落ちせぬ、そこに一線路を通ずる活手段があるに相違ない、怎うしたらよいか、次ぎの本則を示すからしつかり見て取るがよい。

〔本則〕擧。馬大師不安。院主問、和尚近日尊候如何。大師云、日面佛月面佛。

〔續方〕擧す。馬大師不安。院主問ふ、和尚近日尊候如何。大師云く、日面佛月面佛。

馬大師とは馬祖道一といふ人で、生家が馬氏であるところから古來馬師、馬大師、馬祖などといふて居る、南嶽和尚の弟子で、南嶽は嗣法の弟子が百三十九人あつて、

皆善知識ばかりだつたと云ふことだ、馬大師も其一人だ、この馬大師も又却々の人物で、馬祖下に八十餘員の善知識を出だすといはれて居る、江西馬祖山に住して盛に禪風を擧揚せられた、此人が興元四年正月、建昌の石門山に登つた、さうすると林の中に岩窟があつた、馬大師は侍者に對つて、我が朽質來月に至つて此地に還るべしと豫言せられた、果して翌二月一日に入寂して此岩窟に葬つたといふことである、境界の出來た人になると死期が辨ると見える、この問答はその死ぬる前の事だ、兎も角その病中にあつたことだ、不安と云ふは安からずだ、不調といふも同じこと、即ち四大不調で病氣のことである、院主とは住職に代つて一山を統轄する人、副住職の様な大切な役目なるが故に、今は一山を代表して住職の病氣見舞に來た譯である、院主問ふ、和尚近日尊候如何、候と云ふは一年に期節が七十二回變ると云はれる、其期節の事を云ふのだが、茲の候は云は、御無沙汰の時に問候など云ふ其候と同じ意義で、一口に云へば、和尚此頃御病氣は如何、何と云ふ御病氣かと云ふやうな譯である、すると馬大師の答が面白い、わしの病氣か、病氣は日面佛月面佛ぢや、こんな病氣は四百四病の中には無い、恐らく東西古今に見聞することの出來ない珍しい



い病名である、これは『三千佛名經』の中に、日面佛、月面佛と云ふ佛の名がある、早く云へば日月と云ふやうなものだ、三千年の昔から今日迄、日は東から出て月は西に沈む、何も法の上に變りはない、つまり、日面佛、月面佛とは、不生不滅の法身の當體を云ふたので、この當體は生滅とか病不病とかに與つて居ない、是が馬大師即今の境界である、是が解れば今日の我等も馬大師に相見底の人といふべきである、その法身は御互に皆持つて居る、御互に皆日面佛、月面佛たるべき大精神は持つて居る、この精神は病不病を離れ、生滅を超えて居る、その生死や病不病を離れた安心決定常住不變の法身の様子を馬大師は日面佛、月面佛と示して居る、この邊は文字に付て居たら一向解らない、此前『坐禪儀』の折に、西有禪師が赤痢にかゝられた時の話をした、が、重い赤痢で日に何十度となく下痢をする、交通遮斷で、醫者や看護婦がついて居る、そこへ納は見舞に行つたが、丁度看護婦がお尻の下に便器を据えて、盛んに下痢をして居り乍ら、眼鏡をかけてちやんと本を讀んで居られた、熱も隋分高い、そこで納は禪師に、随分御難病のやうだから、書見は御止めになつては如何と云つた處が、ナニニひる方はひる方、見る方は見る方と云はれた、其の後病氣は癒つたが、ここ

が即ち病不病を離れた境界で、所謂日面佛、月面佛である、恁う修養が出来てさへ居れば如何なる場合に臨んでもまご／＼する様なことはない、この境界に到るのが禪の目的である、この境界に到るのは一通りではない、そこへ行くと西有禪師は實に豪い、納も永い間左右に侍いて居つたから、面の當りその様子を見ました、馬大師も此通り病氣にかゝつて病氣を離れ、生死岸頭に臨んで然も生死を超えて居られる、實にお互の修養の好模範とすべきである。

〔頌〕頌云。日面佛、月面佛。五帝三皇是何物。二十年來曾苦辛。爲君幾下蒼龍窟。屈堪述。明眼衲僧莫輕忽。

【讀方】頌に云く、日面佛、月面佛、五帝三皇、是れ何物ぞ。二十年來曾て苦辛す。君が爲に幾たびか蒼龍窟に下る。屈、述するに堪えたり。明眼の衲僧も輕忽すること莫れ。日面佛、月面佛のことは今話した通り、本則そのまゝを出したのである、五帝三皇、是れ何物ぞ、五帝三皇は支那の先祖で、日本で云へば天照大神か神武天皇といつた様な御方である、それを指してこれ何物ぞなど云へたものでない、此一句があるば



かりで、支那ではこの碧巖を大藏經の中に入れることを許されなかつたと云ふことだ、成程碧巖は大切な本だが、大事な祖先をこれ何物ぞなど云ふたのを公に認むる譯には行かぬ、之も一理だ、言葉は慎まねばならぬ、然し之は決して聖天子を悪口いふたのではない、日面佛月面佛の上から見れば、三皇五帝の帝位なるも皆生死を離れて居らぬ三界中の人である、三界は生死の中である、生死を離れ、滅不滅を離れた向上の眼から見れば、五帝三皇是れ何物ぞである、賤下した語ではない別に悪口を云ふた譯のものでない、唯だ向上の眼から比較を取て云ふたまでのことだ、雪竇ほどの修養の苦辛を重ねた人でなくては、なか／＼恚ふ思ひ切つて云へた言葉ではない、そこで二十年來會て苦辛す、自分の苦辛を云ふて居る、今日でも一通りの學者や金持ちになるにもなか／＼五年や十年では出来ぬ、どうしても二十年の辛酸を嘗め盡さねばならぬ、世界に有名な人達は何れも皆然うである、君が爲に幾たびか蒼龍窟に下る、大海の中の龍の住んで居る處は、命を惜んでは到底も行けぬ、虎穴に入らずんば虎子を得ず、命を惜んで居つては虎の子は得られぬ、驪龍胎下の珠を得るには是非共一度は蒼龍窟へ入らねばならぬ、何でも千辛萬苦、自分の身を省み

ず進むところに成功がある、蒼龍窟と云つても海の中と斗り思はぬがい、自分の胸を痛めることだ、苦辛することだ、世間の成功者と云ふものは、皆相應に自分の胸を痛めた末のことで、樂をして居ては成功されるものでない、艱難は汝を玉にする、何でも一度も二度も苦しむがいい、だから雪竇も次の句に、屈と云つた、こゝが面白い、屈とは聲をひそめ、息を呑み、體を枉げて、いやがんだ、苦しい形容、其のしやがんで居るのは、やがて伸びんが爲だ、尺蠖の屈するは伸びんが爲なり、で後になつてうん、と伸びやうと思つたら、屈と一度はうんと屈しなければならぬ、後に天下をとつた秀吉公も曾ては松下嘉平治の處で草履取に成つて屈したものだ、箇人斗りの話ではない、國家の上でもそうだ、日清戦争といふ屈があり、日露戦争といふ屈もやつたればこそ今日日本は五大強國の一とまで伸びられたのだ、その戦争でもさうである、伏勢をして居る内は大に苦しいが、然しいざ敵が來たら散々打惱ます勢力を持つて居る、述するに堪えたり、雪竇のやうに幾度も命がけの苦辛を重ねた人でこそ今日斯の如く思ひ切つたことが云へるのである、明眼の衲僧も、輕忽すること勿れ、明眼の衲僧と云ふは、眼の開いた僧侶即ち活きた眼を具へた人でも、こゝの處は輕



輕に看過してはいけない、まして平凡な人達は尙更のことである、大死一番寒骨に徹して初めて大活すべきなりだ、油断せずにつかり修行するがいい、その内に日面佛月面佛に徹底する時節が来る、その時に本當に馬祖を體得することが出来るのである、文字だけのことは碧巖はそんなにむづかしくないが、その眞意を體得することが容易でない、全體これを體得させるのが碧巖の目的である、何でもそのつもりで參究せらるゝがよい。

### 第四則 德山挾複子

【垂示】垂示云。青天白日、不可更指東、劃西。時節因緣亦須應病與藥。且道、放行好、把定好。試舉看。

【讀方】垂示に云く、青天白日、更に東を指し西を劃るべからず。時節因緣亦須らく病に應じて藥を與ふべし。且く道へ、放行するが好きか、把定するが好きか。試みに舉す看よ。

茲の處は三段になる、西を劃るべからずと云ふ迄が一段、藥を與ふべし迄が二段、其あとが三段になる、青天白日は誰でも云ふことだが、さて誰でも青天白日と云はれやうか、今は精神の上に一點の曇りもないのが青天白日である、皆自分の精神上に、何かわたかまりがある、なか／＼ちりほこりもなく、分別妄想もなく、佛の心になり切つて、青天白日の境界に成つて行くことはなか／＼むづかしい、更に東を指し西を劃るべからず、方向を知つた人に、何も態々、こちらが東、あちらが西と指して教へる必要はない、餘計な話だ、佛法の方向を知つて青天白日の境界に居る人に、更に方向を教ゆるなどはそれは餘計な話だ、こゝまでが一段で、これまでは向上から云ふたのだ、青天白日の境界から見れば迷悟の方角もなければ凡聖の際限もない。迷ふが故に三界城だが、悟つて見れば十方は空だ、どこに東西や、南北の別があらうか、だから古人は、道に南北の祖なしとも言ふて居る、衲が「禪學明鑑」の序を書いた因縁で、其本を買つて見た人から、迷ふが故に三界あり、悟るが故に十方空、と云ふ意味で、何か書いて呉れと頼まれたから、本來無東西、何處有南北、と書いてやつた、丁度こゝの處だ、これから第二段で、時節因緣亦須く病に應じて藥を與ふべし、これは向下の



手段を示したのだ、相對の上の話だ、例へば、話をする人、話を聞く人、親子、師家と學人、恁うして今まで見ず知らずの、皆さんと柄が、話をする人、話を聞く人となつて居る、これも時節因縁だ、春と云ふ時節が來て花が咲く、これも時節因縁である、病があれば、醫者に見せ、藥を呑む、是亦相對の上から見た時節因縁である、病に應じて藥を與ふる、臨機應變の働きがなくてはならぬ、即ち第一段は、青天白日の向上、絕對の本分の上から云ひ、第二段は時節因縁の應病與藥、即ち相對の慈悲の上から云ふのだ。且く道へ、放行するが好きか、把定するが好きか、放行と云ふは、放して自由に働かせる様子である、つまり向ふへ放ちやることゝ、把定と云ふは、一切を奪つてゆるさぬ様子である、つまり握つたきりではなさぬことゝ、人間の手も開いたきりでもいかぬ、さればとて握つたばかりでもいかぬ、或時は人に施し、又或時は奪ふて、活用する手段がなくてはならぬ、放行は前の青天白日の絕對に當り、把定は應病與藥の相對に當る、さて放行が好いか、把定が好いか、試みに擧す、看よ、試みに次の本則に就て參究するがよい。

【本則】擧。德山到瀉山、挾複子於法堂上、從東過西、從西過東。

顧視云、無無便出。雪竇著語云、勘破了也。德山至門首、却云、也不得草々、便具威儀、再入相見。瀉山坐次、德山提起坐具云、和尚、瀉山擬取拂子。德山便喝、拂袖出。雪竇著語云、勘破了也。德山背却法堂、著草鞋、便行。瀉山至晚問首座、適來新到、在什麼處。首座云、當時背却法堂、著草鞋出去也。瀉山云、此子已後向孤峰頂上、盤結草庵、呵佛罵祖、去在。雪竇著語云、雪上加霜。

【續方】擧す。德山瀉山に到る、複子を挾んで法堂上に於いて東より西に過ぎ、西より東に過ぎ、顧視して無々と云つて出づ。雪竇著語して云く、勘破了也。德山門首に至り、却つて云く、也草々なることを得ずと、便ち威儀を具して再び入つて相見す。瀉山坐する次で、德山坐具を提起して云く、和尚、瀉山拂子を取らんと擬す。德山便ち喝して、拂袖して出づ。雪竇著語して云く、勘破了也。德山、法堂を背却して草鞋を著



けて便ち行く。瀉山晩に到つて首座に問ふ、適來の新到什麼の處にか去る、首座云く、當時法堂を背却して草鞋を著けて出で去れり。瀉山云く、此子已後孤峯頂上に向つて草庵を盤結して佛を呵し祖を罵り去ること、在らん。雪竇着語して云く、雪上に霜を加ふ。

徳山も瀉山も有名な禪僧である、この公案は横綱と小結との立會ひのやうなものだ。徳山は支那の蜀の人で、始めから禪宗の僧ではない、三論や法相の教理を研究した、名高い學僧であつた。ことに『金剛經』に精通して居つた人で、周氏である處から世人が周金剛又金剛王といふ位であつた、其時分に支那の南方に禪學が盛んに起つて、其禪僧たちが氣に喰はんといふところから、一つ俺の金剛經で片つぱしから説き伏せてやらうと云ふので、金剛經の註釋書をうんと背負つて南方に向て蜀を出發した、澧州と云ふ處まで行き、山の下の茶屋で一と休みやすんで、そこに賣つてゐる五文どり、即ち餅を買つてたべやうとして、茶屋の婆さんに、おいその餅をくれと云つた、その權幕はいづれ、背負つた金剛經を鼻にかけ、婆さんおれを知らぬか、おれは金剛王だぞと云つた風に、恐ろしく鼻息が荒かつたと見える。田舎へ行くこ

よく三國一の甘酒といふ看板が出て居る、あつちへ行つても、こつちへ行つても、三國一がある、三國一がいくつもあるから面白い、徳山も三國一の權幕でなか／＼鼻が高い、そこで婆さんが、それではこの餅をあげますが、一體貴方の背負つて居らるは何ですか、これか、これは青龍鈔といふて金剛經の註釋だ、俺は金剛王だぞ、金剛經のことなら怎んなことでも尋ねるが、いとます／＼鼻息が荒い、それでは御尋ね致さう、其の答へが出来たら餅を賣りませうが、もしも答へが出来なかつたら御免を蒙ると、問答を始めた、金剛經の中に、過去心も不可得、現在心も不可得、未來心も不可得とあるが、貴僧は一體どの心で喫ふつもりかと、婆さんに問はれて、さすがの徳山も此一言で、何も云へぬ、餅を喰はぬ先から咽喉がつかつた、そこで婆さんは、お前さんは、まだ／＼參究が足らぬ、此山に龍潭と云ふ名僧が居らる、から、行つて參じたらよからうと指圖した、そこで徳山は龍潭の處に行つた、この龍潭と云ふは、其當時のなか／＼の禪僧だ、徳山は龍潭の處に行つていきなり、久しく龍潭と響く、到り來れば龍も見ず、又潭も見ずと、龍潭は屏風の後から、汝親しく龍潭に到るやと云はれた、一旦禮拜をなして歸つて、又夜になつて入室した、歸りに眞暗だから、龍潭は



手燭に火をつけて渡し、徳山が之を受取らうとした刹那、龍潭はフツと其火を吹滅した。こゝに於いて徳山は忽然大悟したと云ふ話がある。瀉山の處へ来たのは悟後の事である。要するに徳山は、臨濟の喝、徳山の棒と併べ稱せられて機鋒の鋭い有名なる人である。

其徳山が悟つた後に第一番に瀉山の處へやつて来たのだ。瀉山もその當時の有名な禪僧で此の時は既に八十の老體であつた。複子を挾さんで、法堂上に於て、東より西に過ぎ、西より東に過ぎ。云々、複子と云ふは、昔禪僧は、皆大きな風呂敷に、着物や其他の荷物をいつしよに入れて、背負つて歩いたものだ。徳山はそれを背負つたまま、法堂と云ふは一口に云へば本堂だ、複子を背負つた、旅仕度のまゝで本堂へつか上つて、東より西、西より東とあちらこちらを傍若無人に歩いて、話相手は一人も居ないと云つたやうな調子で、無々と云つて出て行つて了つた。複子を背負つた儘で、法堂へ上つたのが已に無禮な仕打であるのに、あちらこちら歩き廻つてその上に尙ほ無々なぞ云つて、まるで人を併呑し切つたやり方である。雪竇が後で著語して、看破了也と云つた。之は雪竇が瀉山に代つて、無々なんかと力んで出たのは如何にも豪らさうだが、徳山の脚下はすつかり看抜いたぞと云つた様子だ。皆さんはこれを如何に看破するか、雪竇に委ねる必要はあるまい。徳山門首に至つてそれから徳山は門前まで行つたが、又引歸した。無々と云ふて、出ては来たが却つて云く、也草々なること得ずと、おれも少し輕卒だつた。天下の名僧たる瀉山に對して、稍々輕卒だつたと氣が付いたのは善い、人間は氣がつかねば駄目だ、便ち威儀を具して、そこで今度は、搭袈裟着箋というて、ちやんと師家に相見する處の威儀を具して再び入つて相見した。前の風呂敷包を背負つた時とは打つて變つた様子だ。瀉山坐する次で、其時瀉山は泰然として坐禪をして居つた。徳山は、座具と云つて、お袈裟と一所に禪僧が常に攜帶して居る敷物を提起して、手にすつと持ち上げて、和尙と呼びかけた。丁度戰を挑んだやうなものだ。今日の禪僧なども、よくこんな眞似をする。すべて眞似ごとはいかぬ、戰を挑まれた瀉山は、先づ拂子を取つて泰然とかまへ様とする處を、徳山は一喝を下した。拂子がなければ答が出来ぬかと云ふ權幕で大喝を下しておいて、拂袖して出づ。其まゝ、すん／＼と本堂を後にして出て行つてしまつた。雪竇がこゝにも著語して、又看破了也と云つた。老將軍の前に戰を挑み乍ら、又出て

何にも豪らさうだが、徳山の脚下はすつかり看抜いたぞと云つた様子だ。皆さんはこれを如何に看破するか、雪竇に委ねる必要はあるまい。徳山門首に至つてそれから徳山は門前まで行つたが、又引歸した。無々と云ふて、出ては来たが却つて云く、也草々なること得ずと、おれも少し輕卒だつた。天下の名僧たる瀉山に對して、稍々輕卒だつたと氣が付いたのは善い、人間は氣がつかねば駄目だ、便ち威儀を具して、そこで今度は、搭袈裟着箋というて、ちやんと師家に相見する處の威儀を具して再び入つて相見した。前の風呂敷包を背負つた時とは打つて變つた様子だ。瀉山坐する次で、其時瀉山は泰然として坐禪をして居つた。徳山は、座具と云つて、お袈裟と一所に禪僧が常に攜帶して居る敷物を提起して、手にすつと持ち上げて、和尙と呼びかけた。丁度戰を挑んだやうなものだ。今日の禪僧なども、よくこんな眞似をする。すべて眞似ごとはいかぬ、戰を挑まれた瀉山は、先づ拂子を取つて泰然とかまへ様とする處を、徳山は一喝を下した。拂子がなければ答が出来ぬかと云ふ權幕で大喝を下しておいて、拂袖して出づ。其まゝ、すん／＼と本堂を後にして出て行つてしまつた。雪竇がこゝにも著語して、又看破了也と云つた。老將軍の前に戰を挑み乍ら、又出て



行つてしまつた、大概わかつたぞと云つた調子だ、話はそれで済んだが、瀉山は却々そのまゝにはして置かぬ、瀉山晩に到つて云々晩になつて、首座とは長老のこと、其長老に問ふた、適來の新到、什麼の處にか在る、先刻大きな風呂敷を背負つて來た、新參の僧は、どこに行つた、と之は稍首座を試みんため、に下した鉤である、どこへ行つた、この言葉に響がある、向上へ行つたか、向下へ去つたか、ところが首座は正直だ、首座云く、どんだん風呂敷を背負つて、向ふへ行つて了ひました、と答へた、すると瀉山云く、此子、德山は後に孤峯頂上に向つて、草庵を盤結して、佛を呵し、祖を罵り去る、ことあらんと、こゝが瀉山の放さぬところだ、流石は大善智識だけにこの言葉には大變力がある、德山は後になると、ずぬけた高い峯の上に行つて、庵室を作り、さうして佛を叱りつけたり、祖師を罵しつたりするだらう、つまり德山の修養は見識には却却見處があるけれども、向上の一邊に高く止つて居るばかりで、向下に下つて人を接する作用がない、向上の高い處にばかり止つて、觀音のごとく下に向つて、慈悲を以て濟度する心が缺けて居る、瀉山は放したやうで放しては居らぬ、流石は祖門の老賊だ、雪竇は茲に著語を下して、雪上に霜を加ふ、と言ふ、これについては、古人も色

色説があるが、雪の上に霜を加へたと云ふは、白い上に白い物を加ふ、云はゞ同じことをくりかへすことだが、これは德山が瀉山の處に來る前に龍潭の處に行つた、その時龍潭はえらく德山をほめて、この中、箇の漢あり、牙は劍樹の如く、口は血盆に似たり、一棒に打てども、頭を回らさず、他時孤峯頂上に向つて、吾道を立し去らんと云つた、然るに瀉山も亦茲に同じく、孤峯頂上云々と云つた、そこでどちらも德山を記刺するに同じ事を云ふたから、それを雪竇が暗に、雪上に霜を加ふと云ふたのだ。

〔頌〕頌云。一勘破。二勘破。雪上加霜。曾嶮墮。飛騎將軍入虜庭。再得完全能幾箇。急走過。不放過。孤峰頂上草裏坐。咄。

【讀方】頌に云く。一勘破。二勘破。雪上に霜を加ふ。曾嶮墮。飛騎將軍虜庭に入る。再び完全を得る能く幾箇ぞ。急に走過す。放過せず。孤峯頂上草裏に坐す。咄。

一勘破と云ふは、始め德山が無々と云つて出て去つた、其時雪竇が「勘破了也」と云つた、それを指したのだ。二勘破と云ふは、同じく本則に瀉山が拂子を取らんとした時、一喝して飛び出した、其時にも同じく雪竇は「又勘破了也」と云つた、それを指した



のだ。雪。上。に。霜。を。加。ふ。曾。て。嶮。墮。す。雪。上。に。霜。を。加。ふ。とは、一度ならず二度迄點檢に會つて、曾て嶮墮す、嶮墮とは危ない處へ落ちこんだことだ、徳山は何度も虎口裏に身を横へたやうな危嶮の場合に陥つたのだ、殆んど喪身失命を免れない場合になつた例へば飛騎將軍虜庭に入るで、これは史記列傳の李將軍の故事を例に引いて來た、漢の武帝の臣下で、李廣といふ弓術も馬術も上手の人だ、當時飛騎將軍と謠はれた位であつた、この將軍が匈奴に捕虜となり死地に陥つた時、番兵の馬を奪つて、追つかけて來る奴を、弓で射殺して逃げ歸つたと云ふ事がある、つまり徳山二度迄瀉山の會に飛び込んで危き處ろを逃れたのは、丁度飛騎將軍の面影がある、だから再び完全を得る能く、幾箇ぞ、二度も三度も捕虜になつて、こんなうまく逃げ歸るのは、徳山でなくては出來ぬわざだ、どこへは徳山を大變賞めて居る、急に走過す、うつと逃げたは逃げたが、どつこい放過せず、瀉山は却々放さぬ、孤峯頂上草裏に坐す、で、高い所にばかりお天狗で止まつて、向下の作用が缺けて居ると雪寶は瀉山に賛成して居る、咄とは、そんな處にばかり足を止めて居る様ではいかぬ、と喝破したのだ、徳山ばかりの事と思はぬがよい、人々御互は今日什麼の處に往來して居るか、

こゝが參究のしどころである。

第五則 雪峰盡大地

(大正八年三月二十七日 於三菱本社第一會議室)

【垂示】垂示云。大凡扶豎宗教、須是英靈底漢。有殺人不眨眼底手脚、方可立地成佛。所以照用同時、卷舒齊唱、理事不二、權實並行。放過一著、建立第二義門。直下截斷葛藤、後學初機、難爲湊泊。昨日恁麼、事不獲已、今日又恁麼、罪過彌天。若是明眼漢、一點謾他不得。其或未然、虎口裏橫身、不免喪身失命。試舉看。

【續方】垂示に云く。大凡宗教を扶豎するは、須く是れ英靈底の漢なるべし。人を殺すに眼を眨せざる底の手脚あつて、方に立地に成佛すべし。所以に照用同時、卷舒齊唱へ、理事不二、權實並行ふ。一著を放過して、第二義門を建立す。直下に葛藤を



截斷せば、後學初機溇泊を爲し難し。昨日も恁麼事已むことを得ず、今日も又恁麼罪過彌天。若し是れ明眼の漢ならば、一點も他を護すること得ず。其れ或は未だ然らずんば、虎口裏に身を横へ、喪身失命を免れず。試みに擧す看よ。

此間から齒が痛んで齒醫者の處に行きましたら、齒醫者の人達が三四人集まつて、夜分碧巖の提唱をしてくれと云ふことであつたから、提唱を致しました。其提唱の時、此の偈を書いて見せましたことである。無舌人與無舌人、拈來公案百條真、誰知言外不傳意、漏洩桃紅李白春。これは、禪家に於ては能く無舌人と云ふことを申します。舌の無い人と云ふと、いかにもおかしいやうだが、釋尊四十九年の說法も無舌人の解語である。説くことは説くけれども語に語相がない有と説くも、その有にも無にも更に用事がない、それ故に聞く人も、其の言葉や文字に著くべきでない、若しも著いたら佛の本懷は解らぬ事になる、かるが故に釋尊の說法は無舌人の解語である。そこで今、無舌人と無舌人と申したのは、垂示をせられた圓悟と、頌を作られた雪竇とを云ふたのである。兩人とも矢張り無舌人であり、説くことは説くが、其の語に語相がないことを云ふたのだ。百條真とは、百則の公案を指したのである。言外

不傳意とは、言葉や文字にあづからぬ言葉の、ひっき、即ち言外不傳の眞意を取らねばならぬの意であります。ちやうど此の偈を作る時は春であつたから、紅桃李白春と述べた。春が來れば、百花爛漫と咲き亂れ、誰が咲かしたと云ふでもないが、自然と桃紅李白の花が春の陽氣に漏れて咲き亂れる、其自然の境界は何とも云へぬ、理屈を離れた言外領略の宗を述べたのである。これは當俱樂部でも碧巖の開講の時に實は開講の偈を述べるが本意であつたが、其時は遂に述べなかつた、それ故に今茲に示したのである。禪宗では、碧巖集でも、從容錄でも、正法眼藏でも、皆其開講の時には必ず偈を述べて經を讀んで其の式がある、實はこゝでも第一則開講の初めに述べるが本當だつたが略して述べなかつたのである。

大凡宗教を扶堅せんには、須らく是れ、英靈底の漢なるべし。宗教と云へば今日では、佛教だの耶蘇教だの色々あるが、茲で宗とは禪宗を指して居る、教とは佛教を指して云ふ、禪教は一致である、今ここで、宗教と云ふは、佛教の事と思つてもよい、つまり佛教を盛んにするには、英靈底の漢、即ち英雄豪傑の士でなくてはならぬとの意である、之は獨り宗教ばかりではない、我日本の國勢を盛んにするにも、宰相大臣皆



英靈底の漢でなくてはならぬ、縣下の事に於ても一郡一村の事に關しても皆さうである。佛教家では政治家などは違ひ、特に道心堅固の人を英靈底の漢と云ふのである、しかし今日の僧侶達の多くの中には、皆々でもないが、名聞利養に走る人がなか／＼あるやうに思はれる、名前ばかり立派でも其實さうでない者が多いやうだが、之では佛法は盛んにはならぬ、道心堅固にして名聞利養を離れた人でなければ人を教導する任務には當れない、英靈底の人達が澤山あつて始めて、宗教が盛んになるのである、道心堅固にして人格の高き人を望むことである。人を殺すに、眼を<sup>○</sup>眩<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>ざる<sup>○</sup>底<sup>○</sup>の<sup>○</sup>手<sup>○</sup>脚<sup>○</sup>あ<sup>○</sup>つ<sup>○</sup>て、人を殺すにも色々ある、諸國諸大名は弓矢で殺す、糸屋娘は目で殺す、と云ふこともある、人に心配をかけて、さうして其の人を殺すこともある、要するに殺すにも色々ある、眼を眩せざることは、人を殺すに、まばたきもせずならみ付けて殺すこともある、之は人を殺す場合ばかりでなく、其の反對に人を活し、又人を悟らせる場合も同様で、黙つて居て、身動きもせず居ながら人に人を悟らす位の作用がある人でなくてはならぬ。禪宗では口の說法よりも體の說法を重んずるのである、口の說法は響きが小さい、釋尊の說法は、口の說法とともに身體の說法であ

る。釋尊の處に外道の人が來て、有言を問はず、無言を問はずと問ふた、釋尊は默然として唯良久した、それから外道は、世尊大悲大悲、我迷雲を開いて、我をして得入せしむと云つて去つた、之は、外道も伶俐の漢であつた、釋尊良久默然の處、全身皆是說法になつて居る。昔院主が藥山和尚に說法を頼むた、和尚は鐘を鳴らして皆を集めさせた、集まつたところで和尚は、方丈から出て來て、高い處に上つて、じろ／＼と皆の顔を見て、そのまゝ方丈に歸つた、院主が方丈に行つて、和尚は折角人を集めて、なせ說法もせずに引込まれたかと理屈を云ふた、藥山、經に經師あり、論に論師あり、争でか老僧を怪しみえんと云つた、それは、天は高く地は低く、柳は緑に花は紅に、其物其物がそのまゝ、說法をして居るではないか、例へば此盆でも、水さしでも、机でも乃至世界の物、皆そのまゝ、無聲の說法ではないか、道元禪師は、不垂一言の說法と云はれたが、これがよい、口で八釜しく云ふやうな說法は限りがある、全身が經卷になるとよい、全身が經となるのは却々むつかしい、一國の宰相其他總て、人の上に立つ人は、皆此不垂一言の說法の力がなくてはならぬ、維摩の一默其聲雷の如し、禪宗は只口の說法のみでなく、全身の說法がなくては駄目だ、方に、立地に成佛すべしとは、手



問とらず、其人を捕えて、直に佛にすると云ふ意である、少し先きの公案にも、慧超が法眼に問ふた、如何なるか、是れ佛、法眼云く、汝は是れ慧超と、そこで慧超は、忽然として悟つた、一向手間はとらせず、直に佛にしてしまつた、これはたゞ慧超のみに限らず、人々皆眞實の佛を持つて居る、そこでいつでも佛になれるが修行がいる、彼の慧超が忽然として悟られたのは千辛萬苦を経て來た曉である、平生修養のない人では、なか／＼さうはいかぬ、禪宗では、坐禪が即ち立地成佛だ、坐禪の端的は、口と體と心と即ち身口意の三業が清淨になる、三業清淨、その三業清淨の當體を立地成佛と云ふのである、此垂示は、四段に分れて居るが、こゝまでが一段、此次ぎから、今迄の處を布演してゆく、所以に、照用同時、照用とは、向ふの人の心を照し見るのが照、それから照し見て、其人相應に接得して行くのが、用例へば、或は喝、或は棒と、色々その人の機根に應じて、導く法がある、觀音が三十三身に身を現じて説くのも、矢張り此照用の働きである、而して、其照と用との働きが、同時でなくてはならぬ、例へば日なたに出れば、丈の高い人の影は直に長く、うつり、低い人の影は短かく、うつる、鐘を大きくたゞけば大きく鳴る、そつとたゞけば小さく鳴る、即ち是れ同時である、人を支配す

るにも、この照用同時が必要である、鈍な人には鈍なやうに、敏き人には敏きやうに、使ひわけてゆかねがならぬ、卷舒齊しく唱へとは、卷と卷いたばかりでもいかぬ、舒とのばすこともなくてはならぬ、前に説いた「把住放行」と同様で、「把住」は卷に當り、「放行」は舒に當る、其伸ばしたり、縮めたり、把えたり、放したりする、それが程よくゆかねばならぬとの意である、之は、前にも云ふた通り、一軒の經濟も、一會社の事業も、又は國家の政治にしても何れも「卷舒齊唱」でなくてはならぬ、之を縮むれば方寸の裡、之を伸ばせば六合にわたる、自由自在の手段はこゝの處である、理事不二、之も同じ事で、理とは無差別から見たことになる、事とは差別から見たことになる、即ち「無形」と「有形」の事になるが、此形の有るものと、形の無いものとは、別の様であるが決して離れては居らぬ、所謂「不二」である、形の有るものは、形の無いものが一時の因縁に依つて形をなして居るまでのことで、本來は無いものである、茲で云へば、此コップや水さしは事、之に水を入るゝは理である、又此お盆は事、物を載せることは理である、佛法は、此事と理と何れか一方に偏せず、理事不二と説く處に活用がある、「起信論」の中に「隨緣眞如、不變眞如」と説いてある、其「隨緣眞如」はこゝで云ふ、事のこと、物を



建立する差別界のこと、又、不變眞如は、理のことで、無差別界のことと云ふが、斯く云ふと、二つあるやうに聞へるが其の實二つはない、つまり、早い話が、理論と實際とは必ず同一でなくてはならぬ。權實並行、之れも同様で、權とは臨機應變の活用手段、實は一定不變の道理、つまり手段ばかりでもいかず、理屈ばかりでもいかぬ、理屈と手段とがよく事物に對して、融通し合つて行かねばならぬ、法華の中にも、方便門と實相門とがある、而し、方便と實相と二つある譯ではない、丁度電車に乗て、淺草に行くと同じで、電車に乗るのは方便門で、落付く先きは、つまり淺草の實相門である、人を使ふにも、理屈の實相ばかりではいかぬ、矢張り、讚めたり、叱つたり、其人の機能に應じて、方便が必要である、普恵心僧都が、庭先きに來た鹿をたゞいて追ひやつた、さうすると僧侶達が惠心僧都に向ひ、あなたは、折角鹿が慣れ／＼しく庭先きに來たのを、たゞいて追ひ拂はれたが、之は平常の教にも似ず、無慈悲の振舞ではありませぬか、と云つた、さうすると惠心僧都は、わしがたゞいたのは、即ち其慈悲心からたゞいたのだ、それは、鹿が餘り慣れ／＼しく人里に出て來ると、終には人に捕はれてむごい目に逢ふかも知れぬ、そこで、鹿を助けんが爲にたゞいたのだ、と云はれたと云ふ

話がある、此助けんが爲めたゞく、之が方便の働きで、つまり助ける心が實相だ、たゞくのは臨機の方便と見てよからう、又或山家の百姓家の處を、鐵砲を擔いだ人が通つて、今こゝの處を二匹の兎が通つた筈だが、と尋ねた處が、百姓は通らぬと云ふた、此のう、そは慈悲の上のう、そで、之は何れも方便即實相の譬である、世の中の事は、權實並行で、權から出た實實から出た權でなくてはならぬ、一著を放過して、第二義門を建立し、此一著を放過すとは、假りに一步を讓つてと云ふ意で、それは向上法門の上から見て、一步を讓ると云ふこと、即ち向上法門では、最早説くべきことではない、説けば直に第二義門になつてしまふ、而し今茲では假りに、向上法門の一著を放下して、第二義門を説くが、それは即ち理事不二、權實並行が實際に應用さるゝ譯である、其必要も亦、こゝにあるのである、向上の法門は、前に度々云ふた通り、佛でも説かれぬ、釋尊の四十九年の説法も、皆其實は第二義門の説法である、さればとて直下に葛藤を截斷するも、後學、初機は、湊泊をなしがたし、こゝでは、直下とは向上の上から見て云ふたので、葛藤とは、つたかづら、藤かづらなどが、手足にからまるやうなもので、その葛藤にも色々ある、例へば文字葛藤の如き、本來向上法門の事は、繪にも、文にも、



詩にも、歌にも書けぬ、書けば理屈に渉る、その理屈に渉る文字葛藤の如きものを、一刀兩斷にきりすて、さて愈第一義門の向上法門になると、後學初機は湊泊しがたし、初心の者には、一向わからぬ、湊泊なしがたし、で港に船が集つて、ふなどまりをするやうに、寄りつくことは出来ぬ、そこで今は止を得ず、第二義の法門に下つて、昨日も恁麼事やむことを得ず、今日も又恁麼罪過彌天で、昨日も斯の如き事を、止を得ず説く、今日も亦同じやうな事を説く、之は後學初機の爲に、照用同時、卷舒齊唱の作用で、止を得ぬ事とは云ひ乍ら、罪過彌天で、彌天とは、空を蓋ふて一杯になることで、世間に顔出しも出来ぬ程の大罪を犯すことになる、之は丁度、兒を憐んで、醜きを忘る」と云ふことがある、お婆あさんが孫の愛におぼれ、自分の口でかんで、口うつしにものをたへさせるやうに、茲にも本來は説くべきでない、説けば第二義門に落る罪を犯すと云ふことは、篤と合點し乍ら、色々説くは兒を憐んで醜を忘れたのである、眞實に佛法を合點した人が、茲に居つたら、舌を出して、笑ふかも知れぬ、丁寧は君徳を損する」といふことがある、富士山に登らぬ人が登つたやうな話をするのは、登つた人が聞いたら、おかしくてたまらぬ、茲でも、向上法門の富士山に登つた眼から見

たらば、昨日も恁麼、今日も又恁麼で、實に叮嚀は君徳を損するので、罪過輕からざる次第である、若し是れ明眼の漢ならば、一點も他を護することを得ずで、これが明眼の學人、若くは師家であるならば、いさゝかも他を護りて、邪道に導くやうなことはない、何となれば、所謂照用同時、卷舒齊唱の殺活自在の作用があつて、自分が皆佛法になつて居るから、人を護するやうなことはない、からだそのまゝが皆說法になつて居る、一點も佛法に外れて居らぬからだ、然し其れ或は未だ然らずんば、虎口裏に身を横えて、喪身失命を免れず、一寸茲で前に返つて、第二義門を建立す迄が第二段、直下に葛藤を截斷すればから、こゝ迄が三段、これから四段になる、さて、若しそれはさういふ明眼の漢でなければ、虎の口元に身を横へたやうで、實に危険千萬だ、いづれ命を亡くするか解らぬ、さてあぶないこと、試に擧す看よ、夫れに就いて雪峯の本則があるから篤と參究せよと云ふ意であるが、此場合師家は、恰も虎の様なもの、師家の言葉や文字につくものは、虎口裡に身を横へたやうなもの、師家の言葉や文字につきまごつては、自由の働は出来ぬと云ふことを、深く戒めて居る。

【本則】擧。雪峯示衆云、盡大地撮來、如粟米粒大、拋向面前、漆



桶不會、打鼓普請看。

【讀方】擧す。雪峯衆に示して云く、盡大地撮し來るに、粟米粒の大きいさの如し。面前に拋向す、漆桶不會、鼓を打つて普請して看よ。

雪峯は義存禪師である。唐の懿宗皇帝から眞覺大師を賜つた位の人物で實に英靈底の漢である。前則に在つた徳山の法嗣であつて、機鋒もなか／＼鋭い、さうしてその修行事には大變苦勞をした人だ。禪の話聞いた人は、知て居るだらうが、三たび投子に登り、九たび洞山に至る、といはれて居る。西有禪師は、東海道の三島から箱根を越えて、小田原の海藏寺の月潭和尚の處に、毎日通はれたとある、これも容易なことでない。衲が天徳寺に住職をして居つた時分に、傳心寺に西有禪師の正法眼藏の提唱があつたのを、衲の寺は二里ばかり傳心寺から離れて居る、眼藏の提唱は朝は八時から始まる、午後は二時からだが、衲は二十人も居る雲水と共に朝は二時に起きて、坐禪やら、飯臺をすまして朝の八時に間に合ふやうに毎日通つて、眼藏中往來したことである、やつと、時間に間に合ふ時であつた、すると東京から客が來て、今

日は休講だなぞと云ふことが度々あつた、隨分骨も折れたが、其場合にはいつも、此雪峯禪師の「三たび投子に登り、九たび洞山に至る」ことを思ふて、勵みとしたことがある。雪峯は斯く苦心をした人である、或時龍山顛に在つて、雪に隔だてられて、毎日坐禪をして居ると、巖頭と云ふ人が、そばで寢てばかり居るから、起してやると巖頭は、撞眠し去れ」と答へた、そこで雪峯は、胸中未隱在と云つて胸を撫でた、つまり雪峯は、胸中未だ穩かでなかつた、そこで巖頭、雪峯に向つて云く、一體お前は、どういふ經歷を経て來たのか、一つ話せと云はれた、雪峯は、徳山の處に始めに行つてた、かれた、其時に桶の底が抜けたやうなよい氣持がしたと云ふた、其他經歷談を話すと巖頭は、門より入るものは家珍にあらすと云はれた、門と云ふは、六根門の事で、何でも外から這入つたものは家の寶ではない、自己の胸襟より流出して、蓋天蓋地せよと云はれた、雪峯がその言下に忽然として悟つた、其時連聲に叫で曰く、師兄今日龍山成道、師兄今日龍山成道と、此の雪峯は實に修行には辛苦したのである。今は其雪峯の垂示を持つて來て本則としたのだ。言葉は短いが、この本則には大變深い意味がある。盡大地、撮し來るに、粟米粒の大きいさの如し、實にえらい事を云ふたものだ、英靈漢



の雪峯でなくては云へない語だ、撮し來るとは、三本の指で、つまんで來ることだ、つまんで見ると粟米粒の大きさのやうだと、之は何を云ふのか、即ち大小のない事を云はれたのだ、大小の無いものは何物か、即ち法性である、盡大地も、粟米粒も、其他天地世界も皆悉く法性の顯はれで無いものはない、法性から見れば、皆大小を離れたものである、此コップ一杯の水は、小さいか、小さいとも云へまい、集まれば四大海の水ともなる、利根川の水も元は岩間の雫の集まりだ、何れを大とも何れを小とも云はれぬ、一握みの土も、積れば富士の山ともなる、一塵を小とするか、富士山を大とするか、富士山も一塵であるではないか、其間に大小の論を云ふ餘地はない、全體法は大小を離れたものである、其の他青黄赤白輕重長短方圓遠近等全く法の上には大小區別を離れて居る、一切の形相を離れたゆゑ、一切の形相と顯れるのである、此の法性を能く合點すれば安心決定は必ず出來る、雪峯は、その處を合點させたいばかりに斯く云はれたのである、面前に抛向するも、漆桶不會鼓を打つて、普請して看よ、抛向と云ふは、なげ出すこと、漆桶とは、真黒い漆桶のこと、わからぬことを云ふたのだ、日月は照すも盲者には分らぬ、日月のどが、ではない、面前につき出して見せても

解らぬならば普請して看よといふた、普請といふは、今日では大工を集めて工事もする、このやうになつて居るが、禪宗では、朝飯が濟むと、請鼓と云ふて太鼓が鳴る、さうすると、上は和尚から下は小僧まで、皆出て大勢で掃除するのを普請と云ふ、又禪宗では、動靜大衆に一如するとも云ふ、此の普請は禪宗の宗風である、そこで、今普請して大衆をあつめて、よく探して看よといふのだ、法性はどこにあるか、探して見たら案外遠方でもあるまい。

〔頌〕頌云。牛頭沒、馬頭回。曹溪鏡裏絕塵埃。打鼓看來君不見。百花春到爲誰開。

〔續方〕頌に云く、牛頭沒し、馬頭回る。曹溪鏡裏塵埃を絶す。鼓を打つて看來るに君見ずんば、百花春到つて誰が爲めに開く。

牛頭沒し、馬頭回る。牛の頭が沒したかと思つたら馬の頭が出た。これは隙間のないことを云ふたので、或は之を男浪女浪と云ふ人もある、なるほど男浪女浪はたへまなく寄せて來る、春夏秋冬にも隙間はない、法と云ふものは妙なもので、滅沒回復



の間に切れ目がない、朝が滅すると晝が来る、晝が過ぎると夕刻になる。吐く息、吸ふ息、時々刻々隙間がない、それを牛頭没し馬頭回ると云ふたのである、法性にはかく隙間がない、古人の語に、當處に出生し、隨處に滅盡すと云ふがある、これも矢張り法性に隙間のないことを云ふたのである。曹溪鏡裏塵埃を絶す、曹溪の鏡裏とは、彼の六祖慧能大師が、五祖會下に在つた時、神秀の身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、莫使惹塵埃、と云つた偈に對して、菩提本無樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃、と云つた、其鏡から來たので、曹溪の鏡裏には、塵一本もない、法性の鏡には本來塵一つもないと云ふ意である。鼓を打つて看來るも、君見すんば、太鼓を打つて大勢で探しても、君見すんば此君は廣く天下の人を指して云ふ、いくら探しても解からんか、法性は何の處にあるか、分からんか、脚下を照顧して見よ、百花春至つて、誰が爲に開く、春が來ると、あちらこちらに花が咲く、あれは誰が爲に開くのか、之は目ある人はよく見て取るがい、耳ある人はよく聞き取るがい、何も大臣の爲に開くでもなく、平民の爲に開くのもあるまい。又これは、大か、小か、皆これ大小貴賤等の相對を超越した法性の顯現である。

第六則 雲門十五日

〔本則〕舉。雲門垂語云、十五日已前不問汝。十五日已後、道將一句來。自代云、日日是好日。

〔讀方〕舉す。雲門垂語して云く、十五日已前は汝に問はず。十五日已後、一句を道ひ將ち來れ。自ら代つて云く、日日是好日。

茲には圓悟の垂示が無い、初めから無いのか、あつたのが落ちたのか、これには色色説があるが、衲は初めから無かつたのだらうと思ふ、それは茲に垂語とあるは、つまり垂語も垂示も同じことだからだ。大慧錄には、垂語、代語、別語と云ふやうな區別は、皆この雲門から始まつたと云ふてある。

雲門は前則の雪峯の法嗣である。師匠にも劣らぬ人物である。傳に依ると諱は文偃、姑蘇嘉興の人で、始め志澄律師に就いて律部を修め、後禪に入り、睦州の陳尊宿の所で修行の爲に脚を折られて大事を了得し、更に雪峯に參じて印可を受けられた、



禪機が辛辣で、人を接すること三十年、會下に八十餘員の善知識を出したとある。後漢の隱帝の乾祐二年四月十日に示寂された、その宗風が段々盛んになつて、遂に雲門宗と稱されたのである。前申した通り雪竇禪師も雲門の曾孫に當る人だ、今はその雲門の垂語を本則にしたのだ。十五日以前は、汝に問はず、十五日已後一句を道ひ將ち來れ。十五日以前は、既に過ぎ去つたことで、之には問答が無い、十五日以後は、之から物があらはれて來るから、問答も商量も入用だ、禪家に、蓮華水を出でざる時如何、何、曰く、蓮華、水を出でて後如何、荷葉、と云ふ問答がある、又、佛未だ出世せざる時如何、出生して後如何と云ふやうな問答もあるが、茲に十五日以前と云ひ、又以後と云ふも、丁度同じだ、一句を道ひ將ち來れが面白い、此一句さへ道ひ將ち來れば本分の人だ、この一句は、前後截斷の一句で、前でもなく、後でもない、之さへ云へたら雲門の知音である。或は能所超絶の一句とも云ふべき處の活句である、活きた佛法である、然し今はこれに對して誰も何とも答へる者が無いから、雲門自ら代つて云く、日々是好日、と此自ら代つてが即ち代語である、日日是好日、之は一句を道ひ將ち來つた、今日我々が、其日々に其の職業をくらすまらずに働いていつたら、日々是好日

だ、夜々是好夜時々是好時だ、今一つ云へば、何も十五日に限つた事ではない、之は四月八日の釋迦の誕生日だとか、十五日の上堂式の日だとか、色々云ふ人があるが、どうしてもよい、要するに十五日以前でも、十五日以後でも、毎日天地に慚ぢざる人ならば、日々是好日にして、一生好日だ、之は悪い事をした人では出來ぬ、三業清淨の人なら、日々是好日どころではない、夜々是好夜どころではない、言々是好言だ、それがうつつかりすると、言々は是れ悪言、語々は是れ悪語となり、日日是好日となりはせぬか、光陰虚く度らざる人ならば、日日是好日の行履に住することが出来る。

〔頌〕頌云。去却一拈得七。上下四維無等匹。徐行踏斷流水聲。縱觀寫出飛禽跡。草茸々煙幕々。空生巖畔花狼藉。彈指堪悲舜若多。莫動著。動著三十棒。

【讀方】頌に云く。一を去却し、七を拈得す。上下四維等匹無し。徐に行いて踏斷す。流水の聲、縱に觀て寫し出す飛禽の跡。草茸々煙幕々。空生巖畔花狼藉。彈指して悲むに堪えたり。舜若多。動著すること莫れ。動著せば三十棒。



一。を去却し、七。を拈得す。玆の處では、一とか、七とかに引かゝらぬがよい、去却とは十五日以前の事を云ひ、拈得とは十五日以後の事を云ふたのだ。上下四維等匹なしと同じ心だ、日々是れ好日の人なら、天上天下唯我獨尊だ、即ち我々でも、羞づかしい事さへなくば、釋尊と同じく唯我獨尊だ、等匹なしとは、例へば此のお盆は物を載せる役にして、筆は字を書く役目である、針は物を縫ふ役にして物を縫ふには針にこえるものはない、字を書くには筆に越える物はない、物を載せるには盆に過ぐる物はない、その役目相應につとめて行く上には、其物其物皆是れ、天上天下の他の力を借らず、他に匹敵する者はない、即ち是れ天上天下唯我獨尊ではあるまいか、玆に「上下四維など」とあるから、之は釋尊誕生日の四月八日のことだと云ふ説がある。次の句が一寸むづかしい、徐ろに行いて、踏斷す流水聲、大變に奇麗な句だから、どう講じてよいか分らぬ、流水の聲が、踏斷と、ふみきることが出来やうか、これは、有より無をあらはす事を云ふのだ、流水の聲は有るもの、それを踏斷するは、有を無にすることだ、人が有を無にすることが出来たらば、六根六塵に迷はぬ人となり得る譯だ、それ

から縦まに寫し出す飛禽の跡、之は前の反對で、無を有とする方で、いくら上手な繪書きでも、飛ぶ鳥の跡を書く事は出来まい、今はそれを縦横に寫し出すと云ふは、無から有を出すことを云ふのだ、目に色を見て其色にしばらくはられず、耳に聲を聞いて、其聲に縛られぬ處に妙味がある、水鳥の行くも歸るも跡たえてされども、道は忘れざりけり、だ、耳に聲、目に色、それに縛られてはいかぬ、しかしそれでも、見ない譯にはいかぬ、聞かない譯にもいかぬ、但し見ることは見る、聞くことは聞く、が跡が絶えて居る、そこが面白い。

草茸々、烟霧々、草は有の方、これから田舎道を行くと、草が青々と生えて居る、烟は無の方、遠山の松に烟がかゝつて居る、何れも有無に片落ちした形容である。空生巖畔、花狼藉、之は般若波羅蜜のことで、須菩と云ふ佛弟子がある、真空の理を悟つた、其須菩提を譯すると空生と云ふ、その人が、巖のほとり、般若の説法をした、即ち真空の理にして、有にも無にも落ちぬ、説法をした、それゆゑに帝釋天が華をふらしてほめたことがある、そこで須菩提が、誰が花をふらすことがめた、其の時帝釋である、と答へた、そのことを今此で云ふたのである、彈指して悲しむに堪えたり、舜若多、彈



指とは指ではちくこと、舜若多とは、之も印度の虚空神のことである、其の虚空神を指で弾いて、そばに置かず追ひ拂ふと云ふ意味だ、そんな空についてはいかぬと云ふことである、動著することなかれ、何でも凡夫は見たものに動著し、聞いたものに動著する、今は見聞覺知の上に就いて心を動かすなど云ふ意である、動著すれば三十棒、有無色空其儘實相なることを知らず、十五日以前の正位に動著したり、十五日以後の偏位に動著したり、有に偏したり、無に偏したりするのは、皆是れ動著である、動著すれば三十棒の分あり、有無色空等の範圍を超脱したる、日々是れ好日の行履こそ真箇納僧の活三昧である。

第七則 法眼答慧超

(大正八年四月十五日 於三榮本社第二會議室)

〔垂示〕垂示云。聲前一句、千聖不傳。未曾親覲如隔大千。設使向聲前辨得、截斷天下人舌頭、亦未是性燥漢。所以道、天不能蓋、地不能載、虛空不能容、日月不能照。無佛處獨稱尊、始

較些子。其或未然、於一毫頭上透得、放大光明、七縱八橫、於法自在自由、信手拈來、無有不是。且道、得箇什麼、如此奇特。復云、大衆會麼。從前汗馬無人識、只要重論蓋代功。卽今事且致、雪竇公案、又作麼生。看取下文。

〔續方〕垂示に云く、聲前の一句、千聖不傳。未だ曾て親覲せざれば、大千を隔つるが如し。設使聲前に向つて辨得して、天下人の舌頭を截斷するも、亦未だ是れ性燥の漢にあらず。所以に道ふ、天も蓋ふこと能はず、地も載すること能はず。虚空も容ること能はず、日月も照すこと能はず。無佛の處、獨り尊と稱して、始めて些子に較れり。其れ或は未だ然らずんば、一毫頭上に於て透得して、大光明を放つて七縱八横の法に於て自在自由ならば、手に信せて拈じ來つて、不是あること無し。且く道へ、箇の什麼を得てか、此の如く奇特なる。復云く、大衆會すや。從前の汗馬人の識る無し。只重ねて蓋代の功を論せんことを要す。卽今の事は、且く致く、雪竇の公案、又作麼生。下文を看取せよ。



始めて禪學を聞かると人は、同じ事を何遍も何遍もくり返すやうに思はるかも知れぬ、どの則も同じ様に思ふてつまらぬと云ふ人もあるかも知れぬ。全體、禪學は學問とは違ふので實行と修養が大切である、成程どの則も同じ事のやうに見ゆるが同じではない、よし同じ事でもよい、同じ事を幾度も聞き、而して修行する中に心に徹底するのである、それは禪は向上の法門を極々卑近な處に示すのである、向上の法門は人々の脚跟下にあるから、脚下かたもとを氣を付けねばならぬ、古徳も、佛道は人々の脚跟下かたもとにありと云はれた、微妙の眞理は卑近の處にある、こゝでもさうだ、聲前の一句、千聖不傳、聲前の一句とは何んであるか、釋尊の説法は四辯八音を具へて居るが其の音聲の前の一句を今こゝで聲前の一句と云ふたのである、生れない前の一句それが生前の一句である、生れたら相對となる、暑いとか、寒いとか、憎いとか、可愛いとかと云ふやうに皆相對となるのである、ところが、生れない以前ならば是非もなければ善惡もない、天地未開以前の事を生前の一句と云ふたのだ。天地が開けたならば是非善惡を始めとして長短方圓、遠近高低など種々雑多の相對のものが現はれて来る。それだから今茲に、聲前の一句と云ふは、天地未開以前の消息にして、總

て、長短だの、方圓だの、青黄だの、黑白だの、是非だの、善惡だのと相對を離れた一句の事である。此の生前の句が分れば、安心決定である。ところが、此一句はなか／＼教ゆる譯には行かぬ、そこで千聖不傳と云ふたのである、どんな聖人賢人でも、此一句だけは傳へる事は出来ぬ。つまりこれは、自知自得の外はないのである、水を飲んで冷暖自知と云ふことがある、酔ひざめの水の味はその水を飲む人でなくては分らぬ、水の味でさへさうである、況んや聲前の一句をやである、彼の千經萬論に達し一を聞いて十を知ると云はれた香巖和尚も、瀧山の處に行つて、父母未生以前に向つて一句を道へと問はれた時は、流石の香巖も、一句も言へなかつたのである、香巖はそれから學問では駄目だと氣が付き、晝餅飢に充たすと云つて、遂に經文を火中に投じたと云ふことである、それから坐禪を専らにして、或時石が竹に當つて、カチンと云ふ其の聲を聞いて忽然と悟つたと云ふ話がある、聲前の一句は千聖不傳で、なか／＼文字や言語の上で、傳へやうとしても出来ぬ、何でも自分で修養を積まなくては解らぬ、その修養は、宗門では坐禪のことである、一般では信心のことだ、佛教では、いくら話を聴いても書物を読んでも、肝心の信仰心がなくては本當に解るもの



ではない、其信仰とは、各自のいゝの心を信すること、其心と云ふは、長短方圓、青黄黑白を離れた、清淨無垢の一心である、其の心が即ち信である、疑のある心ではないかぬ、疑のない心が即ち信である、三祖様は「信心不二、不二信心」と云はれた、心を信する信と、信じらるゝ心とが二つないそれを又引くり返して不二信心と云はれた。伊勢町に居る某氏から、納に商法の秘訣を書いてくれと頼まれたから納は、商法の秘訣は只是信心と書いてやつた、信心がなければ、何事も虚事となつてしまふ、信心は神佛に掌を合はせる事ばかりではない。全體、この心は宇宙一杯になつて居る、心は清淨無垢である、疑のない清淨潔白なものだ、それを各自のいゝが持つて居る、其心を信せぬ者が、如何に神佛を念するも功德のある筈はない、又自分の心を自分で信じない人が、どうして親を信じ、主人を信することが出来やう、随つて忠となることも孝となることも出来ぬ。佐藤繼信と云ふ人は、主人義經の前に楯になつて、矢を受けて戦死した、それは主人を信じたからだ。信の一字で、よくふだんから腹がすわつて居るからだ、つまり聲前の一句は、御互の目の前にある、それは自分の修養の力で、自然と自得すべきもので、所謂千聖不傳である。未だ曾て親覲せざればといふは

生前の一句を親しく我物にするでなくてはならぬ、朝起て顔を洗ひ、神佛に禮拜をし、飯を喫べて、それから仕事にかゝる、此日常の運作のところに聲前の一句はある、それを親しく見届けないで唯うかうかしてその日を送つてしまふ。それがこゝに云ふ、未だ曾て親覲せずと云ふのである、つまり聲前の一句を我が物にしなくては、大千を隔つるが如しである。聲前の一句は、御互に生れぬ前に持つて居る、持つて居りながら、千里萬里の隔りをなして居るのだ。設使聲前に向つて辨得して、天下人の舌頭を截断するも、亦未だ是れ性燥の漢にあらす、辨得すれば、よささうなものだけれども、本分の上から云ふとそれも實は遅い話だ。なせなれば、皆生れ乍らに持つて居る、それを唯向ふにのみ求めて辨得したの辨得しないのといふが早や二見對待の話さ。天下人の舌頭を截断する、それはえらいことだ、説かんとしても、説かせず、いやべらんとしてもしやべらせぬ、そんなえらい人でも、未だ是れ性燥の漢にあらす、性燥の漢とは、すばやい人のことだ、つまり、そんなえらい人でも、まだすばやい伶俐の漢とは云へぬ、こゝ迄が一段、この垂示は全體が五段になつて居る。所以に道ふ、天も蓋ふこと能はず、地も載すること能はず、全體、天は能く一切の者を蓋ひ、地は萬物



を載せて餘すところがない、然るにこの聲前の一句は、天も蓋ひつくさず、地も載せつくさずだ、つまり、聲前の一句は天地の中にあるのではない、天地が聲前の一句の中にあるのだ。全體この廣大無邊のものは何物か、それは心を云ふたのだ、活きた佛法をいふ、これさへ解かれれば佛法も解る、それは信念の力でなくては解らぬ。信念のない人は、落付きがないから解らぬ。虚空も容るゝこと能はず、虚空は廣大なれども、聲前の一句は容るゝことは出来ぬ、虚空よりも大である、空は形の無いもので、形の有るものと相對だ。聲前の一句は有無色空の二つを離れて居る、だから虚空も容るゝことが出来ぬ、又日月も照すこと能はず、太陽は晝を照して夜を照さぬ、月は夜を照して晝を照すこと能はず、然るに聲前の一句は、從晝至夜光明赫々である、世界中この光明の照さぬところはない、この光明の照さぬ時もない、故に此一句さへ解れば確かに、佛法の解つた人と云ふてよい。無佛の處、獨り尊と稱して、始めて些子に較る。無佛と云ふは、佛の無いと云ふこと、悟つた佛がなければ、迷つた衆生もない、生佛迷悟などと云ふ相對的のものを離れてくらべものがない、實に是れ獨尊と云ふ、聲前の一句は即ちそれである、絶待の獨尊と云ふは、このことである、けれども、普通の

獨尊の上から云ふと、例へば、水を飲むにはコップが獨尊である、物を載せるには盆が獨尊である、物を縫ふには針が獨尊である、他の力を借らないのが獨尊である、この獨尊は相對の上から云ふ獨尊である、茲の聲前の一句は比べものにする對照がない、即ち心の事だ、山も海も木も石も皆心の縁起である、三界唯一心とは此事だ、小さいとか、大きいとか、暑いとか、寒いとか、憎いとか、可愛いとか云ふのは、本當の心ではない、それは皆妄想心だ、本當の心はそんなものではない。宇宙に充滿して居つて、それが因縁によつて、山ともなれば海ともなり、木ともなれば牆壁ともなつて居るのである、始めて些子に較れり、その時始めて少々ばかり佛法に當つて居ると云ふことで、少々ばかりと云ふことを、禪では些子と云ふのだけ、けれども、今少々といふたとして必ずしも、少いことではない、よ、そに物を持つて行つても、自分の心では充分奮發した積りでも、之は、輕少の物ですが、なといふて差出す、こゝでも少々ばかりと云ふてはあるが、前の聲前の一句の事がすつかり、合點が行つたならば、それこそすべての上が佛法に契當するのである、こゝ迄が二段、それから其れ或は未だ然らずんば、一毫頭上に於て透得して、聲前一句といへば唯廣大無邊の大きいこと



と計り思はぬがいゝ、鶴の毛一本ほどの上にも、透得して居ると云ふ事で。早い話が大梅と云ふ人が馬祖に、「如何なるか是れ佛」と問ふた。馬祖は「即心即佛」と云つた。この一句で大梅が悟つて、大梅山に登つて、坐禪をして居つた。すると或日、馬祖は、僧を試験にやり、「お前は何で悟つた」と問はせると、大梅は「即心即佛の一句で悟つた」と答へた。そこで試験に行つた僧は、「お前が悟つた時は、さう云ふたか知らんが、此頃の馬祖の佛法は非心非佛だ」と云つた。ところが大梅は頑として、「他はさもあらばあれ、我は只管に即心即佛だ」と云つた。それを歸つて来て馬祖に話すと、馬祖は「梅子熟せり」と證明したといふ話がある。一毫頭上とはそこである。一句の處で大梅は悟つた。サア、透得してみると、大光明を放つて、大光明とは、自分の智慧光明だ、煩惱妄想の雲が懸つて居ては、光明は放たれぬ、雲が晴れると大光明を放つことができる。大梅は、釋迦が來ても、達磨が來ても動かぬ、他の人なら、言葉についてしまふが、大梅はさうでない、大梅は大光明を放つて居る、大光明と云ふても外ではない、此コツブはコツブ、水さしは水さし、皆夫々大光明を放つて居る。今日の人でも、平常を昧まさずに爲すべき事を、きちんとして居つたら、皆大光明を放つて居るのだ、それを昧すから明い生涯

を暗黒にして丁ふのだ、太閤は太閤、家康は家康で、光明を放つておる、又主人は主人、皆それゝ人の手本となる行をして居つたら、皆是れ大光明を放つて居るのだ、斯くの如く光明を放つて居れば、七縦八横法に於いて自在自由だ、さうでなければ、獄につながれたり、恥をかいたりする、正義人道をはづれて、自繩自縛の苦みに落ちることになる。手に信せて拈じ來つて、不是あることなし、こゝが面白い、こゝまで修行が積めば、何を持って來ても皆佛法と現はれて、一つも不是と捨てるものはない。此コツブでも、お盆でも、草花でも、手にまかせて何を拈じ來つても、皆聲前の一句にして佛法ならざるものはない。こゝを佛法では「左右源に逢ふ」ともいふのだ。全體、世の中の物、一つとして廢てる物はない。こゝを佛事門中不捨一法とも云ふ、此間聞いたが、安い手拭は、皆ゆもじの染め直したと云ふ。能くかたをつけて又ふきんにもするさうだ、それは廢物利用で大變よい事だと思ふ、安いハンカチは皆病院で使つた古たさうだ、して見ると、世間に一つも廢るものはない、手にまかせて拈じ來つて、不是あることなし、佛法の本心を合點して見れば、拈じ來るものは皆心である、不是のものはない、こゝ迄が三段、且く道へ、箇の什麼を得てか、此の如く奇特なる、此の如く奇特



なるとは、七縦八横法に於て自在自由、手に信せて、拈じ來る云々、迄の事を奇特と云ふたのだ。奇特とは奇妙特別といふことだ、よくあの人は奇特だなどと云ふ、之は今日の仕事の上を昧さずに行くのが一番奇特だ、奇特とて、何も珍しい變つたことではない、今日のことをちやんと昧さずに行くのが奇特である。復た云く、大衆會すやこゝで圓悟が、どうだ一同合點がいつたかと撻着して置いて、更に語をあらためて從前の汗馬、人の識る無し、只重ねて蓋代の功を論せんことを要す。これは實によい言葉だ。昔の汗馬の勞がなければ、今日の泰平は得られない。雪竇が二十年来曾て苦辛す、君が爲に幾たびか蒼龍窟に下ると云つたのもこれだ、誰でも一度汗馬の勞をせねばならぬ、一度死生の間に立つほどの苦勞をしたでない、と本當の價値が現れぬ。天下泰平は皆汗馬の功だ。今の日本も、維新以後、上天皇陛下を始めとして、多くの憂國の志士達が、生命を抛つて改新を計られた賜だ。更に日清、日露、日獨の各戦役で汗馬の勞を盡したからだ、手を袖にして居ては却々今日のやうな、立派な日本となる譯のものではない。蓋代の功を奏するには、皆骨を折らねばいかぬ。骨を折らずに世を蓋ふやうな大功を得やうとしても、それはできぬ。之は次の本則に入用だ。即今

の事。は。且。く。致。く。雪。竇。の。公。案。又。作。歷。生。下。文。を。看。取。せ。よ。今。の。事。は。し。ば。ら。く。ま。づ。それとして、次の本則を篤と看るがい。

【本則】舉。僧。問。法。眼。慧。超。咨。和。尙。如。何。是。佛。法。眼。云。汝。是。慧。超。

【讀方】舉。す。僧。法。眼。に。問。ふ。慧。超。和。尙。に。咨。す。如。何。なるか。是。れ。佛。法。眼。云。く。汝。は。是。れ。慧。超。

法眼と云ふ人は、前の雲門と共に當時の禪僧中の錚々たる人物で、禪門五家の一なる法眼宗の祖師である。其學人の接化振りを「法眼默契」と稱せらるゝ、誠に腕前の優れた知識だ。所謂啐啄同時で、鶏が卵から出る時、親どりが外からつゝ、子鳥は内からつゝ、それが同時に具合よく卵から雛鳥が出るやうな風に師家も、相手になる人の機を見て、之に應じて接得する。法眼と云ふ名前の字から見ても、能く對機の様子を看分けて、法を説いた人に相違ない。玄則と云ふ和尚が法眼の處に三年も監寺といふて代理役を勤めて居つた。或る日法眼がこの玄則に「お前は私の處にはや何年居るか」と問ふた。玄則は「三年居る」と答へた。三年も居れば何か問ひさうなもの



だが、何も問はぬはどういふ譯だ」と云つたら、私は嘗て青峯志圓和尚の處で悟つて來たからそれで問はぬ」と答へた。そこで法眼は、お前は「青峯の處で悟つた」と云ふがどうして悟つた」と問ふと、私は「青峯に如何なるか是れ學人の自己」と問ふた、これは善い問ひだと思ふ、西洋の哲學者も、汝自身を知れ」と云ふて居る。すると青峯が「丙丁童子來求火」と答へた、その時に悟りました。法眼は「成程丙丁童子來求火、大變よい、しかし貴様はまだ悟つては居らぬ」と叱りつけた、それから丙丁童子來求火の講譯を始めた、ところが法眼は「そんな事が佛法なら、今日まで佛法は相續して居らぬぞ」と再び叱りつけた、説明してもわからぬかと、玄則一度はむつとして起ち去つたが、いや法眼と云ふ人は、一千五百人の善知識と云はれる人だ、これには何か仔細があるに相違ない」と、我慢の角を折つて又歸つて來て、今一つ問ふて見よと法眼が云ふたから、如何なるか是れ學人の自己」と前と同じ事を問ふた。此時玄則は我慢の角がすつかり折れて了つて居る。法眼云く「丙丁童子來求火」と前の青峯の答と同じ答へた。其の言下に玄則は忽然として悟つた。今度は本當に悟つた。是等は同じ言葉であるが、而し能く機を見て悟らせた處が法眼の法眼たる所だ。所謂「啐啄同時」の活作略が

ある。この本則でもその通り法眼が慧超の機が熟して居ることを見てとつた。僧と云ふは慧超のこと、咨すとは、下から上に問ふことだ。如何なるか是れ佛と法眼に問ふたら、汝は是れ慧超と云ふた。慧超は忽然として悟つた。慧超と云ふ時は、佛は慧超に藏れ。佛と云ふときは慧超は佛に藏れる道理がある。慧超和尚は大變修行に骨を折つて來た揚句の事であるから直に悟つたのだ。そこが前に云ふた「從前汗馬」の處だ。如何なるかこれ佛と云ふ問には、古來色々の答がある、此垂示を書かれた圓悟の答が面白い、或僧が圓悟に「如何なるか是れ佛」と問ふた處が、口は是れ禍の門と答へた。口を慎むが善いぞ」と云つた。成程佛と口へ出しただけ早やすでに佛に遠かつて居る。又或僧が「如何なるか是れ佛」と問ふたら、髮長うして僧貌醜し」と答へた。僧侶は餘り髮など長くして居つてはいかぬ、僧侶は僧侶らしく、頭を丸く剃つて、袈裟衣を着けておれと云ふのだ。こゝもさうだ、汝は是れ慧超、全體慧超は、迷つたものは衆生、悟つたものは佛と云ふ積りで問ふて來た。それを見抜いた法眼は「生佛不二」の上からびしいやつと答へられた。慧超と佛と二人はない。だから慧超は一言の下に徹底することが出來たのだ。



〔頌〕頌云。江國春風吹不起。鷓鴣啼在深花裡。三級浪高魚化龍。癡人猶辱夜塘水。

【讀方】頌に云く。江國の春風吹き起たず。鷓鴣啼いて深花裏に在り。三級浪高うして魚龍と化す。癡人猶辱む夜塘の水。

法眼の居つた處は、揚子江のそばの清涼院だ。それだから、江國の春風といふた。江國の春風吹不起と云ふ、本統は吹不起と讀み下した方がよい、春の真中の事を云ふたのだ。春と云ふから鷓鴣啼いて深花裡に在り、鷓鴣は百花爛漫の中に啼いて居る。姿は見えぬが聲が聞えて居る。汝は是れ慧超と云ふた其言葉に當る、其時慧超が悟つた。三級浪高うして魚龍と化す。之は禹王の築いた龍門の故事で、鯉が三月の節句に三級の波を越えて、龍と化して昇天するやうに慧超が忽然として悟つて佛となつた、然るに馬鹿な奴が、まだそこに魚でも居ると思つて、暗夜に物を探すやうに、こかしこと探して居ると云ふが癡人猶辱む夜塘の水だ。つまり後世言語文字に拘泥して、慧超が悟つたの悟らぬのと詮鑿して居る様子を貶したのだ。

第八則 翠巖夏末示徒

【垂示】垂示云。會則途中受用、如龍得水、如虎靠山、不會則世諦流布、羝羊觸藩、守株待兔。有時一句坐斷天下人舌頭。有時一句隨波逐浪。若也途中受用、遇知音別機宜、識休咎、相共證明。若也世諦流布、具一隻眼、可以坐斷十方壁立千仞。所以道大用現前、不存軌則。有時將一莖草作丈六金身用。有時將丈六金身作一莖草用。且道憑箇什麼道理。還委悉麼。試舉看。

【讀方】垂示に云く。會するときは途中受用、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。會せざるときは世諦流布、羝羊藩に觸れ、株を守つて兔を待つ。有時の一句は踞地獅子の如く、有時の一句は金剛王の寶劍の如く、有時の一句は天下人は踞地獅子の如く、有時の一句は金剛王の寶劍の如く、有時の一句は天下人



の舌頭を坐斷し。有る時の一句は、隨波逐浪若し也。た途中受用ならば、知音に遇うて機宜を分ち、休咎を識り、相共に證明せん。若し也。た世諦流布ならば、一隻眼を具し、以つて十方を坐斷して、壁立千仞なるべし。所以に道ふ、大用現前、軌則を存せず。有る時は、一莖草を將て、丈六の金身と作して用ひ。有る時は、丈六の金身を將て、一莖草と作して用ふ。且く道へ、什麼の道理にか憑る。還て委悉すや、試に擧す看よ。

此垂示は、矢張り五段に分れて居る。會するときは、途中受用、佛法を合點して見る。と、途中受用で、朝から晩までの事が皆佛法にかなつて居る。法華經に、治世產業皆實相に契ふと、日常の事が皆佛法に合ふと説いてある。佛法を合點した上から見れば、商人の算盤をはちく指先にも、百姓の鋤鍬を打つ手の平にも、皆佛法は現はれて來る。さうなつて見れば、朝から晩までの働きが自由自在になつて來る。その様子を龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たりといふたのだ。龍は水を得ると自由自在の働をする。虎も動物園の檻の中に居ては不自由だが、一度山に入つて罎に寄つたら、それこそ、猛虎一聲、山月高しの威風を振ふて、自由自在の働も出來る。これは會して自由を得た方の事を云ふた。これと反對に、會せざるときは、世諦流布で、會せな

い時は、佛法も世間の無駄話になつてしまふ。世間には誠にうるさい事が澤山ある。私共のやうに、妻子もなし、弟子は皆寺を持つて居る、何の心配もない。衲は寺を四ヶ寺ばかり持つた、二度目に駿河の天徳寺といふに、住職をして居つたが、隨分破れ寺であつたのを、檀中が立派に普請をして、夜具蒲團までも拵えてくれた。其れをのこして、袈裟行、李一つで、達州の大洞院といふに移つた。この寺は三千六百の末寺があるが、本堂も祖師堂も無かつた。そこをまた普請をして、今度は可睡齋へ轉住した。持つて來た物は、自分の手入した本ばかりである。可睡齋は伽藍は揃ふて居る。執著せず轉じてあるけば、誠に氣樂なものだ。大智禪師は、縁有れば住し、縁無ければ去る。一任す清風の白雲を送るに、と頌はれたが、眞箇出家の境界は氣樂なものさネ。然し世間ではさうはいかぬ。世間は妻子眷族があつて誠にうるさい。けれども此頃では僧侶も妻帯するやうになり、誠に世諦流布だ。ところで全體佛法と世法とは、どれだけ違ふか。佛法の眼で見れば、世法も皆佛法だ。世法の眼で見れば、佛法も皆世法となる。小説家の眼でお經を見れば、お經も皆小説としか見えぬ。即ち會せない時は、佛法は皆世法となる。羚羊、羆、觸れ、自由自在に働けない。衲どもは一文の貯へもないが、



又借金もない、世間の銀行は皆自分の銀行のやうに思つて居る、誠に呑氣だが世間の人はさうはゆくまい。株を守つて兎を待つ、此間も可睡の山に兎が出た、參詣も多いのに、兎がいつもそこに出ると云ふ譯ではない、それをまた出て來ると思つていつまでも待つて居る、馬鹿もある。佛法も其通り、何時も同じやうに一句をきめ込んで守つて居つては一向駄目だ。だから有る時の一句は踞地獅子の如く、踞地の獅子がいい。獅子は蹲まつて居つても、なか／＼そばによりつけぬ。人間も或時は此踞地の獅子の如くなる威光がありたいものだ。有る時の一句は金剛王の寶劍の如く、どんな堅いものでも、金剛の劍を持つて行けば斬れる、金剛は一切を斷破する。劍にも殺活の二用がある。有る時の一句は天下人の舌頭を坐斷し、一句の下に天下の人に口を開かせぬ。有る時の一句は隨波逐浪、觀音様が三十三身に身を現じて、機に臨み變に應じて衆生濟度をして行く、それが隨波逐浪だ。若し也。た途中受用ならば、これは前の途中受用と云ふ處を受けて來たのだ。佛法を體得して途中受用した人に會つたならば、知音に遇ふて機宜を別つて、知音とは同道唱和する氣心の解つた同士、そこで、其相手の機に應じて法を説いて行く、いつも鑄型へはまつたやうな法ではない

かぬ。觀音の三十三身を現じて、衆生を濟度するやうでなくてはならぬ。休咎を知り相共に證明せん。休とは氣に向ひた方、咎とは背いた方、氣にむいて居るか、背いて居るかに依つて、臨機應變に法を説いて、證明する。證明と云ふは、本則を見ると解るが機用の上に即したり離れたりして、その間に互に氣脈を通じあつて居る様子を云ふのだ。若し也。た世諦流布ならば、一隻眼を具して以て十方を坐斷して、壁立千仞なるべし。之は迷つて居るものに對して云ふたのだ、そんな迷つた者に出會つたら、一隻眼といつて、普通の眼の上に、今一つ活眼を開かせ、頂門の眼を具へさせて、よく向ふの見えるやうにして、以て十方を坐斷し、我々共皆壁立千仞で、皆獨立の身體を持つて居る、決して他人の目や耳などを借りて居らぬ。是皆自主獨立のもので、十方を坐斷し壁立千仞ならしめて居るのである。それで皆八風吹けども動せぬやうにせねばならぬ。八風とは、利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂である。此八風の爲にびくともせぬ人が即ち十方を坐斷し壁立千仞の人である。そこで迷つた人には、此く迷はぬ様にするのが、師家の手段である。所以に道ふ、大用現前軌則を存せずと、大用現前軌則を存せずでなければ本當の活動は出來るものでない。役人でも小役人に限つて、兎角軌則の



事ばかり云つて居る。さりごと、軌則が無くなつてもいかぬ。有つて無いやうにならなくてはいかぬ。こちらで作戰計劃を規めて居つても先方の出方に依つて自由に活用するでなければ本當の勝利は得られぬ。これを禪の言葉でいへば有る時は一莖草を將つて丈六の金身と作して用ひ、有る時は丈六の金身を將つて一莖草と作して用ふ。丈六の金身とは、釋迦佛のことである。一本の草を釋迦佛となして用ゆるとは、大用の軌轍なきことを云ふたのだ。手でもさうだ、さす手ともなり、たたく手ともなり、與へる手ともなれば、奪ふ手ともなる。用ゐ方によつて變はる。手に軌則を存して居る筈はない。それは打つ一方や握る一方にきめ込むと大用現前の働は出來ぬ。刀もさうだ、守る刀ともなり、攻める刀ともなる。何も法にきまりはない。用ゐ方によつて活かしも殺しもするのだ。且く道へ、箇の什麼の道理にか憑る、還つて委悉すや、さて是はどういう譯か、吞込めたか試みに舉す看よ、ともかく次の本則に就て參究するがい。

【本則】舉。翠巖夏末示衆云、一夏以來爲兄弟說話、看翠巖眉

毛在麼。保福云、作賊人心虛。長慶云、生也。雲門云、關。

【讀方】舉す。翠巖夏末に衆に示して云く、一夏以來、兄弟の爲めに說話す。看よ翠巖が眉毛在りや。保福云く、賊と作る人心虛る。長慶云く、生せり。雲門云く、關。

翠巖を始め此の則にある四人は皆雪峯の法を嗣いだ人計りだ。夏末とはマ一解り易くいへば秋の始、夏の末のこと、本當は一夏安居の終末のことだ。その夏末の垂示である。一夏以來兄弟の爲に說話す。看よ翠巖が眉毛ありや。わたいはこの一夏以來多くの僧侶たちの爲に、いろく説法をした。處が御經の中にあんまり説くと、罰が當つて、眉毛が落ちると云ふことがある。眉毛が落ちたかも知れぬ、一つ見て呉れ」と云ふた、これ翠巖が他を試みんとする垂綸である。保福云く、賊となる人心虛る。盜をする心は落ちつかぬと見えて何となく心配して居ると云つた。夫はさういふ査でも見ると、悪い事をした奴は心が落付かぬ、然し翠巖を賊と見たのは、さういふ保福も亦賊だ、つまり賊同士だ、これが垂示に、知音に遇ふて、相共に證明せんと云ふてあるところだ。賊、賊を知るだ、賊といふたとして世間でいふ盜人のことでない、他人



の心底を看破する程の禪者を賞めた語だ、ところで長慶云く、生せり、心配するには及ばぬ、ちやんと眉毛は生えて居ると云つた。長慶も又賊だ。百日の間説いたといふがそんな筈はない、その手にはのらぬぞ、佛でさへ一字不説だ、ちやんと眉毛は生じていますと云つた按配だ。夫から雲門云く、關、雲門はよく一字の語を云ふ、關とは難透の場所だ、昔の關所だ、翠巖が眉毛ありやと云ふたが、これは容易な言葉ではない、なか／＼やす／＼と透過は出来ぬぞ、昔支那の函谷關と云ふ關を、鶏の假聲をして通つたと云ふ話がある、しかし此關だけは金城鐵壁だ、なか／＼ごまかしでは通れぬと、雲門がうんと値打をつけた、實は四人共皆な同じ穴の狐だ。垂示の謂ゆる知音同士で互に休咎を分つて居るところだ、何のことはない、一本の拄杖を四人して昇ぎ廻つて居るやうなものだ、斯ういふ所を古人は、同坑に異土なしなど評して居る。三人に任せる必用はない、この場合我等なら如何に見處を呈するか、これが即ち參究である。この參究がなければ折角の公案も昔嘶になつてしまふ。

〔頌〕頌云。翠巖示徒、千古無對。關字相酬、失錢遭罪。潦倒保

福、抑揚難得。嘵嘵翠巖、分明是賊。白圭無玷、誰辨真假。長慶相諳、眉毛生也。

【讀方】頌に云く、翠巖徒に示す、千古對無し。關字相酬ゆ、失錢遭罪。潦倒たる保福、抑揚得難し。嘵嘵たる翠巖、分明に是れ賊。白圭玷無し、誰か真假を辨せん。長慶相諳んず、眉毛生せり。

徒に示すとは、本則の「一夏以來云々の」學徒に示した事を云ふたのだ。千古對無しと云ふは、翠巖の垂示に、千古萬古答へるものがないといふ、ここで、翠巖の氣に入るやうに答へる人はなか／＼ない、翠巖の知音は容易に得られぬ。關字相酬ゆ、流石は雲門だ、關と一字を持つて酬ひてをる、この一字に千鈞の重味がある。失錢遭罪、支那の昔の法律のやうに、錢をなくした上に、罪にあつたりしてをる。之は説くべきでない處を説いたりするのは、錢をなくしたと同じ、其上に又罪に逢ふとは馬鹿なことだ。夫は翠巖ばかりでない、潦倒たる保福、潦倒は倒老だ、老ひばれの、保福もさうだ、抑揚得難し、賊となる人心虚ると云ふのは、一體保福は揚げて居るのか抑げて居るの



か一向見當がつかぬ。抑揚得難し。實は雪竇はちやんと承知して居る。諸人に注意させんために「得難し」とばかしたのだ。嗚々たる翠巖、嗚々たる云ふは饒舌多辯の貌だ。一夏以來云々と八釜しくおしやべりをせられた翠巖、これこそ分明に是れ賊だ。一夏以來云々と云ふたが、なかなかの賊だ。うづかりすると膽玉まですられてしまふぞ。更に翠巖を一層ほめて、白圭玷無し。八面玲瓏の水晶の玉のやうなもので、しかも迷ひだの悟りだのを離れて、一點のきづもない。誰か眞假を辨せん。これは本當の玉か偽の玉か、其眞假を辨するものがあるかどうか。長慶相ひ諳んず。眉毛生せりと云つた長慶和尚のみが此玉の値打を知つて居る、それは、お前の罪は消えて居る、其證據にはちやんとそこに眉毛は生じている、それは能く其眞假を諳んじて、知つて居ると、頷はさうだが、何も長慶一人のみが諳じて居る譯でもあるまい。四人共皆諳じて居るのさ、翠巖一人が分明に是れ賊でもあるまい、四人共皆分明に是れ賊さ、衲から見れば雪竇もちやんと諳じて居る、雪竇も却々の老賊さ。全體禪語には口抑下の意卓上というて、口でけなして心で賞めて居るやうな場合がよくある、餘程注意しないとい見損ふ、漢學の力はあつても碧巖が解らぬといふ點はこゝらの邊にも在る。

第九則 趙州東西南北

(大正八年五月二十日 於三菱本社第一會議室)

【垂示】垂示云、明鏡當臺、妍醜自辨。鑊錮在手、殺活臨時。漢去胡來、胡來漢去。死中得活、活中得死。且道、到這裏、又作麼生。若無透關底眼、轉身處、到這裏、灼然不奈何。且道、如何是透關底眼、轉身處、試舉看。

【續方】垂示に云く、明鏡臺に當て、妍醜自ら辨ず。鑊錮手に在り、殺活時に臨む。漢去り胡來り、胡來り漢去る。死中に活を得、活中に死を得。且く道へ、這裏に到つて又作麼生。若し透關底の眼、轉身の處無くんば、這裏に到つて灼然として奈何ともせず。且く道へ、如何なるか是れ透關底の眼、轉身の處。試みに舉す看よ。

明鏡と云ふは、明かな鏡のことである。鏡はちやんと臺に當りて照して居る。其鏡の前に立てば、器量のよい者はよく映り、悪い者は悪く映る。古人も「寶鏡私無し」と云ふてある。長は長、短は短、圓は圓、方は方、その形に隨つて映る。それのみならず、娘は娘



老爺は老爺と映して少しも昧さない鏡には、爺さんはひいき、分にして若く映してやるが婆さんはえい、かげんに映すと云ふやうな私はない。これは何をいふかといふと、師家の鋭い眼力をいふたのである。誠に妍醜自から辨ずで、總じて師家たるものは、鏡の心を以て人に對はねばならぬ。自分の手鏡にかけて見ると、向ふの五臟六腑がちやんと解る。人を支配するにもこの鏡をもつてせば、此人は口と腹とが一致して居るか違つて居るか、虚いつはりがないかがよく分かる。善く人を見又能く人に應じて其の人を使ひ、また人の機に對して説くことが出来る。此點は師家も支配人も皆同じことである。鑢鄒手に在り、殺活時に臨む。鑢鄒と云ふは、干將鑢鄒の名劍の事で、鑢鄒の劍は、用ゆる人に依りて殺活自由である。或時は人を活し、或時は人を殺す。所謂殺活時に臨むの活手段である。之も亦只師家のみでなく、會社の支配人も必ず此の手段がなくてはならぬ。其の時其の人に臨んで、此の劍を使つて行かねたばならぬ。文殊大師が一本の草を拈じて、此草能く人を活し、又能く人を殺すと云ふたことがある。金錢でも同じ事である。之を活して使ふ人もあり、又殺して使ふ人もある。金錢は死活を離れて居る、使ふ人に依り死ともなり活ともなる。使ふ人の使ひや

うに依つては身を亡ぼす金錢となり、立身出世する金錢ともなる。國を亡ぼすも金錢、國を盛にするも金錢である。刀も其通りである。身を護る刀ともなれば又身を殺す刀ともなる。鑢鄒手に在り、殺活時に臨む、時に臨んで使ひ分けをして行かねばならぬ。漢去り、胡來り、胡來り、漢去る。之は明鏡の方にかへつて示すのである。胡が來れば、胡が映り、漢が來れば、漢が映る。東洋人は東洋人、西洋人は西洋人に映す。鏡には私はない。所謂妍醜自ら辨ずと云ふ句を受けて云ふたのである。死中活を得、活中死を得。これも誠に結構な言葉だ。どうしても一遍死んでしまはねば大活現成底の活動はできぬ。禪宗で「大死一番し來れ」と云ふ語がある。さうでない、大活現成の作用は出來ぬ。早い話が、東郷大將が日本海戰の大功も、死中に活を得たのである。大死一番と云ふは先づ自分の妄想を殺してしまふことだ。東郷大將が日本海戰の時、自分の命の事や、妻子眷族の事などはさらに念頭にはない。唯だ國家の爲に一命を捧げて大死一番し來つた結果である。それでなければ、大活現成の働きは出來ぬ。妄想を殺し來つて、始めて活を得るのだ。世界の英雄豪傑は皆死中に活を得た人達である。活中に死を得るとは誠に面白い。蟻川新左衛門と云ふ人の歌に「人の世に生れ



し時に死にければ今日の夕は松風ぞ吹くといふがある。死中に活を得て居る人の境界である。人生五十年生きて居る間は、死んで生きて居る人でなければならぬ。それだから大活動が出来るのである。ところが大概の人は生きて居て死んで居る、生きた死人が多いやうだ。人の厄介になつたり、人の世話になつたりして居る者は生きた死人である。譬へば死活は一枚の紙の如く、裏となり表となり、一枚の紙の表裏は別に離れて居るものではない。一枚の紙の表ばかり持つて来いと言つても、持つて来られるものではない。生と死ともその通りである。生死一枚の道理は水と氷の如く、水と氷も二つの様であるが二つではない。寒氣に逢へば氷となり、暖氣に逢へば水となる。つまり一つのもものが氷となり、水となり、裏となり表となるまでの事である。だから生死の問題は生を明め死を明めねばならぬ。生死を明めて見れば生死は佛の御命である。生死の世界にありて生死を離れて居らねばならぬ。蓮華の如く泥から生じて泥を離れて居らねば本當の活動は出来ぬ。正念坊と云ふは面白い人である。佛様に御飯を上げる毎に、それ食へそれ食へと云ふたと云ふてある。彼の正念坊の境界は生死を離れた佛の境界であるから佛も喜んで受けたに相違ない。此

正念坊が死ぬる時が面白い、いつ來てもまたいつ來ても同じ事ぢよいことゝらで死んでみやうかと云ふて死んだとある。斯の如き人は生死を離れて居るから面白い。之は即ち禪を得て居る人である。禪とは解脱の事である。生死にしばらく居らぬのが禪である。死中の活、活中の死で眞に生死を透脱したのが禪である。且く道へ這裏に到つてまた作廢生、這裏に至ると云ふことは、前の死活自由の境界で、なんど死中に活を得、活中に死を得る。此消息が出来るか、どうである。若し透關底の眼、轉身の處なくんば、透關と云ふことは、生死の關門を通りぬけたる人である。誰しも相對の見と云ふものは、なか／＼離れ難いものである。相對の見とは、生死と涅槃、衆生と佛、煩惱と菩提、皆これ相對の見にして、此の二見を透得することはなか／＼むつかしいことである。謂ゆる、あひのたんぼで日を暮すとは此の事である。透關底の眼と云ふは、此生死を離れた活きた眼の事をいふのである。轉身の處といふは、皆此の相對に縛られず、解脱の境界をいふたので、つまり透關底の眼と同じ事である。透關底の眼とは、又は頂門眼ともいふてをる。要するに何れも解脱の境界を云ふたのである。這裏に到つて灼然として、奈何ともせず生死とか、煩惱とか、見たもの聞いたもの



に引つかゝつて身動きも出来ぬ。灼然と云ふは、あきらかなること、且く道へ如何なるか。これ透關底の眼、轉身の處、それは今の公案に就て見るがよい、趙州和尚の働きが、即ち透關底の眼、轉身自在の働きである。趙州の如く轉身自在の働きが出来れば、今日の人も亦趙州と相見底の人である。今日の人も趙州の如く修行さへすれば必ず出来ることである。試みに擧す看よ。篤と本則に就て見るがよい。

【本則】擧。僧問趙州、如何是趙州。州云、東門西門南門北門。

【續方】擧す。僧趙州に問ふ、如何なるか。是れ趙州。州云く、東門西門南門北門。

趙州和尚は、六十歳の時に發心した人だ。衲は六歳の時僧になつて今年六十二歳だが、やつと此位のものだ。趙州は六十の時に發心して、其時好い事を云はれた。自分の知らぬ事は、三歳の童子にでも頭を下げて聞き、自分の知つた事は八十の老翁にでも教へてやる。と云はれた。それは誠に菩薩の心であると思ふ。今の人は若い人に聞くのは羞かしいとか、年寄りに云ふのは、きまりが悪いとか云ふ、そんなことでは修行は進むものではない。趙州は六十歳で發心して、それから南泉と云ふ人の處に行

つて二十年間修行をした。道元禪師は、眼藏の中に、趙州は古佛なりとほめてある。古佛と云ふは、ほめて云ふ語だ。衲などにもよく老古佛など、手紙の表に認めて來る。古佛とは尊んで云ふのである。唯文字通りならふる。ぼくは、骨董店の古い佛像のやうだが、さうではない。古佛はほめあがめて云ふのである。支那には善知識や禪師は、澤山居られるが、趙州の如きは、特に勝れた善知識であつた。其趙州の處に或る僧が如何なるか。是れ趙州と問うて來た。此僧は相當に見識もあるらしい、平凡の雲水でもあるまい。それは、趙州と云ふは、人の名にして又處の名である。それだから此僧は人境の兩面を含めて問ふた様子がある。此の趙州和尚が勝れていることは處の名が人の名となり、趙州和尚に土地が藏れて居る。丁度甲斐の信玄、越後の謙信の如く、信玄と云へば甲斐は信玄に藏れる、謙信と云へば越後は謙信に藏れるやうなものである。此僧は中々喰えない、句裏に機を呈して居る。若し趙州が人に就いて答へたら、私は人間の趙州の事を問ふたのではないと云ふ積り、また境の方から答へたなら、私は土地の趙州を問ふたのではない、人の趙州の事を問たのだと云ふ積り、これが句裏に機を呈すと云ふのだ。禪宗では之を驗主問と云ふ、主人を試みる處の問



である。これは昔釋尊の時代に、雀を手に握つて、此雀は生きて居るか、死んで居るか、外道が來て釋尊に問ふたことがある。若し生きて居ると云つたら握り殺して見せる積り、又死んで居ると云つたら、生きたまゝ見せる積りであつた。そこで釋尊は、片足を門の内に、又片足を門の外に出して、わたしは出て居るか、又は入つて居るか、と反問した話がある。其話と此本則の間答の様子が能く似て居る。だから雪竇が「句裏に機を呈す」といつた。禪宗では能く人境一致せねば寺が榮へぬと云ふてある。これは寺には寺相應の住職が居らねばならぬ、寺ばかり大きくて住職がつまらなくともいかぬ、又小さな寺に勝ぐれた住職を置いてもいかぬ、つまり寺相應の住持でないといかぬ、人と寺と一體となつて居らねば寺は衰へると云ふてある。處が趙州は人だの境だのと二つを持つて居ない。この僧は人と境と相對の頭で問をかけて來た、ところか趙州の心に相對はない、世界を以て自分の體として居る。人だの境だのと云ふ區別はない。山僧も自慢ではないが、可睡の山中を體として居る、隨分境内は廣いが大雨の節には山が崩れることもある、風が吹いて木が折れることもある、其の時は自分の體にきづがついたやうに思つて居る。山と自分と一體の考へで居

なくては寺は榮えるものではない。寺院と住職と、人と境とがびたつと相應して、居らねばならぬ。恐れ多きことながら、至尊は日本を全身とせられ、日本を以て玉體と思し召されねば日本は榮えぬ。一會社の社長でも同じことである。處が趙州は世界を全身として居る、そこで人だの境だのといふ事は少しも云はぬ。州云く、東門西門南門北門東門へ行けば東門趙州、西門へ行けば西門趙州で、どこへ行つても皆趙州で、つまり日本國中どこへ行つても天子様の御玉體だと云ふ意味と同じことだ。世の中はすべてさういかなねばならぬ、總てのものが一つにならねばいかぬ。人のものだの我がものだのと區別を立てゝはいかぬ。凡夫は兎角この能所の見を離れ得ぬものだ、これはおれの仕事、あれは誰の仕事だと云つて、彼此と區別を立てたがる、それではいかぬ、仕事をするには親しく自分の物にしてやらねばならぬ。

「頌」頌云。句裏呈機劈面來。爍迦羅眼絕纖埃。東西南北門相對。無限輪鈍擊不開。

【續方】頌に云く。句裏に機を呈して劈面に來る。爍迦羅眼纖埃を絶す。東西南北門相



對<sup>たい</sup>す限<sup>かぎり</sup>無<sup>な</sup>き輪<sup>りん</sup>錠<sup>てい</sup>擊<sup>うち</sup>ども開<sup>ひら</sup>けず。

句裏に機を呈して劈面に來るとは、句の中に却々働きを呈して居る、尋常の問ひではない處のあんばいがあつて、劈面とは、顔をつんざくやうな勢がある、是れは驗主問である。處が爍迦羅眼、織埃を絶す。趙州は爍迦羅眼を具へて居る。爍迦羅眼と云ふは、古人が色々云ふて居るが、金剛眼のことだ、又は剛固眼のことだとも云ふ。又かう云ふた人もある、爍迦羅茲に輪と云ふ、所謂ぐる／＼とまわる丁度役者の目玉のやうに動く自在の活眼のことを云ふたのである、向ふの五臟六腑を見ぬく力のある眼のことだと云ふて、丁度垂示にある明鏡と同じで、活眼のことである、輪と云ふ方が私は善いと思ふ。そこで織埃を絶すと云ふことは、一點のちりほこりもない活眼の事である。この僧がいくら句裏に機を呈して來ても、老趙州の輪眼には見ぬかれてしまふ。見ぬいたから趙州はそんな處に引つかゝつては居ない、自由自在だ、東西南北門相對す、東へ行つても趙州だ、西へ行つても趙州だ、どこもこゝも趙州だと答へた。此趙州の門は無門を以て門として居る、禪宗に無門關など云ふ事があるが、それだと思ふ。限り無きの輪錠擊てども開けず、此趙州の門は錠を以ていくら撃つ

ても叩いても開かぬ、なせかと云へば、之は迷ひだの悟りだのを離れて居る所謂無門を以て門として居るから、中々開けも碎けもせぬ。迷ひだの悟りだの錠を持つて打つても開かぬ。その迷悟を離れているから、迷悟の錠でいくら敲いても打つても開くはづがないのである。

### 第十則 睦州問僧甚處

【垂示】垂示云。恁麼恁麼、不恁麼不恁麼。若論戰也箇々立、在轉處。所以道。若向上轉去、直得釋迦彌勒、文殊普賢、千聖萬聖。天下宗師。普皆飲氣吞聲。若向下轉去、醯鷄、蠓蠓、蠢動、含靈、一々放大光明、一々壁立万仞。儻或不上不下。又作麼生商量。有條攀條、無條攀例。試舉看。

【續方】垂示に云く、恁麼恁麼、不恁麼不恁麼。若し戰を論せば、箇箇轉處に立在す。所以に道ふ、若し向上に轉じ去らば、直に得たり。釋迦彌勒、文殊普賢、千聖萬聖、天下の宗



師し普ふく皆みな氣きを飲のみ聲こゑを呑のむ。若もし向かう下げに轉てんじ去さらば醜けい雞けい蟻あひ蠟ろう蠟ろう蠢じゆん動どう含かん靈れい、一一大たい光くわう明みやうを放はなち、一一々々壁へき立り萬ばん仞じんならん、もし或あるは不ふ上じやう不ふ下げならば、又また作そ麼ち生さんか商しやう量りやうせん。條じょう有あれば條じょうを攀たち條じょう無なければ例れいを攀たづ。試こみに擧こす看みよ。

此垂示は誠に解りにくい、しかしまた能く垂示したものだ。慙おん慙おん、これは許す方で放行の方だ。前にも云ふた通り、此コツプは慙おん慙おんにコツプである、又此水みづさしは慙おん慙おんに水みづさしである。山は慙おん慙おんに高く、海は慙おん慙おんに深し。のみならず、天地萬物皆慙おん慙おん。慙おん慙おんであらはれて居る。今度は許さぬ方で、把住の方から見れば、天地萬物皆、不おん慙おん。不おん慙おんで、山は山に非ず、不おん慙おんである。海は海に非ず、不おん慙おんである。コツプはコツプに非ず、水みづさしは即ち水みづさしに非ず。即ち不おん慙おんの現はれである。海は水の集まつたもので、其水を分析すれば海はない。人間は四大五蘊の積集して出来て居ると云ふ。その四大も四大にあらず、五蘊もまた五蘊にあらず。四大本空五蘊有にあらず。四大五蘊の其外に別に人間は無い。此のコツプでも水みづさしでも、皆分子の集合で、謂ゆる因縁の結び付きである。假に形をなして居るまでのことで、分析すれば別にコツプも、水みづさしもないではないか。引よせて結べば柴のいほりなり、とくればもこの野

原なりけり、だから法は合點して見ると面白い。合點して見れば只是れ慙おん慙おん、慙おん慙おんのあらはれである。又合點して見れば皆是れ不おん慙おん、不おん慙おんのあらはれである。龍樹菩薩はかう云ふて居る、因縁所生法、我說即是空と、一切諸法は因縁に依つて生じたものである、人畜家屋山河を始め、天地萬物皆因縁所生法である。さうしてこの因縁によりて出来たものは、一たび因縁離散すれば皆是れ空となる、龍樹は大乗佛教の先祖で、又八宗の祖師である、此の龍樹菩薩の語は實に是れ佛教の道理を説き盡されて居る。其の空と云ふのは、頑空の空ではない、即ち茲の不おん慙おん、不おん慙おんを云ふたのである。だから、かう云ふ風に説けば、慙おん慙おん、慙おん慙おんは差別界にして、不おん慙おん、不おん慙おんは無差別界と見てもよい。世界は皆空のあらはれであると云ふてもよい、皆な自性はないではないか、畢竟するに分子も原子も、つまり不可解とか不可知とか云ふより外はない。根本原理の處に至れば知不到の處にして空と云ふよりは外はない。されば空と云ふは何んにも無いことかと云ふとさうではない、差別と云て差別と無差別と二つあるではない。よく合點して見ると又かう云ふ風に云ふてもよからう。差別を異と云ひ、無差別を同と云ふてもよい。盡界一佛性と云ふことがあるが、差別でも無差別



別でも皆是れ佛性の顯はれである。唯色々と名をつけたのみで、つまり同一佛性である。若し戰を論せば、また箇々轉所に立在す。宗門で法戰と云ふことがある。長老になる時はこの法戰と云ふ事をやる。向ふから戰をいどんで來たらば、箇々轉所に立在す。向ふから向上に攻めて來ると、向上に對するやうに應戰する。向下より來たらば、向下に接するやうに其れ相應に應戰せねばならぬ。又強く出て來たら弱く、弱く來たら強く、謂ゆる強に逢ふては弱弱に逢ふては強と、色々向ふの出やうに依つて應戰の手段がなくてはならぬ。此頃澁谷で巡查を集めて布教をして居るが、大變成績が良いと警察の人がほめて演説をした。今迄佛教を聞かぬ前は巡查の立番をして居るのが、如何にもいかめしく見えたが、此頃は六道の辻の地藏尊のやうに見ゆる様になつた。何でも人を治むるは、柔和忍辱でなくてはならぬ。佛法を聞いてから、大變良くなつたといはれたが、強く來れば却つて之を弱く受け、弱く來れば強く受ける、こゝが轉所に立在すといふ處だ。所以に道ふ若し向上に轉じ去らば、さあ向上の上から、云ふ時は無差別になるから言ふことも説く事も出來ぬ。古人も、口不能議心不能緣と云ふて居る如く、向上の事は口に説くこと能はず心も緣すること

も出來ぬ。直に得たり。釋迦彌勒文殊普賢千聖萬聖天下の宗師普くみな氣を飲み聲を呑む。釋迦は御存知の通り、彌勒は等覺の菩薩、例へば皇太子のやうなもので必ず次に佛になるべき位に居る人である。文殊は七佛の師と云はれてある。普賢は諸佛の長子と云ふてある。何れも勝れた人ばかりだ。そればかりではない、千聖萬聖、佛教で「三賢十聖」と云ふ事があるが、いづれもえらい人ばかりだ。或は天下の宗師、之も善知識の宗匠にして勝れた人だ、かういふ勝れた方々でも、普ねく皆氣を飲み聲を呑む。で、何んとも説かれぬ。言語道斷、心行所滅といふはこゝを云ふたのだ。皆氣を飲み聲を呑むより外は無いなせならば、向上の法門は説かれぬ。酢ざめの水の味でさへその儘説くことは出來ぬではないか。況んや佛法をやだ。法華にも、止不可説、我法妙難思議と云ふてある。そこで、法の根本の處は、説く事は出來ぬ。畢竟氣を飲み、聲を呑むより外はない。若し向下に轉じ去らば、今度は前と反對に、向下に轉じ來つた處を云ふと、之は恁麼恁麼の方にかゝつて居る。其時になると、醯雞蠃蠓、醯雞と云ふは夏などになると酒がめの中などにわくうじ蟲、蠃蠓といふは空中を飛ぶ細かな蟲、「蠢動含靈」之はちいさい、うごめく、一切の生靈であつて、動くものを云ふ。誠に小さ



い蟲けらに至る迄も一々大光明を放ち、一々壁立萬仞ならん、どんなものでも、一々大光明を放つて居る。悉く皆佛の顯はれだぞ知るがよい。佛が因縁に依つて、色々な姿に顯れて居るのである。大光明とは日月の光明や螢の光りのやうな物を云ふのではない。大光明とは其物其物に皆獨特の大なる作用があることで、このコップはコップの作用がある、水さしは水さしの作用がある。夫々の物に作用あるは即ち大光明である、其物皆大光明を放つて居るではないか、能く見れば一々の物が他の力を借りて働いては居らぬ、皆それ／＼の物が皆作用を具へて居るではないか、今それを、一々壁立萬仞ならん」と云ふたのである。獨立自尊の面目を具へて、みなそれぞれの作用をして、決して他の力を借りては居らぬ。古人の語に、把住する時は眞金も色を失し、放行する時は瓦礫も光りを放つ」と説いてある如く、丁度茲の處に合して居る。儻し或は不上不下ならば、又作麼生か商量せん、不上と云ふは向上でないこと、不下とは向下でもないこと、要するに差別でもなく、無差別でもない。恁麼でもなく、不恁麼でもない時は如何にするか、どう商量するか、どう考へたらよいか。條あれば條を攀ち、條なければ例を攀ぶ、條例があれば即ち其の條例に依らねばならぬ、又條

例がなかつたならば、慣例に依るより致方はない、幸ひこゝに其の例がある。試みに舉す看よ。

〔本則〕舉。睦州問僧。近離甚處。僧便喝。州云。老僧被汝一喝。僧又喝。州云。三喝四喝後作麼生。僧無語。州便打云。這掠虛頭漢。

【讀方】舉す。睦州僧に問ふ、近離甚の處ぞ。僧便ち喝す。州云く、老僧汝に一喝せらる。僧又喝す。州云く、三喝四喝の後作麼生。僧無語。州便ち打つて云く、這の掠虚頭の漢。睦州は前にも一寸申したが雲門を接待して脚を折つた陳尊宿ともいふ人だ、非常に機鋒の荒い人だ。この睦州が僧に問ふた、近離甚の處ぞ、近ごろ何の處を離る、どこから來たかとかかう問うた、この睦州の間には響きがある。お前はどこから來たかとか來處を問ふた、水を試みるには杖を以てし、金を試みるには火を以てし、人を試みるには語を以てする」と云ふ語がある、丁度こゝの處だ。之は餌をつけて鉤を垂れたやうなものだ、ところが此僧も滿更でない。僧便ち喝す。力一ぱいにカーと一喝を



下した。睦州は向ふが向上の手で来たから、下た手に組むだ。州云く。老僧汝に一喝せらる。お前から此の一喝を喰つて耳が遠くなるやうな氣がしたと、睦州は強に逢ふては弱と下手に出掛けた。睦州の手段は所謂「機を輪く謀主に深意あり」で、低くは出て居るが、そこになか／＼油断のならぬ窺ひ難い深意がある。僧は又力一パイに一喝した。此僧の方は丁度敵を欺く兵家に遠思なしで、遠大の考へはない。州云く。三喝四喝の後、作麼生。二度迄も喝を放つたが、睦州なか／＼許さぬ。三喝四喝の後作麼生と云はれて僧は無語となつた。謂ゆる龍頭蛇尾に終つた。修行は兎角親切でないといかぬ。州便ち打つて云く。此うそつき坊主めと云つて一棒を與へた。這掠虚頭の漢。祖師の言葉に「參は須らく實參なるべし」とあるが、何んでも實參でなければならぬ。この僧實參でない。今日の僧は學問斗りに力を入れて實參であると思ふ。掠虚頭の漢と云ふは、虚頭をかすめると云ふから、此偽悟り坊主めと叱責したのだ。偽悟りではいかぬ眞實に修行せねば駄目だ。

〔頌〕頌云。兩喝與三喝。作者知機變。若謂騎虎頭。二俱成瞎漢。誰瞎漢。拈來天下與人看。

漢。誰瞎漢。拈來天下與人看。

〔讀方〕頌に云く。兩喝と三喝と。作者機變を知る。若し虎頭に騎ると謂はゞ。二り俱に瞎漢と成らん。誰か瞎漢。拈じ來つて天下人に與へて看せしむ。

兩喝は僧にかゝる。三喝は睦州にかゝる。作者機變を知る。これは碧巖の見方と納の見方とは違ふ。碧巖の方は作者を僧に見たが、納は睦州に見た方がよいと思ふ。此僧を指して機變を知ると見て居るやうだが、納は睦州に見た方がよいと思ふ。睦州は機變を知りて臨機應變の活手段があると思つた方がよいと思ふ。此の僧をこゝでほめるのは當たらぬと思ふ。睦州はちやんと機變を知つて、三喝四喝の後作麼生と言はれた。若し虎頭に騎るといはゞ。此の坊さんは睦州の虎の頭へ登つたやうで誠にあぶないことをしたが、若し此の坊さんをほめて居る様では、ほめる人も此の僧も二り俱に瞎漢と成らん。どちらも瞎漢である。按本當の瞎漢は誰であるか。誰か瞎漢。拈じ來つて天下人に與へて看せしむ。誰が是れ目くらぞ。矢張り此僧が目くらでなくて誰か瞎漢なるか。此の「誰瞎漢」の三字は、此の僧を拈じ出して、天下の人をして



笑はしむるのである。睦州は太陽の光りの如く、此の僧は晝行燈のやうだ。日下の孤燈にして何の役にもたゝぬ。だから修行は親切にせねばならぬ。

第十一則 黃檗酒糟漢(大正八年六月二十日 於三菱本社第二會議室)

【垂示】垂示云。佛祖大機、全歸掌握。人天命脈、悉受指呼。等閑一句一言、驚群動衆。一機一境、打鎖敲枷。接向上機、提向上事。且道什麼人曾恁麼來、還有知落處麼。試舉看。

【讀方】垂示に云く。佛祖の大機、全く掌握に歸し、人天の命脈、悉く指呼を受く。等閑の一句一言、群を驚し衆を動す。一機一境鎖を打し枷を敲く。向上の機を接し、向上の事を提ぐ。且く道へ、什麼人か曾て恁麼にし來る。還つて落處を知るありや。試に舉す看よ。

この頃は世間が物騒になつて來た。山田憲が鈴辨を殺した。而かも、誠に殘酷なことをしたものだ。あゝいふ高等教育を受けた人があんな恐しい悪いことをするや

うになつては世間も實に恐しいことだ。全體佛教の三世因果の道理を少しでも合點して居たら、あんな始末をしなかつたらうと思ふ。世の中を治めるには、政治と教育ばかりではいかぬ、どうしても宗教といふものが大切である。政治と教育と宗教の此三つが鼎の三足のやうにそろつて居ないと、そこに缺陷が生じて來るのだ。特に人間は精神の奥底に慚恥を知ると云ふことが大事だ。神佛の前に出ても羞しくないと思ふ。清淨の心が大切だ。物事は宗教心がなくては、治まるものではないと思ふ。近頃歐洲大戰後、世界の思想界は大變混亂を來たした事である。當局もえらい心配で、今日も築地の本願寺に、大臣其他博士や學者達が出て、宗教家に何か話を聞かせて居る。全國の各宗派から、布教に携つて居る人達が集つて居るやうだが、衲にも出て來いと云ふ話であつた、けれども何も宗教上の安心の話ではあるまい。唯だ僧侶に注意をするまでの事であらう。同じ思想問題でも、勞働問題とか、婦人問題とか、參政権問題とか、其他生活問題など、日本でも其見方によつて、色々の社會問題があるやうだが、いづれそんな方面の色々の話であらう、かやうに今日は色々思想界が混亂して居るので、誰彼となく皆心配をして居る。此の間も東京へ來る途中、静岡で



衲に演説をして呉れと云ふたから、衲の思つて居るだけの話はしたことである。其話は他日の機會に譲ることとして、今日はこれまでの通り碧巖に就て話をすゝめる事にする。

佛祖の大機、佛も澤山ある、祖師も澤山ある、之を一口に三世の諸佛、歴代の祖師と云ふて居る。其中で、お釋迦様は佛の代表者、達磨様は祖師の代表者のやうなものだ。大機は大用など、同じ意味で、大きなはたらきと云ふことで、つまり千佛萬祖が爲人度生の爲に示された絶大の活機用である、それが今は全く掌握に歸す、一人で手のひらに握つて居るといふのであるから大した境界だ、だから殺活自在、與奪自由で、全く自由自在の機用が出来ることになる。今日でも、天下の萬機は、上御一人の掌握に歸して居る、そこで自由自在の御政治が出来るのだ。今こゝでは佛法の大機のことを云ふのだが、佛法の大機の運用は、佛祖と同じ境界に至つた者でなければ現はすことは出来ぬ。そこで、今此垂示は、暗に本則の黃檗禪師の事を指して居る。黃檗は佛祖と同じ境界を得て居る、黃檗は佛祖である。人天の命脈、悉く指呼に受く、人天の命脈と云ふは、人間天上の命の根本だ、これを佛祖の命脈と云ふても、佛法の命

脈と云ふてもいゝ、世界人類の根本精神といつても差支はあるまい、全體命脈があるから活用して行くのだ、命脈がなかつたら死物だ、命脈とは機用の根本の精神のことだ、だから命脈は何事にもある。日本には日本の命脈がある、日本建國の精神、これが日本國の命脈である、忠孝の二つが國民道德の根本、これが矢張り又日本國の命脈だと思ふ。家庭には家庭の命脈がある、先祖の遺志を基として出来上つた一家の家憲が命脈だ。宗門には開山の思召が命脈だ。念佛宗では、南無阿彌陀佛の六字の名號が命脈だ。禪宗では坐禪が命脈だ。今は人天の命脈と云ふ。大きくいへば法性のこと、小さくいへば人々皆佛に讓らぬ佛性を持つて居る、それが人々箇々の命脈である。それが指呼に受くと云ふから、丁度大將軍が三軍を叱咤する、一本の軍配を以て百萬の軍勢を手足の如くに動かすやうな有様だ。禪の言葉で云へば、把住放行、卷舒與奪の作略が自由自在に行はれることだ。等閑の一句一言、群を驚かし、衆を動かす。我々もどうか斯ういふ人になりたいものだ。なほざりの一句一言ですら、群を驚かし、衆を動かす位の力があつて見れば、其人の主張が、一國一社會を動かす輿論となるのは當然のことだ。丁度米國大統領ウキルソン氏の言動が、目下世界を動かす



て居るやうなものだのみならず後世百代の人を感化することも出来るのである、先代佛祖の一言一句が今日の我等を發奮興起せしむるのはそれだ、全體眞實本心に徹底した人でないとなか／＼さうはいかぬ、こゝらの處を文字のみに附つ着いて眞意が解らぬと禪といふものはやたらに大言壯語さへすればよいやうに勘違ひすることになる、突飛とつひなことや奇抜なことをするのは禪ではない、兎角世間の人には所謂「棺を蓋ふて論定まる」で、ふだんはえらい立派な事を云ふても、いざといふ時になると、それがすつかり「故紙こし」になる事がある、それは眞實本心に徹底した上の言葉でないからだ、本心さへ徹底して居れば、ふだんでも死ぬる時でも、少しも變る筈はない、如何なる逆境に遇ふてもその言行を紊すやうなことはない、斯くてこそ始めてその一言一句に、群を驚かし、衆を動かす力があるのである、南岳は「説似一物即不中」と云つた、たつた一片の言句であるが、此の一句で佛法を道ひつくして居る、如何なる佛祖もこれを批判する間隙すきがない、全體、法は無自性不可得である、その不可得のものを眞如とか法性とか名をつけて居る、法の根源に溯つて見れば全體一つも當つては居らぬのだ、ほんの一物に似ては居るけれども即不中である、この「佛祖

の大機掌握に歸す、等閑の言句群を驚かすといふて暗に黃檗の人格を賞めて居る。  
一機一境、これも前と續いた語句で、師家が學人を教育する場合の手段を示したのだ、その手段が黃檗のやうな人物だと實に一機一境でもちやんとその効果がある機とは心のはたらきを云ふ、自己の身體の上に示すのである、境とは客觀の境の上に現すことだ、例へば釋尊が迦葉に法を傳へる時に金婆羅華を拈じ揚眉瞬目した、その時迦葉尊者だけはその心を見て取つて破顏微笑せられた、その揚眉瞬目は一機だ、或は學人の間に對して、大喝したり、指を豎てたり、拳を出したりする皆一機の作略である、一境と云ふは、境に對して向ふ即ち客觀の物柄に付て人を指導するのだ、例へば、如何なるか是れ佛と問ふて來たのに對して、拂子を立てたり、溪聲山色を指したり、麻三斤と示したりするやうな類だ、本心に徹底した人であつたならば其の一機一境の作用の下に他を大悟徹底せしむることが出来る、そこを鎖を打し、枷を敲くといふのだ、鎖も枷も共に人間の身體を窮屈にするところの束縛の道具である、今は妄想執著の束縛のことである、其束縛を一機一境の活用を以て打ち切つて、自由自在の働きを得させて行く事を云ふ、これも普通の人では出来ぬ業である。



全體世間の人は妄想分別の鎖や枷で、自繩自縛の苦みに陥つて居る、この束縛を打破しなくては本當の活動は出来ぬ、修養とか參禪とかいふのは畢竟するにこれが目的だ、向上の機を接し、向上の事を提ぐ、向上の機と云ふは、上々根機の人を云ふ、人間の機類には色々ある、上根中根下根色々ある、其中の、上々根機の人を接得するには、こちらも亦、向上の事を提げて行かねばならぬ、立派な教育ある人の處で、田舎の爺さん、媪さんにするやうな話をしたところで間に合はぬ、向上の事と云ふは、向上の大事とでも云ふか、前にも度々云ふたが、向上の大事は説明も分別も届かぬ處だ、謂ゆる名不得狀不得、口で言ひやうのない端的だ、古人も、向上の一路千聖不傳と云つて居る、佛でも祖師でもこの向上の事だけは傳へることも承け嗣ぐことも出来ぬ、その向上の一事を提げて、上々根の人を接得して行くといふのだ、なか／＼容易でない、まだ／＼形で表したり口で言へる場合はいゝが、何とも言へないものを提げて、人を導くといふ、全體斯ういふ手腕のある人は容易に得難いさ、さて佛祖の大機を手の平に收め、天地法界の命脈を自由に扱ひ、而してなほざりの一句一言でさへ世人の耳目を動かし、一寸した作用で以つて、人の妄想袋を敲き破り、その上に上

上根機の人に對しては、向上事を提げて自由に接得する、こんな人物が今の佛教界に五六人居つたら國民思想善導など、騒がなくてもいゝかも知れぬ、偕て且く道へ、什麼人か曾て恁麼にし來ると本則の黃檗の事を導き出して來た、還て落處を知るありや、試みに擧す、看よ、さう云ふ人の落付き處を知つて居るか、知らずばごと本則の公案に就て參究するがいゝ。

【本則】擧。黃檗示衆云、汝等諸人、盡是嗜酒糟漢、恁麼行脚、何處有今日、還知大唐國裏無禪師麼。時有僧出云、只如諸方匡徒領衆、又作麼生。檗云、不道無禪、只是無師。

【讀方】擧す。黃檗衆に示して云く、汝等諸人、盡く是れ嗜酒糟の漢、恁麼に行脚せば何の處にか今日あらん、還つて大唐國裡に禪師無きことを知るや、時に僧有り出でて云く、只諸方徒を匡し衆を領するが如き、又作麼生。檗云く、禪無しとは道はず、只是れ師無し。

この黃檗は百丈の法嗣、馬祖の孫で、唐の宣宗皇帝から斷際禪師の諡號を賜つた、



「身の丈七尺天然に禪を會すと云はれてゐる。學人を接得する手段が實に手嚴しい。だから臨濟の如き英雄を打出したのだ。臨濟がその會下にあつた時分はまだ若かゝつたが、三年も會下に居つて、何んにも問はぬ、そこで當時會中の第一座であつた睦州が「お前は三年も居つてなせ何んにも問はぬか」と云つたら、問ふ事が解らぬから問はぬのだ」と云つた。そこで第一座の僧が、それでは如何なるか是れ佛法的々の大意と問へど教へた。臨濟はその通り黄檗に問ふた。ところが黄檗はいきなり二十棒を喫はせた。又問ふたら又二十棒、三度目も亦同様で、都合六十棒、之を「黄檗三頓の棒」と云つて名高い話になつて居る。それから臨濟は當到黄檗の處を暇乞して高安大愚の處に行つた。この和尚も當時一方の頭となつて居るなかゝの人物である。臨濟を看るや、驚愕どこから來た」といふ、そこで臨濟は「佛法の大意を問うたら三度ながら打着された、一體自分に過がありや過がなしや」と黄檗の次第を不平さうに話した。すると大愚は「黄檗、汝が爲に恁麼に老婆徹惛なることを得たり、あゝ黄檗の慈悲は骨髓に徹して居る、それをおれの處に來て過ありや無いしや」と問ふ、何のことでとウーンと叱りつけた。臨濟はこの一言の下に忽然として悟つて云く、佛法

元來多子無し」と始めて痛を覺えた、それから又黄檗の所へ歸つた、すると黄檗は「うろ／＼して什麼處から來た」といふ、大愚の所から來ました、大愚はどんなことを言つた」といはれて、適來の話をする、黄檗は「そんな事を言ふたか、こんど來たら一棒に打着せん」といふと、臨濟は「こんど來るのをまつに及ばず」と黄檗の頬をびしやりと打つた、すると黄檗は「この風顛漢這裏に到つて虎鬚を拵つ」と云つて、暗に印可をせられた。これを臨濟打爺の拳」といふて叢林に喧傳せられ居る。臨濟もえらいが、この黄檗は實に祖門の英傑だ、だから道元禪師も「正法眼藏」に「黄檗は百丈の法子として百丈よりもすぐれ、馬祖の法孫として馬祖よりもすぐれたり、祖宗三四世の間黄檗に齊肩なるなし」と褒めて居られる、全體道元禪師は非常に見識の高い方で、古人と雖も容易に許されぬ、賞讃するのは容易でない、今一つ黄檗の豪いことをいへば彼の四祖のお弟子に牛頭ゴウトウの法融と云ふ人がある。これも却々の人物だ、けれども黄檗はその見處けんじょを許さぬ所がある。横説堅説すと云へども、未だ向上の關楨子あることを知らずと云ふてゐる。此牛頭の法融と云ふ人は、坐禪もし、又大變な學者でもあつた。此人が坐禪をして居る山の上に雲氣が立つていたとある、四祖が行つて見ら



るゝと、牛頭和尚が石の上にちやんと坐禪をして居られた、そこで四祖が聲をかけるゝと、虎が二匹出て来た、すると四祖が恐るゝ勢をせられた、其時牛頭法融は四祖に向つて、尙ほ這箇の有る在りと申された、それから二人で散歩して四祖が一步早く歸つて元の坐禪石の上に、佛と云ふ字を書いて置いた、牛頭は石上に坐禪しやうとするゝと、佛と云ふ字を見てびつくりした、其時四祖、尙ほ這箇の有る在りと云つた、それから牛頭法融は四祖の弟子になつたと云ふ、此の人は學問も秀れ、坐禪もあつた人で、古來の宗將として人の尊敬する所である、その牛頭法融の見處すら許さなんだ、是の如く黄檗は實に豪い善知識であつた、この本則は黄檗の示衆であるから、いかにも力がある。

或時、黄檗が衆に示して云ふに、汝等諸人、盡く是れ、噉酒糟の漢、この噉酒糟の漢と云ふは、酒かすを喰ふて居る奴等だと云ふことで、支那唐代に人を罵詈譏諷するに用ゐた俗語だ、汝等大勢の者は、みな糟喰ひだと、随分荒い權幕である、そんな糟ばかり喰つて居つては、何時まで經つても眞の佛法は合點できぬぞ、安心決定の今日に逢ふことは出来ないぞと、慙慙に、行脚せば、何んの處にか、今日あらんと云ふ、随分思

切つて天下を一口に吞盡した云ひ分である、黄檗の目から見たらさうかも知れぬ、茲に酒糟と云ふのは、文字や言句にばかり附着いて佛法の眞意を味ひ得ないことを戒めたのだ、文字は載道の器ではあるが、文字は道ではない、何んの處にか、今日あらん、つまり酒糟ばかり喰つて居ては、正味の酒を味ふことはできないぞと、黄檗の親切である、遠つて大唐國裏に禪師なきことを知るや、大唐國裏は、支那四百餘州だ、全體、支那四百餘州に、禪師らしい者は恐らく一人もないと云ふ意もあらはれて、いる様だ、之は黄檗が、大さう鼻を高くして、人を併呑したやうな言葉だが、さうばかりでもない、ここには大變響がある、大衆の中に誰か引つかつて来るものはないか、と、鉤を下した意もある、さうすると、果して一人の僧が釣り上つて来た、只諸方徒を匡し、衆を領するが如きは、また作麼生、あなたは、大唐國裏に禪師なしと云はれたが、彼方にも、此方にも、大勢の坊さんを集め、大きな寺を持つて居る禪師たちが、現に澤山居らるゝでは、ありませんか、と言つた鹽梅だ、此の僧、天下の老宗將、黄檗にくつて、かゝらうといふ位だから、氣概も見識も一通りはないが、黄檗の音葉尻にくつついて来たところは、矢つぱり、噉酒糟黨の一人である事は、免れぬ、時に黄檗



の言葉が面白い。磔云く、禪なしとは道はず、只是れ師なし、禪がないとは云はぬ、禪と云ふものは宇宙に充滿して居る、其禪を教へる師匠がないと云ふ意味もある、此無師といふを合點するがい、禪と云ふものは師匠はない、自知自得にある、法の根本たる向上の事に到ると他より傳へたり他に與へたりすることは出来ぬ、佛法と云ふものは、唯自知自得するより外はない。全體何ごとも極所へ行くは無師だ、本當の妙處は決して教へられぬ、門より入るものは家珍に非ず、妙處は無師なものだ、所謂輪扁不傳の妙だ、輪扁と云ふ人は、車輪を作るに妙を得た名人で、車千輛作つても、墨繩や、差金を用ゐるすとも自然と轍に合したとある、名人であつたが、さて其妙所は可愛い小供にも傳へることは出来ぬ、禪も之と同様で、結局自知自得だ、こゝを無師といふのだ、尤もこの無師と云ふを、文字通りにも解せらるゝが、今は深き意味に取らねばならぬ、何に依て自得せられるか、坐禪が最も徑路である、この公案は黃檗が向上の事を提げて向上の機を接化して居る様子である。

【頌】頌云。凛々孤風不自誇。端居寰海定龍蛇。大中天子曾

輕觸。三度親遭弄爪牙。

【續方】頌に云く。凛々たる孤風自ら誇らず。寰海に端居して龍蛇を定む。大中の天子曾て輕觸す。三度親しく爪牙を弄するに遭ふ。

これは一則の頌といふよりも黃檗禪師の贊をしたと見た方がいゝ位だ。凛々たる孤風自ら誇らず、凛々とは清寒の姿と云ふて、一目視てもその威壓に依つて身體がすくむやうな心地をいふのだ、睡虎眼邊百歩の威ありで、睡つて居ても、虎のそばには行けぬ。佛國首相クレマンソーは老虎と綽名されて居るさうだが、黃檗も禪界の老虎だ、すさまじい威光が具はつて居て、孤風即ち何となく他に異つた風格がある、さうかと云つて、別に際立つて誇つて居る様子もないが、その威風が自づこ四隣を壓して容易に近寄り難い様子がある。流石は雪竇、この邊は實によく言ひ表して居る。寰海に端居して龍蛇を定む、寰とは寰中、畿内の事だ、寰中は天子の勅、塞外は將軍の令と云ふて、畿内は天子直轄の領地だ、天子様が帝都の真中に鎮座されて、きちんと四海を治めて行かれるやうに、黃檗は佛法の真唯中に端坐して、龍蛇を定



む、之は龍であるか、之は蛇であるか、天下人の伶俐不伶俐、是非曲直、善惡正邪を明かに判定する、つまり黄檗が他を接する場合には、門に入らざるに賊賊を勘すといつたやうに、その眼力に一點の曇りなきことをいふたのだ。大中の天子、曾て輕觸し、三度親しく爪牙を弄するに會ふ。これは黄檗の經歷の一つをいうて來た。大中とは唐の宣宗皇帝の年號だ、宣宗皇帝は事情あつて國を甥に譲り自らは民間に下り臣下の周旋に依つて僧となり名をかくして鹽官齊安國師の會下に修行して居られた其時に黄檗も同安居で、而も黄檗と坐禪の場所が隣合つて居つたのだ。或日黄檗が一心に、御拜をして居るのを見た宣宗は、維摩經の意を楯にして、佛について求めず、法について求めず、僧について求めず、禮拜を用ゐて什麼かせんと問ふた、處が黄檗は、佛について求めず、法について求めず、僧について求めず、禮拜することたゞ是の如しと云つて、宣宗をばり、とばした。處が宣宗は、太龜生、打ぐるとは龜暴なことだと云つたら、黄檗は、這裏これ什麼の所在ぞ、細と説き粗と説く、佛法に龜も細もあるかいと云つて又ビシヤリとたゞいたことがある、時運が來て愈々帝位に即いてから黄檗に特に龜行沙門といふ號を賜つたといふ。後臣下の奏上に依つて改めて斷

際禪師と賜はり、大變帝の歸依を受け、帝も又その指導に依り武帝の廢した佛法を再興されたといふことである。今は此故事を用ゐ、二度、たゞいたのを雪竇が勢を添えて、三度と云ふたのだと云ふてもあるが、又或る本には三度だと出ても居る。要するに二度でも三度でもよい、それを茲に出したのだ。輕觸しとは、輕々しく問ひかけたといふことだ。大中天子が昔日雲水時代に黄檗に一寸問うたところが、三度親しく爪牙を弄するに會ふ。龍蛇といふところから爪牙と用ゐた、三度たゞかれたことをいふたのだ。どの方面から見ても黄檗禪師は實に豪い、佛法舉揚の上には僅も人情已見を混えず、直に第一義を提起して、人をして轉迷開悟せしめねば止まぬといふ様子がある、この頌は徹頭徹尾黄檗を賞め通したのである。

### 第十二則 洞山麻三斤

【垂示】垂示云。殺人刀活人劍。乃上古之風規、亦今時之樞要。若論殺也不傷一毫。若論活也喪身失命。所以道向上一路。



千聖不傳。學者勞形如猿捉影。且道既是不傳爲什麼却有許多葛藤公案具眼者試舉看。

【讀方】垂示に云く殺人刀活人劍乃ち上古の風規亦今時の樞要なり。若し殺を論せば、一毫を傷らす。若し活を論せば、喪身失命。所以に道ふ向上の一路、千聖不傳。學者形を勞すること、猿の影を捉ふるが如し。且く道へ既に是れ不傳、什麼としてか却つて許多の葛藤公案がある。具眼の者は試に舉す看よ。

殺人刀活人劍、衲の寺の可睡齋には活人劍と云ふのが建て、ある、日清戦後佐藤進博士が李鴻章の傷を療治した時の由來を記念するために樹てたのだ。何でも人間は殺人活人の兩刀を提げて居なくてはいかぬ。殺と云つて、何も山田憲のやうに無暗に人を殺すことを云ふのではない。廣く云へば殺とは物を破壊すること。活とは物を建設すること。また狭く云へば殺は妄想分別の根源を截斷して行くことで、之を截斷すれば龍の水を得、虎の山に靠るが如く、自由自在の活動が出来。妄想的爲に廣い世間を狭くし、楽しい生涯を苦しい生涯にしてしまふ。彼の山田憲なども、

何れ死刑になるであらうが、實に妄想の爲に楽しい生涯を苦みの世界にしてしまつたものだ。其妄想を截斷して快達自在の作用を表はして來るのを活人劍と云つて、又之を死中得活の手段とも云ふのだ。だから殺人刀は活中の死を云ふのである。要するに人を教育指導して行くには、師家に限らず、教育家、軍人、政治家、苟も人の上に立つものは此殺活二劍の活用がなくてはならぬ。又前にも述べた把住放行と同じで、殺は把住のゆるさぬ方に當り、活は放行のゆるす方に當る。乃ち上古の風規。この二つは、従上古來昔しから佛祖方が使ひ來られた規則風儀である、けれども昔ばかりのことでない、亦今時の樞要だ。今日でもこの二つの手段は必要なことだ。さうして或る時は殺人刀と奪ひ、或時は活人劍と與へて、把放自在、殺活縦横にやつて行くところ、人に人を教化する實が擧る。若し殺を論せば、一毫も傷らす。若し活を論せば、喪身失命。之は一寸考へるとあべこべだ。若し殺を論せば喪身失命、活を論せば一毫も傷けずといへば常識でよく解るが、これは何の事かといふに、全體殺とか活とかいふが、二つあるではない、徹底殺の時活だ、徹底活の時殺だ、身を捨て、こそ浮ぶ瀬もあれ、命をすてた人でなければ、本當の活きた働きは出来ぬ、だから本當に活



きやうと思ふたら一度死んで來るといふ、死に切つた上の人であつたら名利に迷つたり命を惜しがつたりするやうなことはない、眞實國家社會のために働くやうな人は自己を投げ出してやつて居る、ところが死に切ることは容易でない、だから大抵な人は碌な活動も出來ずに間の田甫で目を暮すといつたやうな不徹底の生活を送つて了ふ、こゝの様子を、若し殺を論せば一毫を傷らず、若し活を論せば、喪身失命といふたのだから徹底した當體は活といふてもよければ、殺といふてもいいのだ。所以に道ふ、向上の一路千聖不傳、これはもと盤山寶積禪師のいはれた語で前の則でも述べたが、向上絶對の法門は千聖不傳で、能傳所傳に與からぬ、自知自悟だ、結局自分で合點するより外はない。ところが學者は自分の心に回光返照せず、文字や言句の詮鑿立てをして、様々の論をして、心を痛め形を勞すること、丁度猿の影を捉ふるが如し、猿が天上の月を忘れて水中の影を捉えんとするやうなものだ。全體、禪學を研究するといふ人の中にこの種類は澤山にある、雪峯がなんと云うた趙州が恁う示したなど、くつつ着き廻つて、公案の一つも透つて、禪者氣取りで喜んで妙なことをやつて居る人がある、影を捉えて喜んで居るやうなものだ、そんなこ

とでは向上の一路に徹底することは出來ぬ。且く道へ既に是れ不傳、不傳だといふなら文字葛藤や公案はなささうなものだ、然るに今日什麼としてか、却つて許多の葛藤公案がある、具眼の者は、試みに舉す。看よ、次の公案を看るがよい。

### 【本則】舉。僧問洞山、如何是佛。山云、麻三斤。

【讀方】舉す。僧洞山に問ふ、如何なるか。是れ佛。山云く、麻三斤。

こゝにいふ洞山といふは洞山良价禪師ではない。守初禪師といふ人で、雲門の法嗣だ、碧巖の作者の雪竇の祖父の弟に當る人で、支那に於けるえらい宗將だ、全體この頃には、如何なるか祖師西來意とか、如何なるか佛といふ問は學人の間によく發せられて居る、だから此の問に對する答も澤山ある、有名なのは雲門の答だ、雲門は「乾屎橛」と答へた、何か美しい事かと云ふにさうではない、乾屎橛とは、山家などへ行くと、へらで尻を拭く、夫に乾いた糞がついて居る、糞かき籠の乾ひたものだ、雲門はそれを佛だと云ふたのだが、理窟で考へたとて解りつこはない。今は雲門の御弟子の洞山守初禪師は茲で麻三斤と答へられた、こゝらのことを、文字や言葉について



何時まで考へても解る筈はない。何時もいふ通り文字は載道の器ではあつて、何も文字そのものが道ではない。唯だ道を傳ふる道具だ。だから文字や言葉について考へれば考へるほど解らなくなる。金剛經には「一切諸相を離るこれを諸佛と名く」とある。又「若し色を以て我を見、音聲を以て我を求めば是の人邪道を行す、如來を見ること能はず」とある。元來佛は一切の名相を離れたものだ。だから佛のことを非常相ともいふてある。この非常相の當體を洞山は無言語の處に言語を借りて、差し措かず「麻三斤」といふたまでのことだ。文字に用はない。宗意を會得することが肝腎だ。宗意を會するには、油斷なく修行の功を積まねばならぬ。前に出た「汝は是れ慧超」と云つた時に、慧超が忽然として悟つたといふが、然し之も今まで「ぼかん」として居つて其の時聞いただけで、其場で悟つたのではない。つまり慧超の永い間の油斷なき修行の力が其時に開發されたのだ。絶えず參究して行く内に成程と合點する時があるに相違ない。結局のところ向上の一路は千聖不傳だ。だから自分自らの參究努力にまつより致方はない。そこで。

「頌」頌云。金烏急。玉兔速。善應何曾有輕觸。展事投機見洞山。跛鼈盲龜入空谷。花簇々、錦簇々。南地竹兮北地木。因思長慶陸大夫。解道合笑不合哭。唳。

【讀方】頌に云く。金烏急に、玉兔速なり。善應何ぞ曾て輕觸あらん。事を展べ機に投じて洞山を見れば、跛鼈盲龜空谷に入る。花簇々錦簇々。南地の竹、北地の木、因つて思ふ長慶と陸大夫、道ふことを解す笑ふべし、哭すべからずと。唳。

金鳥とは日のこと、玉兔とは月のこと、つまり金鳥急に、玉兔速なりとは、ちつともすき間のない事を云ふたのだ。夜と晝とは少しのすき間もない、所謂光陰矢の如しで、光陰ほどすき間のないものはない。東坡の詩に「竹馬春風如昨日、不知何時雪滿頭」と云ふ句がある。或は大禹は寸陰を惜み、陶侃と云ふ人は分陰を惜んだとある。金鳥急玉兔速で麻三斤の様子を頌して居る。善應何ぞ曾て輕觸あらん。洞山のこの答話には誠に善く問に應じた。諱を犯さずして立派に佛を提示して居る。そこに佛臭いところも、悟りくさい處もない。この間に非常相の活きた佛が光明を放つて活躍して



居る。このところ、影の形に随ふが如く、響の聲に應ずるが如く、叩けば響く、大きくたゞけば大きくひびき、小さくたゞけば小さくひびく、僧の間に對して寸分の隙がない。事を展べ機に投じて、洞山を見れば、事を展べ機に投ずると云ふは、守初禪師が、かういう事を云はれた。言無展事、語不投機、承言者喪、滯句者迷と、これから出たので、展事投機は言語のことだ、言語の末について、洞山の眞意を見やうとしたら、何時までたつても見て取ることは出来ぬ。そこを譬へて、跛盲龜、盲龜空谷に入る。と云つたので、ちんばの龜や、めくらの龜が、空谷即ち、何んにもない谷底に這入つたやうで、まるきり何が何だか見當がつかなくなる。そこで雪竇が腕頭の力を振つて、麻三斤の眞意を示して、花簇々、錦簇々、南地の竹北地の木といふた。之は或僧が雪竇の師匠の智門と云ふ人に、洞山麻三斤の意旨如何と問ふたら、花簇々、錦簇々と答へた、それから、解つたか」と更に問ふたら、僧は「解らぬ」と云ふたから、又、南地の竹北地の木と云ふた、雪竇は師匠の答話をすつかり、こゝへ用ゐたのだ、さあこれが一切諸相を離れた眞實の佛だ。花簇々、春になれば百花媚妍、錦簇々、秋になれば千山紅葉、實に佛臭いところもない、眞實の佛だ、これ麻三斤としたものか、佛としたものか、これでまだ解らぬと

ならば、南地の竹北地の木だ、雪竇は迷悟生佛の邊際も離れた、脱體の眞佛を呈露したのだ。然るに猿の月影を捉ふるやうに、麻三斤の文字にくつついて佛を知らうなどとは可笑しなことだ、可笑しうてたまらぬといふを因つて思ふ。長慶陸大夫、道ふことを解す、笑ふべし、哭すべからず。と故事をもつて來た。陸亘と云ふ人が、支那で大夫の役をして居つた。此人は在家の人ながらも、南泉に參じて佛法を會得した、ところが南泉が死んだ時、陸亘は悔みに行つて、ワハハと笑つた、すると院主が之を見てお前は師匠の悔みに來て笑ふなどとは何事だと怒つたら、陸亘は、道ひ得ば哭せん」と云つた、けれども院主は黙つて了つた。その時、陸亘は、蒼天蒼天、先師世を去ること遠し」と云つて、慟哭した、今死んだばかりの人に、ごつくの昔世を去られたと、之は南泉の知音少なきことを憂ひた意味合がある、それを法の上で雪竇の叔父に當る長慶と云ふ人が聞いて、笑ふべし、哭すべからず」と評した、今は故事を茲に引いて來たまでの事で、こゝに入用なのは、唯だ、笑ふべし」と云ふ事だ。若し洞山の言葉について、洞山の本意を知らんと思つたら、笑ふべしだ。大夫と南泉の死んだ、悔んだ話などは用はない、唯だ、笑ふべし」と云ふに用事がある。従つて哭すべからずには何の用



事はない譯だ。えらい、ごてくした。今日は先づ此位にして置ませう。

第十三則 巴陵銀碗裏（大正八年七月二十一日 於三菱本社第二會議室）

【垂示】垂示云。雲凝大野、徧界不藏。雪覆蘆花、難分朕迹。冷處冷如冰雪。細處細如米末。深々處佛眼難窺。密々處魔外莫測。舉一明三、即且止。坐斷天下人舌頭。作麼生道。且道是什麼人分上事。試舉看。

【續方】垂示に云く。雲大野に凝つて徧界藏さず。雪蘆花を覆うて、朕迹を分ち難し。冷處は氷雪よりも冷かに、細處は米末よりも細かなり。深深たる處佛眼も窺ひ難く、密密たる處魔外も測ること莫し。舉一明三は即ち且く止く、天下人の舌頭を坐斷して、作麼生か道はん。且らく道へ、是れ什麼人の分上の事ぞ。試に舉す看よ。

此頃は食糧問題が大分八釜しい、どの新聞でも雜穀を混せて喰べて、米を喰ひのばししたがよいと論じて居る。衲は此間僧祇律と云ふ本を見たが、其中に粥に十通

りの利益があると書いてある。其十通りの利益と云ふは御粥を喫ふと。第一血色が良くなる。第二身心の安樂を保つ。第三氣力を増す。第四壽命が延びる。第五音聲が朗かになる。第六咽喉を潤はす。第七飢渴を防ぐ。第八胃腸を暖めて惡氣を除く。第九宿食が停滯する事がない。第十便通が善くなる。とある。粥には十種の利益があると書いてある。一體禪宗では朝と晩と二度ともお粥を喫べる事になつて居る。而して朝の喫粥の時に、此十通りの利益の文句を唱へて喫るのが定例になつて居る。此頃僧祇律を讀んで、圖らずも此句を見て、食糧問題の八釜しい今日まことに有難い教だと思つたから茲に諸君に紹介する譯だ。成程粥を喫ふと氣力を増すと云ふ事なども事實かも知れぬ。衲が嘗て島田在の天徳寺に居て普請した折に、一本の大きな材木を二十人程の大工がかゝつてなかく動かぬ、それを衲の寺の御粥ばかりたべて居る雲水が二十人ばかりでかついで持つていつた。其時大工の云ひぐさが面白い。成程お粥腹は強いと云つた、これで見ても氣力を増すと云ふは本當だと思ふ。そこで今日の食糧問題でも、馬鈴薯などを喰べるよりも、どの家でも朝なり晩なり一度お粥を喰べるやうにしたらば米の經濟にもなり、身體の爲にもよく、大變結構



なことだと思ふ。尙今一つ近頃八釜しい勞働問題に就ても、道元禪師の三心と云ふことが大變必要だと思ふ。それは第一喜心。第二老心。第三大心。この三つであるが、此話は他日に譲るとして碧巖の話に移ることにする。

雲。大野に凝つて。徧界藏さず。此垂示は四段になつて居る。大野と云ふは文字の通りで、雲が大いなる野原一ぱいを蓋ふて、丁度入梅とき見たやうに大空一面隙間もなく雲がかゝつて居る事を云ふたので、之はつまり盡天地の事を大野に譬へ、所謂法性、又は靈妙不思議の本性とも云ふか、それを雲に譬へて、盡天盡地此法性ですきまもなく充分満ちて居ることを云ふたのだ。此法性は諸君も皆持つて居る、佛法から云ふと、苟くも世界に充滿して居る人畜家屋、山川草木一として法性の顯はれでないものはない、丁度雲が大野を蓋ふて居るやうに、どこまで行つてもすきまなく、どこまで行つても邊際はない、皆法性其ものゝ顯はれである。次に雪。蘆花を覆ふて。朕迹を分ち難し。で、蘆の花は白い、それを雪が覆ふて居る、白いものと白いものが一所になつて居る、白皚々の銀世界より外になにもものはない、それを佛法では一色邊と云ふてある。朕迹を分ち難しと云ふは、白より外に何の蹤跡は無い、之れは何か

と云ふと、即ち生佛不二の當體を云ふ、生とは衆生の事を云ふが、此衆生と云ふが面白い。人間ばかりでない、もうくゝの縁に依つて、種々の原素が集まつて生まれて居るものを一切衆生と云ふ、其衆生と佛とは一つであつて二つでない。迷へば衆生、悟れば佛であるが、此二つは誠に一色邊で、水と氷のやうなものだと云ふ意味である。之は暗に本則の「銀椀裏に雪を盛る」と云ふ處をひかしてある。詳しいことは本則の方で話すことにする。こゝ迄が一段。次が二段で、冷處は冰雪よりも冷かに何が一番冷たいかと云は、先づ氷と雪だ、ところが其氷や雪よりも冷たいものがある。それは何か、即ち法性のことだ、なせかと云ふと、法性は冷暖の相對を超越して居る、そこで冰雪よりも冷たい譯だ。次に細處は米末より細かなり。細いもの小さいもの、云つたら米を碾いて絹篩にかけたら、是より細いものはあるまい、ところがまだそれより細かなものがある、それは即ち法性だ。これは細かな方から見て云ふたのだが、何も細かいばかりの事でない、今大きい方から見ても同じだ、つまり法性とか靈性とか云ふのは、大小廣狹を超越して居るからどんな細い所にもどんな大い處にも行き涉つて居る。だから石頭大師は、大絶方處、細入無間と云はれた。この法性は遠



方の話とばかり聞かぬがい、諸君名々に皆持つて居るのだ。所謂是れを展ぶれば六合に彌り、此を捲けば密にも藏るのだ。深々たる處佛眼も窺ひ難く、深々とは深い深い底も知れない深さのこと。然し深いと云つても世間の海には底がある、法性の海には底がない。古人も佛法の大海は漸く入れば漸く深しと云ふてある。かく底がない、だから佛の慧眼を以ても窺ひ難しと云ふてある。此深々たる處と云ふは前の冷處は氷雪より云々に響いて居る、密々たる處、魔外も測りがたし。密々たる處と云ふは、細處は米末云々に應じて居る。密々と云ふは、密室風を通せずと云ふてある如く、少しのすきまもなく眞つ暗な處。魔外の魔は第六天の魔王、外は外道のこと、外道と云ふは印度で佛法以外の道を學ぶ者を云ふ、別に輕しめて云つたのではない。其天魔外道の力でも、測り知ることの出来ない、即ち法性は深淺明暗などの相對を超越して居るから能所分別の知慧や眼力では窺ひ知ることが出来ない。此は出来ぬのである。こゝ迄が二段、次は第三段で、舉一明三は即ち且く止く。是は第一則にあるすばやい人の事を云ふた、茲には一隅を舉ぐれば他の三隅を知るといふのであるが、一を聞いて十を知ると云ふこともある。それは餘程俊利なる漢のことを云ふたので、そんな俊

利の連中でも、即ち且く止くで、佛や外道でさへ解らぬ事がわかる筈がない、故にしばらく置いて、さて天下人の舌頭を坐斷して作廢生か道はん、なんとも説明の出来ぬところを自由に道抜いて、而して天下の人に、うの音も出させぬといふ、それは畢竟説くに説かれぬ一色邊の境界の事を云ふ、此境界ばかりは説く事は出来ぬ、其説くことの出来ない處を説いて見ねばならぬ、何とか口をあかせねばなるまい、そこが作廢生か道はん、こゝまでが三段だ。且く道へ、これ什麼人の分上の事ぞ、全體此説く事の出来ない處を自由に説いて天下人の舌頭を坐斷するなど、は、怎んな作略であるか、誰が斯様な機用を現すことを得るか、試みに舉す看よ、本則に巴陵の話がある。しつかり参じてみるがいい。

【本則】舉僧問巴陵、如何是提婆宗。巴陵云、銀椀裏盛雪。

【續方】舉僧巴陵に問ふ、如何なるか。是れ提婆宗。巴陵云く、銀椀裏に雪を盛る。

巴陵和尚は、本名は顯鑒と云ふ人で、岳州巴陵縣の新開院に居て宗風を舉揚したところから人が巴陵和尚と呼ぶやうになつた。大變辯舌の巧妙な人で、時の人が鑒



多口と緯名を命じた位であつた。雲門の弟子で、其法を嗣ぐ時に、有名な三轉語を、雲門に呈したと云つてある。其三轉語と云ふは、一は、如何なるか是れ道、明眼の人井に落つ、二は、如何なるか是れ吹毛の劍、珊瑚枝々月を撐着す、三は即ち此本則の、如何なるかこれ提婆宗、銀椀裏に雪を盛る。

此三つである、つまり本則は三轉語中の一つを採用したものだ。そこで、この中の提婆と云ふは、印度の迦那提婆と云ふ人のことだ。此人は本來外道に屬する人であつたが、後に印度第十四代の祖、龍樹大士に説伏せられ遂にその弟子となり、大法を嗣續して第十五代の祖師となられた。この龍樹といふ人は八宗の祖師といはれて居る人で、印度で佛教界の大人物であつたが、元はやはり外道であつた。それが第十三代の祖馬鳴大士の弟子となり、得法して第十四代の祖師となられた。この伽那提婆もやはりもと外道であつた。龍樹が鉢の中に水を一杯盛つて出した處が提婆が其中に針を一本入れた。そこで龍樹が深く是れを器として佛心宗を傳へ十五祖となられた。馬祖曰く、楞伽經は佛語心を以て宗となし無門を法門となす、又曰く、凡そ言句ある是れ提婆宗なりと、彼の馬鳴、龍樹の二人は、よく世間に大乘佛教の祖と云

ふておるが、それは間違つておる。大乘の教は佛教の始めからある。小乗教の中にも大乘の意は含んである。自然に印度の時勢が進んで大乘でなければうけがはぬやうになつたから、自然と馬鳴、龍樹などが唱へ出したので、決して此二人から始まつたのではない。それまでは原始佛教である。重に小乗ではあるが、其中にちやんと大乘の教が説いてある。それがこの馬鳴、龍樹時代になつて始めて表はれて來たまでだ。大乘非佛説などは間違ひである。

そこで今此迦那提婆と云ふ人は辯舌の達者な人で、印度では外道と議論をするには、勅命を受けて鐘をたゝいて大勢の人を集めてやる。而して勝つた方は赤幡を押立て表門から出で、負けた方は袈裟を倒さに搭けて裏門から出て行く事になつておる。迦那提婆は外道と議論をして勝つたところが、外道が首を斬つて謝せんとしたのを、提婆がそれには及ばぬ、其代りに皆頭を扇揚して佛門に入れと云つたと云ふ。歸佛の後縦横無礙の辯舌を振つて盛んに宗風を扇揚したから、提婆の勢力が一時に盛んになつた。時の人が提婆宗と呼んだのである。而して、凡そ言句ある者は皆提婆宗と云ふに至つた。そこで、僧巴陵に問ふ、如何なるか是れ提婆宗。此僧が巴陵に



問ふたのはどういふ積りで問ふたのか、之は外道と佛法の兩法に提婆宗があるから兩天秤にかけて、王手飛車手と來た。同じ提婆宗でも、佛法の提婆宗は言句があつて言句にしばられぬ、外道の提婆宗はさうではない、此僧は茲の處を兩天秤にかけて、若し巴陵が佛法の提婆宗で答へたら外道の提婆宗を聞いたのだと出やう、若し外道の提婆宗で答へたら佛法の提婆宗と云はうと云ふ考だつたらしい。ところが巴陵の方ではそんな區別しては云はぬ。巴陵云く、銀碗裏に雪を盛ると、この答話は講釋の出來ない處だ。垂示に云ふた、天下人の舌頭を坐斷す」とあるはこゝの事だ、外の人では答が來ぬ、巴陵だから答へた、こゝの様子は無舌人の解語である。銀碗裏に雪を盛ると、この答が大變好い。銀碗とは銀のうつはで白い、雪も白い、白いものに白いものを盛つてある、即ち先きに云ふた一色邊の事を云ふたので、佛法は此五字に盡きて居ると云ふてもよい、或は、類而不齊、混則知處と云ふ句があるが、丁度こゝの處だ、類すると云ふ上から見れば世界の物は皆類して居る、即ち一つの佛性が皆森羅萬象色々に顯はれて居る、其の現はれたる千差萬別が皆佛性の同類だ、けれども齊しくないといふ上から見れば皆等しくは無い。山は山、川は川、松は松、竹は竹だ、例

へば佛法で云ふ處の十界でも、佛界、菩薩界、緣覺界、聲聞界、天上界、人間界、修羅界、畜生界、餓鬼界、地獄界の十界の區別はあるが、皆一佛性の顯はれである、同様に皆別々だ。混すれば則ち處を知ると云ふはこゝの事だ、銀碗裏の雪も類する上から見れば、どちらも白いが、混する時は處を知るで、銀碗は銀碗、雪は雪、雪の中に鹽をふりまいたとて、同じ白いもので區別はないが、而し鹽と雪とは違つて居る。或はこゝの處を回互、不回互とも説く事が出來る。回互と云ふは、今茲に衲が話す、諸君が聞く、衲ばかり獨りで話して居ても聞き手がなければ狂人としか見えぬ、反對に話をする衲が居なくて、諸君ばかり靜かに坐つて居てもおかしいものだ、こゝは話す人と聞く人が回互しなくてはならぬ、つまり話す人と聞く人が心が一枚になつて居らねばならぬ。而し又別と云ふ方面から見れば、話す人と聞く人が全く別だ、これが不回互の方である。海軍も陸軍も其道理で、海軍は海を守る軍人、陸軍は陸を守る軍人、何れも軍人として國を守る心は元より同一である、しかし海軍は海軍、陸軍は陸軍、自づから別である。又上御一人と國民とは、是亦不回互にして回互でなくてはならぬ、會社の社長と使用人の場合も亦同様で、各自名々の獨立の仕事を以て働いて行



くと同時に、社長と使用人とが一團となつて會社の發展を計らねばならぬ。其回互にも落ちず不回互にも落ちない處を圓收と云ふのである。世間は兎角此圓收でなければならぬ。銀椀裏に雪を盛ると云つたのは、つまりこのことで、即ち先きにも云つたやうに生佛不二であるけれども迷へば衆生となり、悟れば佛となる、生佛不二一色の處は、差別中に無差別あり、無差別中に差別がある。外道の提婆宗ともせず佛法の提婆宗ともせず、何れともつかず、差別にも無差別にも落ちず、一切を超越した答である。

「頌」頌云。老新開、端的別。解道銀椀裏盛雪。九十六箇應自知。不知却問天邊月。提婆宗。提婆宗。赤旛之下起清風。

【續方】頌に云く。老新開、端的別なり、道ふことを解す銀椀裏に雪を盛ると。九十六箇應に自知すべし。知らずんば却つて天邊の月に問へ。提婆宗、提婆宗、赤旛の下清風起る。

老新開、老は尊んで云ふ、修行が積んで境界の熟した人に對する尊稱だ、新開は巴

陵の新開院のことで、その住所を舉げて今日巴陵和尚のことをいふのだ。端的は眞つ、星と云ふことで端的別なりと云ふは、世の中に善知識も多いが、巴陵の佛法の擧揚振りは又格別だ、銀椀裏に雪を盛ると、佛法の眞つ星にピタツと言ひ當てゝ居る其何とも説明の付かぬ處を自由に説破されたところは流石は巴陵獨特の手腕のある處だと大變ほめた。全體禪を究めやうとする人は斯ういふ處をしつかり承知して置かぬばならぬ。前にもいうた通り、銀と雪とは白と白で同じだ、しかし銀の白と雪の白とはどこまでも別だ。佛法には差別を離れた無差別はない、無差別を離れた差別はない。所謂差別の上の無差別、無差別の上の差別で、此差別と無差別が別々に離れては、それは本當の差別でもなく、本當の平等でもない、それは惡差別だ、又は惡平等といふものだ、全體差別と平等とが離れては世の中は立て行かぬ、差別あつての無差別、無差別あつての差別で、つまり差別も無差別も一つものだと云ふ處をしつかりと合點して貰ひたい。今日の思想問題の如きも、こゝの處の合點がいつたら何も騒ぐ事はない。天皇は天皇、人民は人民、自づから上下の差別はなければならぬ、然しながら平等の上の差別である、誤て惡平等や惡差別に落ちてはならぬ。資



本家と勞働者も、自づから差別はなければならぬ、然し又協調の處もなければならぬ、夫を兎角惡差別してかゝるから騒ぎとなる。又惡平等にしたがるから事が面倒になつて來る。つまり、銀椀裏に雪を盛るの五字で、端的を言ひ盡して居る處が誠に好い。道ふ事を解す、銀椀裏に雪を盛ると云ふは、流石によく説いて居る。こゝ迄は巴陵の答のよい事を大さう賞讃した言葉だ、之から提婆宗の古事に移つて九十六箇應に自知すべし、印度に九十五種の外道がある、それに佛道を加へて九十六種となる。何でも法は根本の處へ行くと能傳所傳の沙汰には與からぬ、議論や理窟では眞實に合點はできぬ。成程と自分で會得するでなければならぬ、所謂自知自得すべきだ、水の冷暖は自ら飲んで自知するより致方はない、それを他に向つて議論をしたり他に説明を求めたりするのは本當は頓だ見當違ひである。そこを九十六箇自知すべしといふ、九十六箇に用はない自知が大切だ、何でも法は自知でなければならぬ、門より入るものは家珍に非ずで、自知するところに眞實に法が我物になるのである。之は昔外道の人達が、迦那提婆に議論をしかけて、負けて王城の裏門からこそこそと引上げた事を假りて法の自知を示したのだ。知らずんば却つて天邊の月に問

へ、そこで若し自知しやうとしても解らぬならば、天邊の月に問ふがよい、果して天邊の月が何と答へるであらうか、月が答へなかつたら自知するより外はない、こゝで提婆宗、提婆宗と二度も云つたのは、提婆宗が議論に勝つて盛んになつたのを讃めて云ふた。赤旛の下清風起る、迦那提婆が議論に勝つて、赤旛を押し立て、王城の正門から出た勢の盛なところ、其赤旛の下より清風起り、提婆宗が盛んになるのは、つまり佛教が盛んになつたと云ふのである。

### 第十四則 雲門對一說

【本則】舉。僧問雲門、如何是一代時教。雲門云、對一說。

【讀方】舉。僧雲門に問ふ。如何なるか。是れ一代時教。雲門云く、對一說。

此則には垂示が無い直に本則になつて居る。雲門は雲門宗の祖師で宗風舉揚の上にも獨特の家風があることは既に前に述べて居る。僧雲門に問ふ。此の僧もなかなかえらい、如何なるか。是れ一代時教と釋尊四十九年の説法を一口に問ふて來た。釋尊は七十九年の在世中に、成道後四十九年間三百六十餘會の説法をせられた。之



を一代時教と云ふ。時教と云ふを具さに云うと、五時八教と云ふ面倒な事になる。大體を云へば、五時には天台宗と華嚴宗の二つの説がある。華嚴宗では、釋尊一代の説法を、時の上から分けて、小教、始教、終教、頓教、圓教の五時に分けて居る。天台宗では華嚴、阿含、方等、般若、法華、涅槃の五時に分けて居る。又八教と云ふは天台宗の所立で、釋尊一代の説法を意味の上から、藏、通、別、圓、頓、漸、祕密、不定の八教に分けて居る。之に就いて一々説明すると面倒な事になる。今は時間が許さぬ。要するに釋尊一代の説法のことではなか／＼大變なごとき、今はそれを一口に問ふて來たのだからこの僧なか／＼豪い。この種の問ひ方を宗門では古來驗、主問と云ふて居る。聊か師家を試みんとする問だ。却々油斷のならぬ問方さ、ところが雲門の答は又格別だ、外の人ならやれ天台では怎うの、華嚴では怎うのと云ふて笑はれる處だが、雲門云く、雲門はいきなりに對一説の三字で答へた。先方が一口で問うて來たから、雲門も一口でピタツと答へて居る。並大抵の人の出來ることではない、ところでこの答話に付ては古人も色々の説をなして居る。對一説は、一時機宜に對して説いた、臨機の一説だと説く、即ち對一説といふ人もある。なるほどそれでもよい。或は又、森羅萬象一法所印と

も云ふてある。それは世界中の形のあるもの皆一法の所印である、それだから對一の説だと云ふ、之も一理ある。けれども古來雲門には一句に三句を含むと云はれて居る。三句とは函蓋乾坤の句、截斷衆流の句、隨波逐浪の句である。函蓋乾坤の句と云ふは、函ははこで、蓋はふた、函蓋が乾坤で一杯になつて、チツトもすきまのないことで、つまり一佛性と云ふこと。衆流とは煩惱の事で、截斷する」と云ふは、其煩惱の根源をたちきると云ふことだ。隨波逐浪と云ふは、其機に隨つて法を説くと云ふことで、丁度觀音が三十三身を現じて法を説くやうなもの、つまり雲門の對一説には此三句の意味を含んで居るのである。函蓋乾坤の働きもあれば、煩惱の根源を截斷する殺人刀の働きもある、又機に應じて自由に説く隨波逐浪の働きもある。これらの三つの意味を含んで居るので、全體こゝらはいくら講釋して見たところで雲門の心を會得せんければ解るものではない、雲門はこの一言で以つて十方を言ひ盡して居る。要するに説明では解らぬ、次の頌に付て見るがいい。

〔頌〕頌云。對一説。太孤絕。無孔鐵鎚重下楔。閻浮樹下笑呵



呵。昨夜驪龍拗角折。別々。韶陽老人得一概。

【續方】頌に云く。對一說。太だ孤絶。無孔の鐵鏈重ねて楔を下す。閻浮樹下笑呵呵。昨夜驪龍角を拗折す。別別。韶陽老人一概を得たり。

對一說。太だ孤絶と云ふは、對一說と云ふ答は、僅か三字だが、丁度富士の山が獨立して居るやうに、他に比べものがない、之を仰げば愈よ高く之を鑽れば彌よ堅しと云ふやうに、雲門答話の端的をいたくほめたのだ。無孔の鐵鏈重て概を下すと云ふは、孔のない、すきまもない堅い鐵鏈と云つて、之は問ふて來た僧が如何なるか是れ一代時教と問ふ處は實に無孔の鐵鏈の如く隙きがない、つまり、何とも手のつけやうの無い鐵鏈にして、其の鐵槌に隙きのない處に向かつて對一說と云ふて問ふて來る處の空處を見て一概を打ちこんだ。閻浮樹下笑呵呵。閻浮樹の閻浮は、閻浮洲と云つて國の名になつて居るが、大きな樹の事を閻浮樹と云つたので、其の樹の下で見るとおかしくてたまらぬ、なせかとなれば、昨夜驪龍角を拗折す、で、ゆうべ、驪龍と云ふ立派な龍が角を折つて了つた誠、に牛に角の無いのは茶飯に鹽を忘れたやう

なもので、おかしなもの、之は折角の豪い問ひも、雲門の對一說の三字の答へで、丁度驪龍の角を折られたやうだ、誠におかしくてたまらぬ、だから、笑呵呵と云ふた。別々。一代時教などえらい、問を持込んで來たのを、僅か三字で遺憾なく答へ盡したのは、之は又格別の手段ぞ、尋常人の及ぶ處でない、格別なるを強くほめた。韶陽老人。一概を得たり。韶陽老人と云ふは、雲門の寺が韶州にあつて、而も韶州は支那の嶺南地方にあるから韶陽老人と云ふた、雲門をあがめた言葉だ。一概を得たりで、雪竇、雲門を半分抑えたところもある、さて一本の概は雲門が入れたが、今一本残つて居る、その一本を誰が打ち込むか、之は雲門をほめながら、自から雪竇自分の事を云ふて居る、外にはあるまい、おれだらうと云ふやうな風にも見える。けれども又その概を諸人も打込みたかつたら雪竇決して妨げはせぬぞといふ按配もある。

第十五則 雲門倒一說 (於大正八年九月十二日 於三葉本社第二會議室)

【垂示】垂示云。殺人刀活人劍。乃上古之風規、是今時之樞要。且道、如今那箇是殺人刀、活人劍。試舉看。



【續方】垂示に云く。殺人刀。活人劍。乃ち上古の風規。是れ今時の樞要なり。且く道へ、如今那箇か。是れ殺人刀。活人劍。試みに擧す看よ。

此垂示は前の十二則の處に出でおる、それを半分切つてこゝに出したのである、これは閑悟禪師がわざと出されたのか、または後世の人が誤つて出したのである、か分らぬ、何れにせよ茲に垂示としてあるから重複ながら話すことにします、殺人刀。活人劍。世間の事は、何でも殺人刀ばかりではいかぬ、活人劍もなければならぬ、同じ一言一句でも其の時に應じ其の處に隨ひ、又は其の人に依つて或は活す働きもなくてはならぬ、或は又殺す働きもなくてはならぬ、殺すと云つても何も生きた命を奪ると云ふ事ではない、禪家の言葉に「佛に逢ふては佛を殺し祖に逢ふては祖を殺す」と云ふがある、それは佛に逢ふて佛を殺して向ふに佛を立てず、又祖に逢ふて祖を殺すと云ふのも向ふに祖を立てず、佛祖と相逢ふて至極親しくなることを殺すと云ふ、我と佛、我と祖とが一體無二となることを云ふので、例へば知音と知音とが心と心と全く合體して、恰も水と水と合し、空と空と合するが如く極々親しくなる事である。我と佛と我と祖と密室風を通せざる至極親密なる處を殺すとは云ふ

たのである、佛に逢ふて佛を殺す人なれば自然に向ふの佛や祖師を尊敬するやうになる、どうかすると佛に逢ふて佛を殺すなど聞くと、佛と我と一つなら別に向ふに佛を祭る必要もないではないかなどと云ふ人があるかも知れぬ、一體同心になると向ふの木像も位牌も、皆我心のあらはれたものに外ならぬ、だから決して粗末にしてはならぬ、そこに禮拜とか、信心とか云ふことの深い意味があるのである、斯く佛と我と親しくなつた時の事を禪で佛に逢ふて佛を殺すと云ふたので、さてここらは無心の境界の事を云ふのだが、宗門では此無心の境界に止ることを忌むので、無心の處に足を留めず、そこから更に進一歩して差別界に出で、自由自在に働くでなくてはならぬ、そこが所謂活人劍の働きのある譯だ、全體お釋迦様も一國の王子に生れて來ながら妻子眷屬を棄て、世間とかけはなれて深く山林に隠れ、そこで本心を悟つて再び差別界に出て衆生を濟度なされた、そこが無心から出て活人劍となつた境界だ、何でも世間を救ふには、一度世間を離れた者でなくてはならぬ、世間の中に居つては世間御同様だ、一度大死一番、妄想分別を斷ち截つて來ぬと本當の濟度は出來るものでない、そこが活人劍だ、昔から英雄豪傑といはれるやうな



人物は、勿論今日とても世の中に立つて自由自在の働きをなして居るやうな人は、乃ち皆一度死んだ人だ、生死の間をくわつて来た人でなくは本當の働きは出来ぬ。上古の風規、是れ今時の樞要なり、其の時と場合に應じて殺人活人の兩刀を使ひ分けて行くのは容易なことでない、此の間、國民新聞を見ると、近頃大和繪が大變流行して来たさうで、其大和繪の名人の眞虎先生の事が載せてあつた、此人は名古屋の人で、或日菓子屋町を歩いて居ると一軒の菓子屋で夫婦喧嘩があつてそれを近處の大勢がたかつて見て居る、殺すの「死んでしまへ」といふて騒いで居る、そこで眞虎先生はズツと内にはいつて、いきなり店に並べてある菓子箱をかゝへ出して、そこに集まつて居る大勢へ撒きちらした、すると今迄夢中に喧嘩をして居つた夫婦は驚いて、大事の店の菓子を何で撒きちらすと、えらい權幕で菓子箱を取戻しに來た。そこで眞虎先生は、夫婦に向ひお前達は「殺すの」「死ぬるの」と騒いで居るではないか、この菓子を大勢の人に撒いてやつたら供養にもならうと思ふてお前達の事を思ふてやつたのだと云つたら、夫婦とも理に伏して喧嘩を止めた。そこで先生は繪を一枚出して「和合の繪」と名づけて之を夫婦に與へ、そこで喧嘩も無事に治まつ

たと書いてある。却々面白い話だ。こゝらが殺人刀活人劍の使ひ分けでせう、始め菓子を持出した處は殺人刀で、それから仕舞に繪を與へて夫婦喧嘩を止めさせた處が活人劍だ。まだ外の逸話も出て居たが、此眞虎先生は餘程才氣の富んだ人だつたと見える。獅子が子を育てるに千仞の谷底に子を落す、落された子獅子の中で、所謂獅子鬪擲の勢で親獅子の處に再び飛びかゝつて來る、すると親獅子は其子獅子の姿を撰んで育てるといふことである、獅子はちやんと殺人刀活人劍の使ひ分けを知つて居る、昔の佛祖がたは皆此殺人刀活人劍の使ひ分けを風規として行つて來た、否之は獨り上古の事ばかりでない、今日とても誠に必要だ、官廳や會社で大勢の人を使ふにも、學校教育の上にも、又個人の家庭でも必要缺くべからざることである。こゝに樞要あるは家の出入口や、しめくゝりの大事の場所の事と云ふ。且く道へ如今那箇か是れ殺人刀活人劍、その殺人刀活人劍の使ひ分けを試みに擧す、看よ、本則を看れば分る。

【本則】擧。僧問雲門、不是目前機、亦非目前事、時如何。門云、倒



一説。

【讀方】擧す。僧雲門に問ふ。是れ目前の機にあらず、亦目前の事に非ざる時如何。門云く倒一説。

此僧は第十四則の處に、如何か是れ一代時教と云門に問ふたあの僧と同人と見える。是れ目前の機にあらず、亦目前の事に非ざる時如何。機と云ふは能縁と云つて自分達の心の働き、事と云ふは所縁と云つて自分達の心の向ふに現在目前に顯はれて居る物柄、例へば山川草木の如き自分の目の前にあつて心にうつるものは皆事である、それを見て心に感ずる其心の働きを機と云ふのである。此問は誠に根性の悪い問である、凡そ天地間のこと皆目前の機か目前の事でないものはない、それをこの機事の二つを離れて問ふて来た、天地萬物を離れて来た、即ち能所の二見を離れ、迷悟の二つを離れて来た、此種の問を古人が藏鋒問と云つて、鋒先を藏して問ふて来た、この問の中に雲門を試みんとする賊心がある、却々尋常一様の僧ではない。ところが雲門は流石に老賊だ、雲門は此僧の五臟六腑を明鏡にかけて見る様に

いつくに看破して居る。だから倒一説としつかり答をして居る。之はよく解るやうに云つたら顛倒とでも云ふか、全體目前の機にあらず、亦目前の事に非ざる時など問ふて来るのは顛倒だ、元來、法の本體には迷悟もなければ、能所もない、然るを殊更にそれを二つに分けて問ふて来るのが可笑しい、其問が既に顛倒である、此問ばかりでない、廣く云へば釋尊四十九年の說法皆顛倒だ、皆迷悟の二つを離れぬ說法ではないか。雲門は此意味で答へた。佛教では「常樂我淨の四顛倒」と云ふがある。此世は無常のものである、それを樂と云ふは顛倒だ。此世は無我を法とする、それを我と執するのは界である、それを樂と云ふは顛倒だ。此世は無我を法とする、それを我と執するのは顛倒だ。此身は不淨である、お經にも三十六物皆不淨と云ふてある、それを清淨だと考へて居るのは矢張り顛倒だ。だから四顛倒と云ふてある。ところがそれを又反對に引つくり返して、世の中は無常ではない、常住だ、去年も今年も柳は緑、花は紅、何一つとして無常のものはないとも云へる。又世の中は決して苦の世界ではない、所謂「心頭を滅却すれば火も亦涼しで、精神の持ちやう一つで樂な世界ともなる、何も世界が苦に出來て居るのではない、皆自分が苦にして居るのだ。又此世は別に無我と



きまつたものでもない、我にも大我真我と云ふもある。又世の中は必ずしも不淨でない、よく佛の戒法を守れば、身心がそつくり戒法になつたなら、これ程清淨なものがありますまい。斯う云へば又元の常樂我淨となるが、要するにどちらでもよい顛倒にもなれば不顛倒にもなる、よく法を合點して見れば解る、雲門は何と云つて問ふて來ても既に言葉に顯はして來たものは皆顛倒の一説だと、問や答の上を離れて説いて居る、雲門でなくては斯く單簡な一語で斯くも隙間のない答をする。こゝは出來ぬ、尤も雲門の此答には此外に無限の意味がある、前にも云つた如く、雲門の三句と云つて雲門の言葉の中には一句に三句の意味が含蓄されて居る、詳しい事は十四則の時に話したが、何も三句の意味に限つたことではない。つまり簡單な言葉の中に無限の意味が含まれて居ると云ふことで、その雲門の無限の句意を會得するには、つまり充分の修行を積んだ上でなければならぬ。

〔頌〕頌云。倒一説。分一節。同生同死。爲君訣。八萬四千非鳳毛。三十三人入虎穴。別別。擾擾忽忽。水裏月。

〔讀方〕頌に云く、倒一説、分一節、同死、同生、君が爲に訣す。八萬四千鳳毛に非ず。三十三人虎穴に入る。別別、擾擾、忽忽たり、水裏の月。

倒一説とは前の答をそつくり出して、僅か三字でよく答へを示している、分一節とは、其答が俗に符節を合はすが如しと云つて、二つに割つた竹を節と節とピタッと合はせるやうに、能く向ふの間に合致した答だと大變ほめたのである。同生同死君が爲に訣す、雲門は向ふから問ふて來た様に答へた、向ふの僧が生きて來れば生きて答へ、死んで來れば死で答へる、つまり問者答者、去就を一にした答だ。此頃社會問題が大變八釜しくなつて來たが、此間、遠州金谷へ講演に行つた時、特種部落の研究をして居ると云ふ人があつたから、夫は大江天也さんが熱心に研究されて居ると言つたら、其人が云ふに、あの人の研究は唯だ机の上の研究だ、私は特種部落に入つて、部落の人と寝起きを共にして研究したと答へた、成程本當の研究は一度其人と同生同死の苦樂を共にして見なければ分らぬ、こゝでも雲門は問を起して來た僧の状態をちやんと知り盡して居る、即ち同生同死知音の答だ、そこで、倒一説の一句の答へでびつたりと極まつた、君が爲に訣すとはこゝの意だ、君と云ふは僧を指



したと見ても、又普ねく天下人を指したと見てもよい。八萬四千風毛に非ず、之は釋尊のお弟子が八萬四千もあつた、中で迦葉尊者唯一人しか法を傳へられなかつた、所謂拈華微笑の處を云ふたのた、風毛と云ふは支那に古事があつて、つまり師の法を嗣ぎ得る様な好いお弟子の事を云ふたのだ。三十三人虎穴に入る。とは、迦葉尊者を始めとして、西天四七東土二三と云つて、法を嗣いだ人が、印度に四七二十八人、支那に達磨大師を初祖として二三が六人、兩方合せて達磨大師が双方に跨つて居るから一人減じて三十三人となる、此人がたは皆勝れた人ばかりであるが、古人が虎穴に入らざれば虎兒を得ずといつたやうに、そこまで行くのには皆參禪辨道、容易ならぬ修行の辛苦を嘗められたものだ。と云ふ意である。別別、此三十三人は皆實にちがつたえらい人ばかりで皆それく風毛の一つである、茲に別々二つあるが此上の別は一般の祖師がたにかゝり、下の別は雲門を讚めて、雲門は此三十三人中には加はつて居ないが、之も亦鳳毛の一に漏れぬ別な人だと見てもよい。擾擾忽忽たり水裏の月、そうくしいこと、此本則の文字や言葉に著き纏つて、倒一説の言句について色々議論をする者は畢竟、水裏の月と云つて、猿が水中に映つた月を本

當の月と思つて騒ぎ廻つて居るやうなものだ、何ぞ知らん雲門の本當の月はそんな處には居らぬ、別に天上に明皎々と輝いて居るのだ。

第十六則 鏡清草裏漢

【垂示】垂示云。道無橫徑、立者孤危。法非見聞、言思迥絕。若能透過荆棘林、解開佛祖縛、得箇穩密田地、諸天捧花無路、外道潛窺無門。終日行而未嘗行。終日說而未嘗說。便可以自由自在展啐啄之機、用殺活之劍。直饒恁麼、更須知有建化門中一手擡、一手搦、猶較些子。若是本分事上、且得沒交涉。作麼生是本分事。試舉看。

【讀方】垂示に云く、道に横徑無し、立者孤危なり。法は見聞に非ず、言思迥絶す。若し能く荆棘林を透過し、佛祖の縛を解開して、箇の穩密の田地を得ば、諸天花を捧ぐる



に路無く、外道潛に窺ふに門無し。終日行して未だ嘗て行せず。終日説いて未だ嘗て説かず。便ち以て自由自在にして、啐啄の機を展べ、殺活の劍を用ふべし。直饒恁麼なるも、更に須く建化門中、一手擡一手搦あることを知つて、猶ほ些子に較るべし。若し是れ本分の事上ならば、且得没交涉。作麼生か是れ本分の事。試みに擧す看よ。

道に横徑なし。大道には横道も徑路もない。古人は、長安の大道直きこと弦の如し」と云はれた。三祖大師は道を「圓同大虛、無欠無餘」と云はれた。道本圓通で、世界中に道の無い處はない。天は高く地は低く、柳は緑、花は紅。みなこれが道の丸出しである。古人の歌に「梁傳ふねすみの道も道なれど、誠の道ぞ人の行く道」と云ふがある。論語に「我道一以て之を貫く」とあるのもこの事だ。道は蓋天蓋地だ。世界中道のない處はない。しかも唯一つの道で貫いて居る。所謂「横徑なし」だ。處が世間の人は此眞つすぐな道を兎角横にのみ行きたがる。古人の歌に「ならばじな澤邊のかにの横にのみ行けばゆかる」と道はあれども」と云ふがある。要するに兎角世間には一條の眞つすぐな道があるのに、強いて横道や小徑に這入りたがる。立者孤危なり」とは、天には日月

星辰、地には山川草木、何一つ他の力をかりず、皆自分の力で存立して居る。それごとく自分の道を自分の力で歩いて居る。法は見聞に非ず、こゝに法と云ふは道と云ふも同じだ。さて法と云ふものは見ることも聞くことも出来ぬ。維摩經の中に「見聞覺知は見聞覺知にして法にあらず」とある。見聞覺知は分別妄想の上のこと。法は分別妄想を離れたものだから、従つて見聞覺知をも離れたものだ。だから「言思迥絶するの」で、思慮分別から出る言葉や思考などは遙に懸け離れて居る譯だ。此垂示は五段に別れて居る。こゝ迄が一段。若し能く荆棘林を透過し、荆棘林と云ふは、いばりや、かいたちなぞで道を行くのに、誠に邪魔ものである。つまり見聞覺知や妄想分別の事だ。それを斷ち截つて透過せねばならぬ。佛祖の縛を解開して、こゝは荆棘にからまれるばかりでなく、佛祖にも縛られて居る。或は何でも南無妙法蓮華經でなくてはならぬ。とか、六字の名號でなければいかぬなど云つて、佛祖の法に縛られて居る。其の縛を解いてぬけ出て來なければ自由自在の境界は得られぬ。荆棘は一種の病だ。其病を治するには佛祖の妙薬を飲まねばならぬ。處が其妙薬の中毒になつてはならぬ。つまり荆棘は迷、佛祖は悟、迷に引つかゝつては勿論悪いが、さりごとく悟にも縛ら